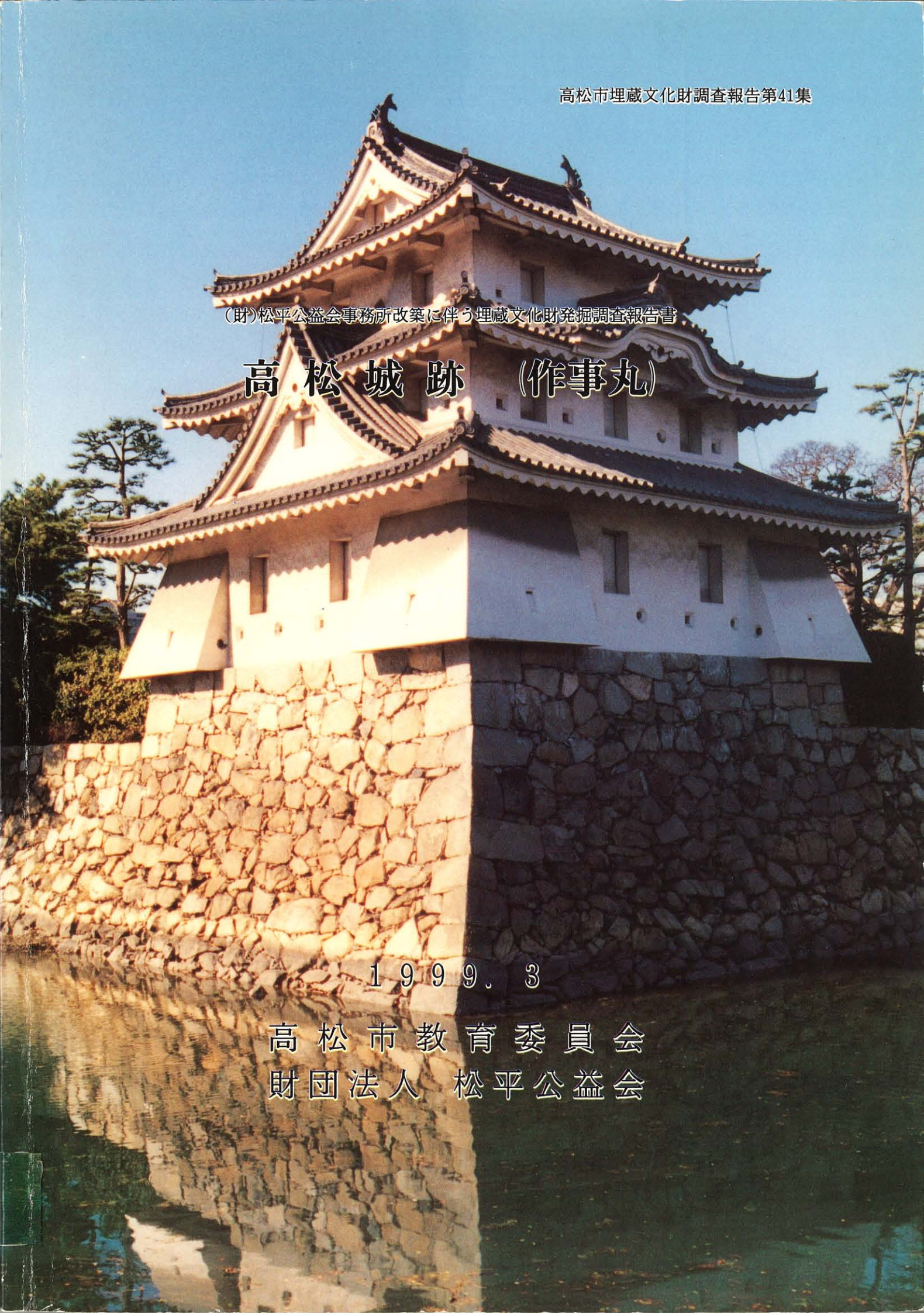
高松市埋蔵文化財調査報告第41集



（財）松平公益会事務所改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

高松城跡（作事丸）

1999.3

高松市教育委員会
財団法人 松平公益会

序　　文

高松市のシンボルとも言うべき高松城は、1588（天正16）年に生駒親正によって築城された城郭です。設計は、かの黒田如水とも言われています。北の守りを内海にゆだね、南方に大手を構えて城下町が展開する「後堅固」の典型的な水城です。豊前の中津城、伊勢の津城とともに日本の三大水城と称されています。「讃州讃岐の高松様の城が見えます波の上～」と歌われているように、瀬戸の沖ゆく船から見ると、まさに波間に漂う楼閣に映ったことでしょう。また、高松城は、万葉の歌人柿本人麻呂の歌「玉藻よし　讃岐の国は国からか～」の枕詞にあやかって「玉藻城」とも呼ばれています。

生駒氏の後に高松に入封した松平氏は、御三家水戸徳川家の出自であり、江戸三百諸侯の中でも別格の存在でした。幕府から中四国の監察役を命じられていたと言われており、その居城である高松城は中四国におけるおさえの城としてさらなる拡張、発展をとげました。それに伴い、城下町も発展をとげ、現在の高松の基礎となりました。

今回の調査で確認された作事丸も、生駒時代には町屋であった場所で、松平氏の修築によって新たに城郭内にとり込まれた部分です。作事丸とは、現代風に言い換えると、工事現場事務所です。城郭の拡張、修築工事においては、この場所で数多くの工事現場の指揮がとられたことでしょう。高松城の発展、ひいては高松の発展の源と言える場所です。

明治以降、城郭の建物の多くは破壊され、堀は埋め立てられ、現在は内郭を残すのみとなっている高松城ですが、緑したたる松樹や白亜の櫓が水面に写る美しい玉藻公園として市民の憩いの場となっています。国の史跡にも指定され、整備も進められています。今後も、祖先から受けついだ貴重な文化財を正しく理解し、より良い形として後世に残し、活用していきたいと思っています。

最後になりましたが、今回の調査に際し、多大なご理解とご協力をいただいた財団法人松平公益会に深くお礼申しあげます。

平成11年３月

高松市教育委員会
教育長　山　口　寮　弐

例　　言

1．本書は、(財)松平公益会の事務所改築に伴う埋蔵文化財調査報告書で、高松市玉藻町に所在する高松城跡(たかまつじょうあと)の調査報告を収録した。

2．調査および整理作業については、高松市教育委員会において実施し、費用については、(財)松平公益会が全額負担した。

3．調査にあたって下記の関係諸機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。

香川県教育委員会　(財)香川県埋蔵文化財調査センター　高松市公園緑地課
地元自治会
東信男(丸亀市教育委員会)　片桐孝浩((財)香川県埋蔵文化財調査センター)
塩崎誠司(香川県教育委員会)　丹羽祐一(香川大学)

4．調査から報告書作成に至るまで下記の方々の協力を得た。記して謝意を表したい。

末光甲正・中西克也(讃岐文化遺産研究会)
山内康郎・信吉純恵(徳島文理大学院)　坂東祐介(徳島文理大学)
川部浩司(花園大学)　十河佐千子・吉本和哉(香川大学)

5．本遺跡の調査は、試掘調査を平成9年6月23日～6月26日まで文化振興課文化財専門員山本英之が行い、本調査を平成9年11月20日～12月25日まで同文化財専門員大嶋和則が行った。整理作業は、上記の学生の協力を得て大嶋が行った。

6．本報告書の執筆は、大嶋・川部が行い、編集は大嶋が行った。執筆分担は下記のとおりである。

大嶋……第1章、第3章、第4章
川部……第2章

7．本文の挿図中で国土地理院発行の2万5千分の1地形図「高松北部」「高松南部」を一部改変して使用した。

8．発掘調査で得られた資料のすべては、高松市教育委員会で保管している。活用されたい。

9．　本書で用いる略号は次のとおりである。

ＳＡ…礎石列　ＳＢ…礎石建物　ＳＫ…土坑　ＳＰ…柱穴

目　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の経過 …… 1
　第３節　整理作業の経過 …… 2

第２章　地理的・歴史的環境 …… 5

第３章　調査の成果 …… 8
　第１節　調査地点の位置 …… 8
　第２節　試掘調査結果 …… 8
　第３節　基本層序と調査の概要 …… 10
　第４節　第６遺構面 …… 16
　第５節　第５遺構面 …… 16
　第６節　第４遺構面 …… 63
　第７節　第３遺構面 …… 67
　第８節　第２遺構面 …… 72
　第９節　第１遺構面 …… 73

第４章　まとめ …… 74
　第１節　周辺調査地および絵図との対応 …… 74
　第２節　高松城東ノ丸出土丸瓦の変遷について …… 80

遺物観察表 …… 84

写真図版 …… 89

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図 …… 3
第２図　調査地位置図 …… 4
第３図　周辺遺跡分布図 …… 7
第４図　試掘トレンチ平面図 …… 9
第５図　調査区北壁土層断面図 …… 10
第６図　第１遺構面平面図 …… 12
第７図　第３遺構面平面図 …… 13
第８図　第４遺構面平面図 …… 14
第９図　第５遺構面平面図 …… 15
第10図　瓦列状遺構平・立面図 …… 17
第11図　瓦列状遺構平瓦実測図① …… 19
第12図　瓦列状遺構平瓦実測図② …… 20
第13図　瓦列状遺構平瓦実測図③ …… 21
第14図　瓦列状遺構平瓦実測図④ …… 22
第15図　瓦列状遺構平瓦実測図⑤ …… 23
第16図　瓦列状遺構平瓦実測図⑥ …… 24
第17図　瓦列状遺構平瓦実測図⑦ …… 25
第18図　瓦列状遺構平瓦実測図⑧ …… 26
第19図　瓦列状遺構平瓦実測図⑨ …… 27
第20図　瓦列状遺構平瓦実測図⑩ …… 28
第21図　瓦列状遺構平瓦実測図⑪ …… 29
第22図　瓦列状遺構平瓦実測図⑫ …… 30
第23図　瓦列状遺構平瓦実測図⑬ …… 31
第24図　瓦列状遺構平瓦実測図⑭ …… 32
第25図　瓦列状遺構平瓦実測図⑮ …… 33
第26図　瓦列状遺構平瓦実測図⑯ …… 34
第27図　瓦列状遺構丸瓦実測図① …… 35
第28図　瓦列状遺構丸瓦実測図② …… 36
第29図　瓦列状遺構丸瓦実測図③ …… 37
第30図　瓦列状遺構丸瓦実測図④ …… 38
第31図　瓦列状遺構丸瓦実測図⑤ …… 39
第32図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図① …… 40
第33図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図② …… 41

第34図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図③ …… 42
第35図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図④ …… 43
第36図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑤ …… 44
第37図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑥ …… 45
第38図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑦ …… 46
第39図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑧ …… 47
第40図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑨ …… 48
第41図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑩ …… 49
第42図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑪ …… 50
第43図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑫ …… 51
第44図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑬ …… 52
第45図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑭ …… 53
第46図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑮ …… 54
第47図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑯ …… 55
第48図　瓦列遺構周辺出土遺物実測図① …… 56
第49図　瓦列遺構周辺出土遺物実測図② …… 57
第50図　瓦列遺構周辺出土遺物実測図③ …… 58
第51図　ＳＫ－509断面図 …… 59
第52図　ＳＫ－509出土瓦実測図① …… 60
第53図　ＳＫ－509出土瓦実測図② …… 61
第54図　ＳＫ－509出土瓦実測図③ …… 62
第55図　ＳＫ－401断面図 …… 63
第56図　ＳＫ－401出土遺物実測図 …… 63
第57図　ＳＫ－403断面図 …… 63
第58図　ＳＫ－403出土遺物① …… 64
第59図　ＳＫ－403出土遺物② …… 65
第60図　ＳＫ－403出土遺物③ …… 66
第61図　ＳＫ－302断面図 …… 68
第62図　ＳＫ－302出土遺物実測図 …… 68
第63図　ＳＫ－304断面図 …… 68
第64図　ＳＫ－304出土遺物実測図 …… 68
第65図　ＳＫ－306断面図 …… 68
第66図　ＳＫ－306出土遺物実測図 …… 68
第67図　ＳＫ－309断面図 …… 69
第68図　ＳＫ－309出土遺物実測図 …… 69
第69図　ＳＫ－311断面図 …… 69

第70図　ＳＫ－311出土遺物実測図 …… 69
第71図　ＳＫ－316断面図 …… 70
第72図　ＳＫ－316出土遺物実測図 …… 70
第73図　ＳＤ－302断面図 …… 70
第74図　ＳＤ－303断面図 …… 71
第75図　ＳＤ－303出土遺物実測図 …… 71
第76図　ＳＤ－304断面図 …… 71
第77図　ＳＤ－304出土遺物実測図 …… 71
第78図　ＳＤ－305断面図 …… 72
第79図　ＳＤ－305出土遺物実測図 …… 72
第80図　調査地周辺遺構配置図 …… 77
第81図　『高松城全図』写図 …… 78
第82図　『高松城全図』写図（拡大） …… 79
第83図　高松城東ノ丸下層石垣出土瓦① …… 81
第84図　高松城東ノ丸下層石垣出土瓦② …… 82

写真図版目次

1　調査前全景 …… 90
2　ＳＡ－301検出状況 …… 90
3　第３遺構面完掘状況 …… 91
4　第６遺構面完掘状況 …… 91
5　ＳＢ－301 …… 92
6　ＳＡ－301　ＳＢ－301 …… 92
7　瓦出土状況 …… 93
8　ＳＫ－509 …… 93
9　瓦列検出状況 …… 94
10　瓦列実測風景 …… 94
11　瓦列検出状況 …… 95

挿　表　目　次

整理作業行程表 …… 2
高松城跡調査歴一覧表 …… 76
高松城東ノ丸出土丸瓦編年表 …… 83
遺物観察表No. 1 …… 84
遺物観察表No. 2 …… 85
遺物観察表No. 3 …… 86
遺物観察表No. 4 …… 87
遺物観察表No. 5 …… 88

第１章　　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

平成９年５月(財)松平公益会事務所改築に伴い、埋蔵文化財の所在の有無の照会が高松市教育委員会に対してあった。当地区は、高松城跡の史跡指定地範囲外であるが、明らかに高松城跡の東ノ丸に位置するため、当初から埋蔵文化財の包蔵地であることが想像できた。ただし、調査地は市街地であり、また、明治時代においては、陸軍省の建物などが建築されたこともあり、地下遺構の残存状況が悪く、調査の対象とならない場合も想定できた。このため、埋蔵文化財の有無、残存状況、遺構密度、遺構面数、掘削土量などを知るため、試掘調査を行い、その結果から本調査の必要性の有無、調査にかかる期間・費用などを検討することで(財)松平公益会と合意した。

試掘調査は、高松市教育委員会が高松市内遺跡調査事業として平成９年６月23日～６月26日の間で行った。調査については、山本があたった。試掘調査の結果、３面におよぶ整地面が確認されたほか、築地塀の基礎と思われる石列を検出し、コンテナ19箱分の遺物が出土した。石列は、高松城東ノ丸における具体的な施設の様子は、明治期の絵図等、一部の資料を除いてほとんど知られてないことから、高松城の城部施設の変遷を明らかにする上では重要な遺構である。加えて、周辺では、香川県民ホール、香川県歴史博物館(建設中)等の建設に伴い、香川県教育委員会、(財)香川県埋蔵文化財調査センターがこれまで発掘調査を実施してきており、数次にわたる東ノ丸石垣の変遷、艮櫓、鹿櫓の礎石・礎石建物等を明らかにしており、関連する遺構が存在する可能性も高い。以上から改築予定地全面について何らかの保護措置が必要であると考えられた。

この試掘調査結果をもとに、再度、(財)松平公益会と協議を行った結果、平成９年10月８日に、高松市教育委員会と(財)松平公益会の間で、事務所改築前に発掘調査（記録保存）を行い、それにかかる費用については(財)松平公益会が全額負担する旨の協定書を締結した。事務所改築については、平成10年１月から行うため、平成９年中に調査を行うことで合意した。

第２節　調査の経過

前述のような試掘調査結果、協定書の締結を受け、平成９年11月17日～12月22日の間で本調査を実施した。調査面積は事務所建坪全域の約300㎡である。
調査の経過は次の調査日誌のとおりである。

調査日誌抄

平成９年	11月17日	（雨）	本日より作業開始。
	11月20日	（晴）	第３遺構面遺構検出作業。礎石、土坑などを検出。
	12月１日	（晴）	第３遺構面完掘。
	12月２日	（曇）	第４遺構面まで包含層(整地土)掘削。

12月５日　（晴）　第４遺構面遺構検出作業。８日にかけて遺構掘削。
12月９日　（曇）　第５遺構面まで包含層(整地土)掘削。掘削中に瓦列検出。
12月10日　（曇）　瓦列出土状況作成。
12月15日　（晴）　第５遺構面遺構検出および遺構掘削。
12月16日　（晴）　第５遺構面完掘。
12月20日　（曇）　瓦列周辺の瓦とりあげ。
12月22日　（曇）　撤収作業。埋め戻し等を行い、調査終了。

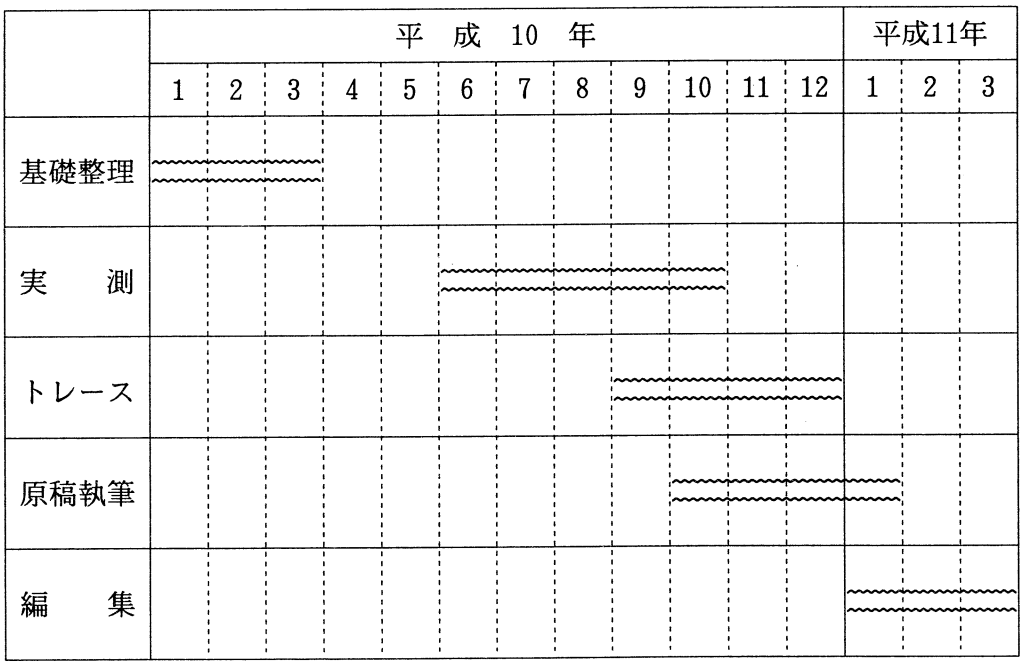
発掘調査従事者

岩田　明　　喜岡　茂　　桜又　愛子　　高木　繁夫　　武重美智代
千馬　正弘　　千馬由紀子　　信吉　純恵　　坂東　祐介　　藤原登美子
松内　朝彦　　光本　邦子　　山内　康郎

第３節　整理作業の経過

整理作業は、発掘調査終了後に、古高松現場事務所で行った。基礎整理を平成９年度中に、実測から報告書作成については平成10年度において実施した。整理作業の経過は次のとおりである。

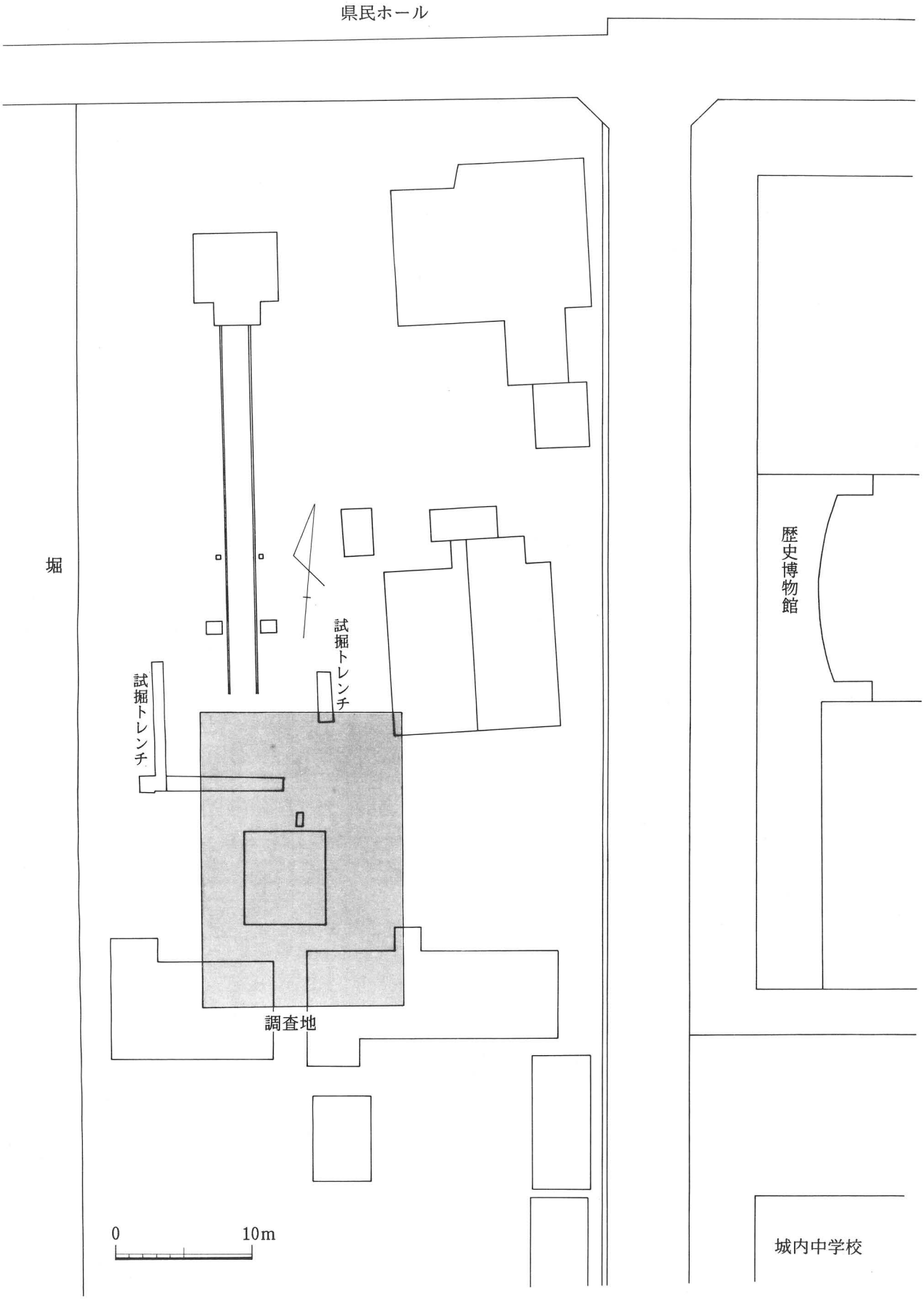
整理作業行程表



整理作業従事者

川部　浩司　　十河佐千子　　信吉　純恵　　坂東　祐介　　山内　康郎　　吉本　和哉

第１図　調査地位置図



第2図　調査地位置図

第２章　地理的･歴史的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に、低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地、東側が立石山山地によって取り囲まれた東西20km、南北16kmの範囲に及んでいる。いずれの山地も花崗岩の上に緻密で侵食を受けにくい安山岩がキャップロックと呼ばれる形でかぶさっており、そのため侵食解析から取り残された台状の平坦面を有する山地（メサ）あるいは孤立丘（ビュート）となっている。西側の五色台は、平坦な頂部をよく残しており、屋島もまた同様に解析から取り残された台地である。東側の立石山山地はこれらより解析が進んでおり、紫雲山・白山・由良山などの多数の孤立丘とともに高松平野の自然景観を特徴付けている。

高松平野は、これら侵食が進んだあと、沖積世に入ってから堆積されて形成されたもので、讃岐山脈から流下し、北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川を主体として本津川・春日川・新川などによって運搬された堆積物により緩やかな傾斜の扇状地を形成している。

高松城は、高松平野（沖積地）の先端に位置し、現在の高松市街地は城下町として発展してきた。市街地形成前の旧地形は、石清尾山塊の東麓に所在する栗林公園（藩主松平氏の庭園）の周辺地名に「室町」があることから、この付近まで入り海であったと考えられる。このことは、南海通記の『讃州高松府記』に、「香河郡篦原郷に究境の地あり、住古より河水の流れ久しく海中に入りて地より八町沖に白砂集まり、須賀を生じ野原の庄に相続き、西浜・東浜とて漁村有り、又郡中に山ありて南北に横たわる。（中略）この山大江の東なれば江東のはなという也。この山と西浜の中間潮入りにて坂田室山の下まで入り海也。東は野方口坂田中河原まで潮のさし引きあり、中筋十八町白砂海中に入ること一筋の矢のごとし、故に篦原と名付也。」とあることからも伺える。

近年の都市化の波に市街地は郊外に広がり、道路網の整備等、内陸部にも開発の区域が広がっており充実してきたといえる。

高松平野では、昭和60年代に入って高松東道路建設・太田第２土地区画整備事業・空港跡地再開発などの大規模プロジェクトに伴い埋蔵文化財の確認調査ならびに発掘調査の件数が飛躍的に増大したことにより遺跡数も増加の一途を辿っている。今後、未確認遺跡の把握と保護に加えて、これまでの調査成果を時間的・空間的に結び付けて高松平野の歴史的環境の変遷を復元する作業が新たに必要となっている。

高松平野で最古の遺跡は旧石器時代に溯り、久米池南遺跡、雨山南遺跡等の遺跡が知られている。

縄文時代については、大池遺跡が以前から報告されており、また、近年平野部の発掘調査によって縄文晩期を中心とした遺跡確認例の増加が際立っている。

弥生時代になると、前期の遺跡は小範囲にかたまって点在しており、中期には遺跡の規模が増大し、平野縁辺部や丘陵上には高地性集落が営まれるようになる。後期になると遺跡の数、規模共に爆発的に増加する傾向が見られる。

古墳時代では、弥生時代後期から古墳時代初期に至るまで集落が存続している遺跡もあり、弥生から古墳への過渡期を示す資料を知ることができる。また、古墳時代全般を通して集落・生産遺跡の遺跡数は希薄であり、このことは、古墳の造営が全市域的に盛んであるのと対照をなしており今後古墳の造営母体となるべき集落域の解明が重要な課題となるものと思われる。古墳としては、発生期と考えられる鶴尾神社４号墳などを皮切りに、石清尾山塊では猫塚、石船塚等から成る前期の

古墳として有名な石清尾山古墳群が築造された。その後ほぼ古墳時代全期間を通じて地域単位で断続的に展開している。

古代では条里遺構と古代寺院跡が注目される。条里遺構の多くは古いものでも平安時代から鎌倉時代、多くは近世以降の遺物を含み一般に条里の施行期とされる奈良時代とは時期的に隔たっているが、溝の存続期間と遺構としての埋没時期の関係など、検討すべき多くの問題をはらんでいる。古代寺院跡としては、寺院跡の中のいくつかには地域単位の後期古墳群の分布と一致する傾向が強いことから、古墳時代後期から古代への転換期に地域単位の造墓集団が寺院建築への転向を図ったものと考えられる。

近世以降では、旧河道が埋没していく過程の凹地に小規模な区画の水田面が見られる出土検出例があり、その後現在に至るまで連続して水田層の堆積が確認されることから、この時期までに現在の地形環境がほぼ形作られていたことが推測される。また、平野部北側に所在する遺跡の希薄性から見れば、栗林公園－松縄－古高松あたりが旧海岸線として少なくとも奈良時代頃まで同一の地形を呈していたと考えられる。しかし、旧海岸線は徐々に陸地化が進んで行くのであるが平安時代末期に篦原郷と呼ばれ皇室御領の荘園安楽寿院領となり、鎌倉時代には大覚寺の荘園となったとされている地は、徐々に中洲が発達していったことが考えられる。

豊臣秀吉の四国征伐により、天正13年（1585）長曽我部元親が降伏し、讃岐は仙石秀久・十河存保に与えられ、その後尾藤知宣の領国となったが、天正15年（1587）生駒親正が入封し、讃岐17万石を領した。高松城は、翌天正16年（1588）から築城を開始し、数カ年を要して完成させた大規模な水城であり、城の南側には城下町が形成された。築造は、地形状況から安定した中洲を利用しており、ある程度の土盛造成で城郭を形成しうるまで中洲の発達が見られる。高松城は、北の守りを内海にゆだね、南方に大手（旧太鼓門）を構えて城下町が展開する「後堅固」の典型的な水際城である。堀には海水が導かれ、天守閣・二ノ丸・三ノ丸・帯曲輪などの配置は城郭史上特色のあるものである。

寛永19年（1642）には生駒氏に代わって讃岐に入封した松平頼重が、城郭の改修・新築を行っている。これらの造成によって三ノ丸は北と東へ拡張し、東ノ丸が造成された。この造成によってできたのが月見櫓・続櫓・水手御門・渡櫓等であり、水手御門からは直接海への出入りができるようになっていた。しかし、明治37年（1904）の埋立により、高松城の北側は海から離れてしまうという状況になり、現状では、本丸・二ノ丸・三ノ丸・桜馬場・内堀・中堀の一部しか残されているに

高松城の発掘調査は、高松市教育委員会をはじめ、香川県教育委員会や財団法人香川県埋蔵文化財調査センターによって、現在まで17次を数える。また、紺屋町遺跡等の発掘調査により、城下の町屋の一端を知る上でも貴重な資料を提供しており、これらの地道な調査によって、高松城及び周辺の状況が小規模ながらも明確になってきた。しかし、まだまだ不明な点も多く、更なる調査研究を必要としているのが現状であり、今後の調査成果に大きく期待したいものである。

〈参考・引用文献〉

香川県教育委員会『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』 1987.3
高松市教育委員会「史跡高松城」『高松市文化財調査報告書』 1991.3

1．史跡高松城跡	2．紺屋町遺跡	3．中ノ村城跡	4．北大塚北方１号
5．石船塚古墳	6．石船塚東方古墳	7．稲荷山３号墳	8．稲荷山２号墳
9．稲荷山５号墳	10．稲荷山北端１号墳	11．稲荷山北端２号墳	12．稲荷山北端３号
13．稲荷山北端４号墳	14．稲荷山姫塚古墳	15．稲荷山４号墳	16．稲荷山１号墳
17．奥ノ池１～23号墳	18．室山城跡	19．松並中所遺跡	10．西ハゼ土居遺跡
21．東中筋遺跡	22．鹿原遺跡	23．天満宮西遺跡	24．松縄城跡

第３図　周辺遺跡分布図

第３章　調査の成果

第１節　調査地点の位置

当該調査地点は、史跡高松城の東側に内堀を隔てて隣接する。現在は、史跡指定地外として民間家屋や公共施設が立ち並んでいるが、松平家入封後の1670年代に東ノ丸として新たに城郭内に取り込まれた区域にあたる。

東ノ丸の縄張りは、これまでに残されている数面の城内図や周辺部での発掘調査成果から類推することができる。城内図のうち『高松城内図』は、製作年代が不明ながら、三ノ丸の拡張部および東ノ丸が描かれていることから、これら新郭の造成後のものと考えられ、絵図中に書き込まれた敷地の間数も東ノ丸復元の参考となる。『高松城内図』では、東ノ丸の東西は47間（84.6m）と記されている。東ノ丸の東辺は、現在建設が進められている香川県歴史博物館の予定地内にフェリー通りから西約20mの部分で確認されていることから、これより東ノ丸西辺の位置を逆算すると、ほぼ現在の内堀の等辺が東ノ丸の西辺と考えてよいと思われる。また、県民ホールの建設に伴う発掘調査の際には、敷地の西端付近で鹿櫓から南へ続く石垣を確認しており、この延長が現在の内堀東辺に当たることも先の推定とは矛盾しない。

なお、東ノ丸は北寄り56間（100.8m）が米蔵丸、南寄り30間（54m）が作事丸であったことから、調査箇所はこのうち作事丸の北半にあたるものと思われる。

一方、東ノ丸造成前の様子は『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』（寛永16／1639年頃）によってうかがうことができる。これによると東ノ丸造成の際に三ノ丸は東に20間拡張され、これに伴って東内堀も東寄りに新たに掘削されたと考えられるため、生駒時代には「いほのたな（魚屋）町」の西列にあたり、さらに西側の蔵屋敷、武家屋敷の家並は現在の内堀に相当すると思われる。

以上から、調査地は生駒期にあたっては高松城外（いほのたな町）、松平氏による東ノ丸築造以後については東ノ丸内の作事丸北半付近と推定できる。

〈参考文献〉

真鍋昌宏他　『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』香川県教育委員会　1987
次田吉治他　『高松市歴史資料館常設展示図録』高松市歴史資料館　1993
森下友子　「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅳ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1996

第２節　試掘調査結果

試掘トレンチは、（財）松平公益会敷地内御廟前庭部分の概ね新事務所の建設予定範囲内に４本を設定した。このうち第３・第４トレンチについては撹乱が著しく、遺構は検出できていない。

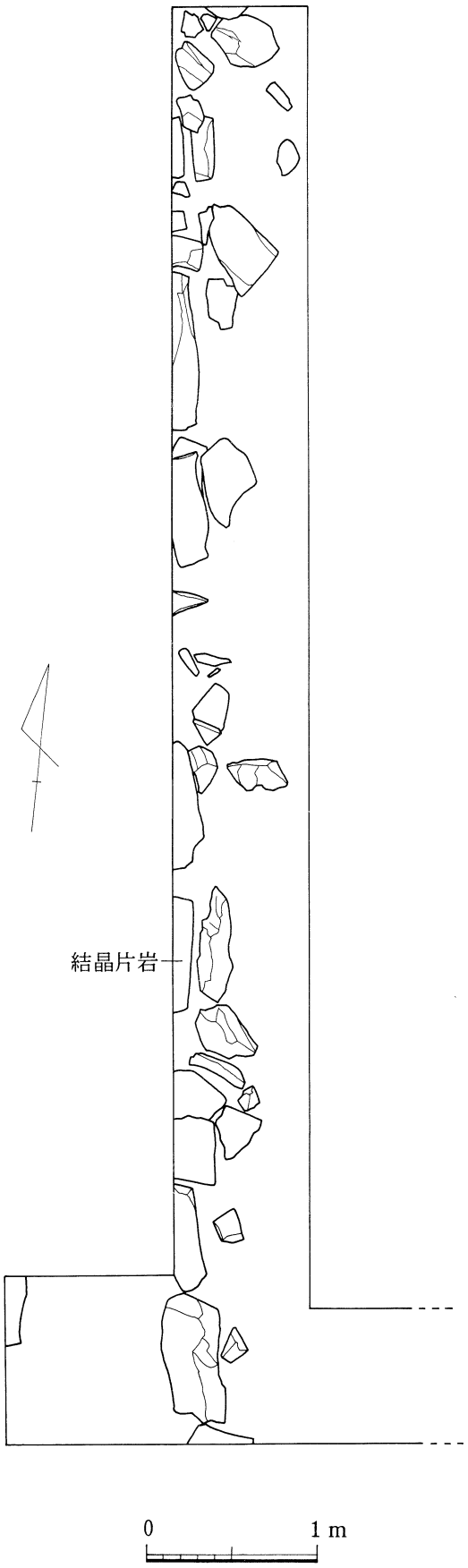
第２トレンチでは上層から、第１層表土層（10㎝）、第２層焼土層（10㎝）、第３層褐色砂礫層

（20㎝）、第４層黒色シルト層（20㎝）、第５～７層瓦片を含む客土層（各10㎝）、第８層褐色砂礫層（50㎝）、第９層海砂利層の堆積が見られた。第２層は第２次大戦の際の高松空襲による焼土層、第３層は遺物から明治以降の客土層と考えられる。第４層は埋土中に大量の瓦の廃棄が見られ、第４層を除去した面（第５層上面）には石列状の遺構が見られた。第５・６・７層の客土層上面では遺構を確認できず、遺構面となるか単なる地行（整地）のための客土層かは不明であるが、周辺の調査例から遺構面になり得る可能性は高いといえる。第８・９層は海岸の自然堆積層である。

第２トレンチの第５層上面で確認された石列は、南北に延長約８ｍ、幅約80㎝の掘削範囲の西壁に沿って確認された。人頭大から１ｍほどの安山岩または花崗岩の自然塊石を長辺を南北にそろえて一列に配したもので、トレンチ全域にわたっていた。石材の上面は必ずしも平坦ではなく、高さも石材ごとにまちまちであったため、建物の柱を受ける礎石ではない。

石列の東側には人頭大の塊石が散乱しており、石垣の控え積みとも考えられたため、一部西側に拡張して石列西面の並びを確認したところ、西側には石塊の散乱は見られず、ほぼ西側の面をそろえているように見受けられた。また、石材は検出された石材一段のみで石垣状の段築は見られなかった。石列の西側約80㎝のところで、東に面を合わせた石材１点が出土したが、石材の標高が石列と異なっているため、石列と関連を持つ可能性は低く、また、石列との間の埋土は堅く締まって安定的であることから排水路の護岸石とも認められない。状況から築地塀の基礎等に用いられた石列と考えられる。

遺物については、第１トレンチからコンテナ５箱、第２トレンチから19箱が出土した。大部



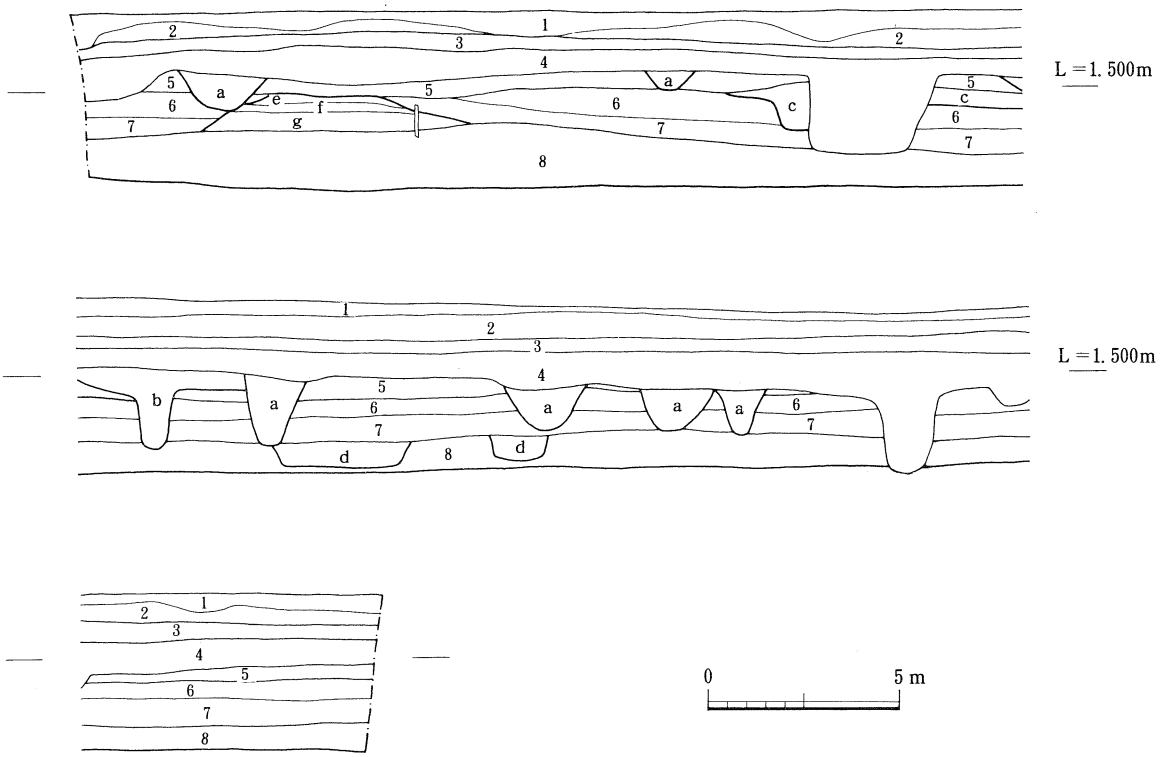
第４図　試掘トレンチ平面図

分が瓦片で、若干の染付、擂鉢片等の雑器類が混じる。

以上から、改築予定地全面について保護措置が必要と考えられた。

第3節　基本層序と調査の概要

調査区内は撹乱が多く、調査区の北壁のみ良好な土層堆積状況を確認することができたので北壁の土層断面で基本層序とした。試掘調査で確認された表土は約10㎝の堆積があるが、調査前に構造物の基礎撤去時に剝ぎとられていた。本調査での第1層は、高松空襲による焼土層で、埋土中には瓦片を多く含む。第2層は黄灰色シルト質極細砂層で、埋土中の遺物より大正～昭和初期のものと思われる。第3層は灰黄色シルト質極細砂層で、瓦および礫を多く含み、明治のものと考えられる。第4層は炭・焼土・瓦を多く含む黒色粘土層で幕末頃の堆積層と思われる。第5層は黄灰色粘土層で整地土層と思われる。第6層のにぶい黄色の礫層、第7層の灰色細砂層についても整地土層と思われる。第8層は黄灰色細砂層で、海岸部の自然堆積層であると思われる。



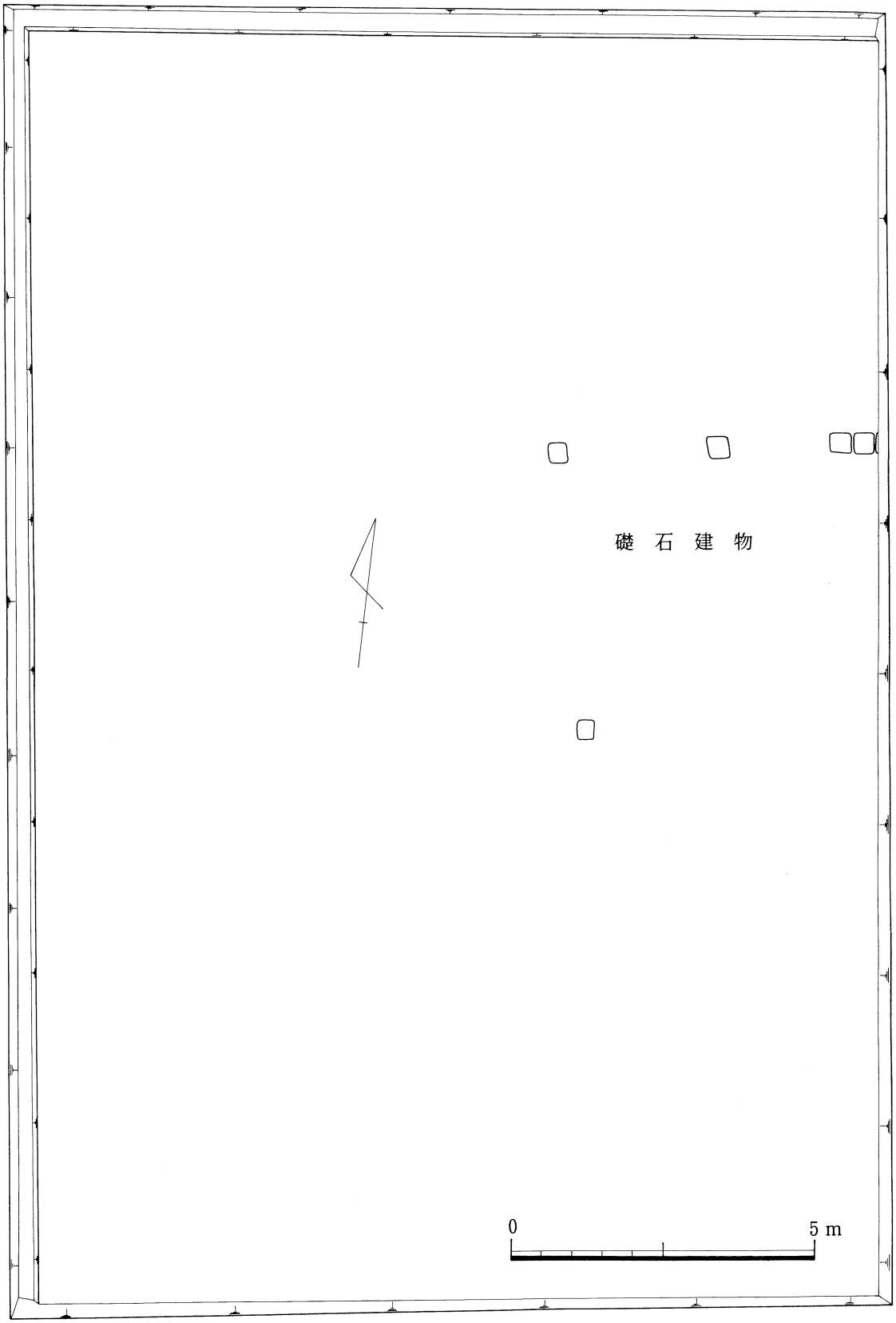
1　焼土(瓦を多く含む)…高松空襲
2　2.5Y5/1黄灰　シルト質極細砂…大正～昭和初期
3　2.5Y6/2灰黄　シルト質極細砂(礫・瓦を多く含む)…明治
4　10YR2/1黒　粘土(炭・焼土・瓦を多く含む)…幕末～明治
5　2.5Y5/1黄灰　粘土…幕末
6　2.5Y6/3にぶい黄　礫…江戸後期
7　5Y5/1灰　細砂…江戸中～後期
8　2.5Y6/1　細砂…東ノ丸築造以前
a　10YR2/2黒褐　粘土
b　2.5Y7/2灰黄　粘土(炭多く含む)
c　2.5Y7/3浅黄　シルト質粘土(炭多く含む)
d　2.5Y4/1黄灰　シルト質極細砂
e　2.5Y7/3浅黄　粘土
f　2.5Y6/3にぶい黄　礫
g　2.5Y5/2黄灰　シルト質極細砂

第5図　調査区北壁土層断面図

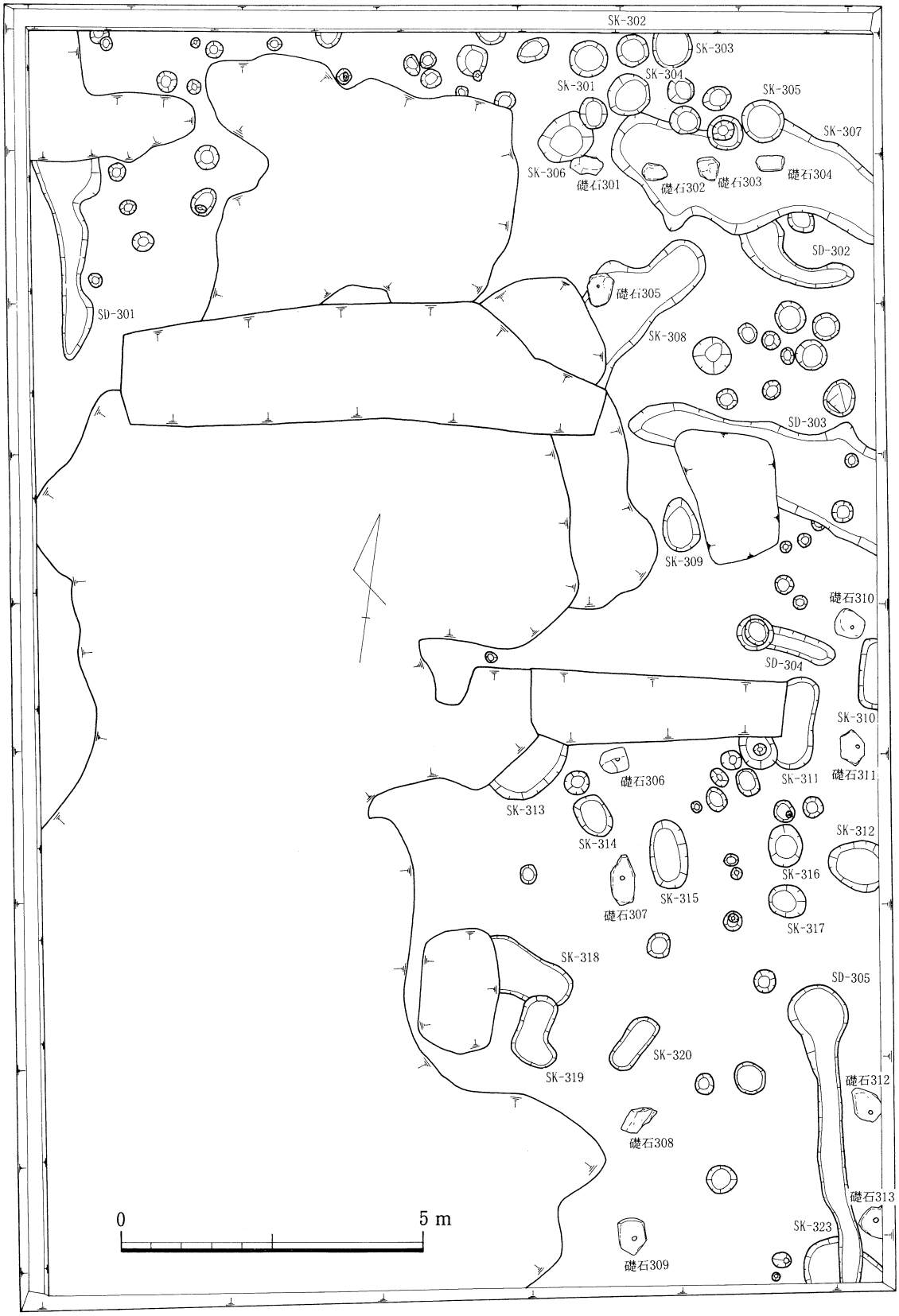
遺構面は6面を数える。第3層上面、第4層上面、第5層上面、第6層上面、第7層上面、第8層上面である。第3層上面は明治23年以降の遺構面、第4層上面は幕末～明治、第5層上面は19世紀、第6層上面は18世紀後半、第7層上面は17世紀末から18世紀前半、第8層上面は東ノ丸築造（1671年）以前と考えられる。それぞれを第1～第6遺構面とする。第4遺構面については、第6層の整地土層が北半のみしか存在していないため、北半のみにおいて存在する遺構面である。

遺物は調査区全体でコンテナ50箱分出土した。そのほとんどが瓦片であり、わずかに土師器や陶磁器類が出土したに過ぎず、このため、詳細な年代決定を困難にしている。

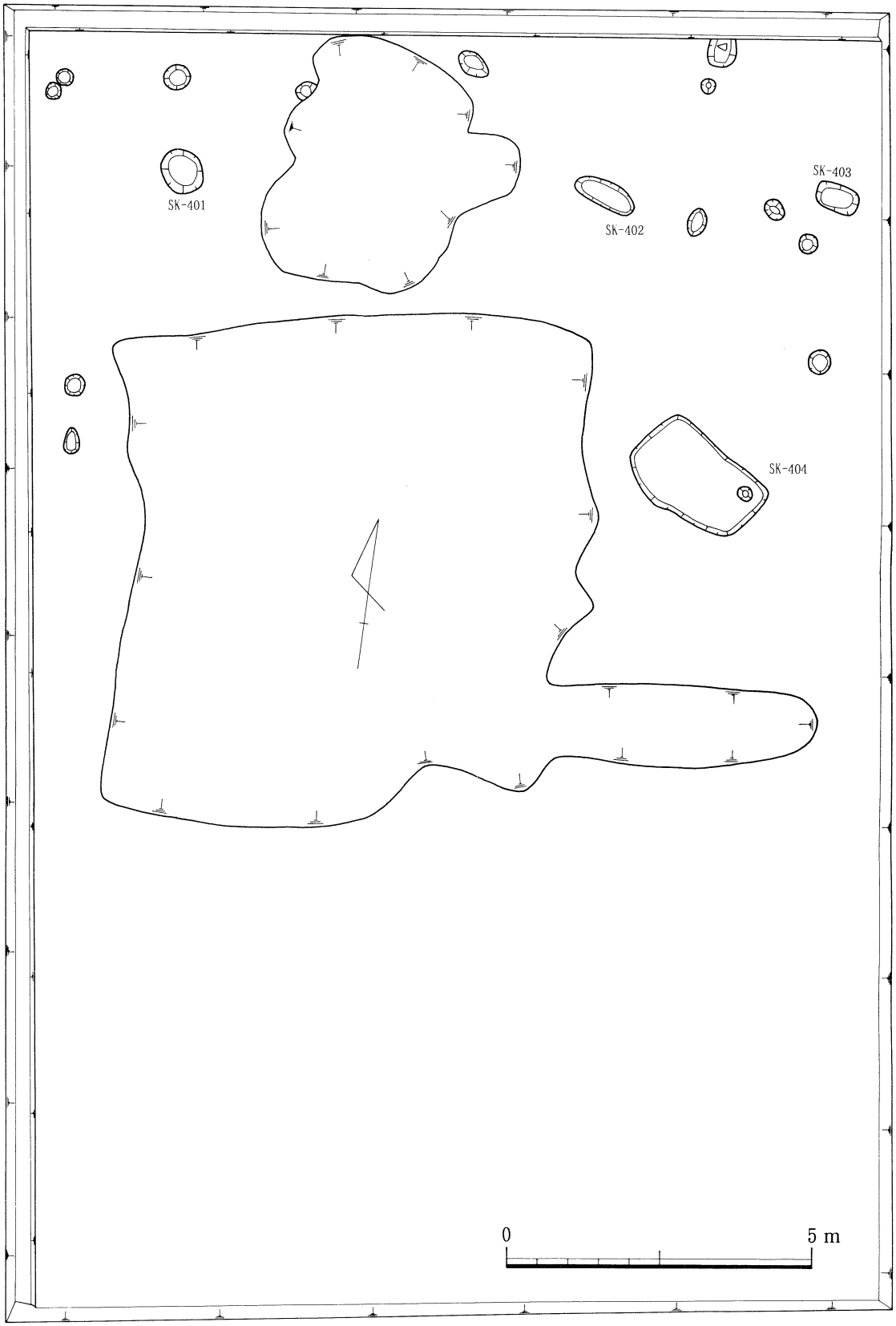
以下、各遺構面について述べていく。



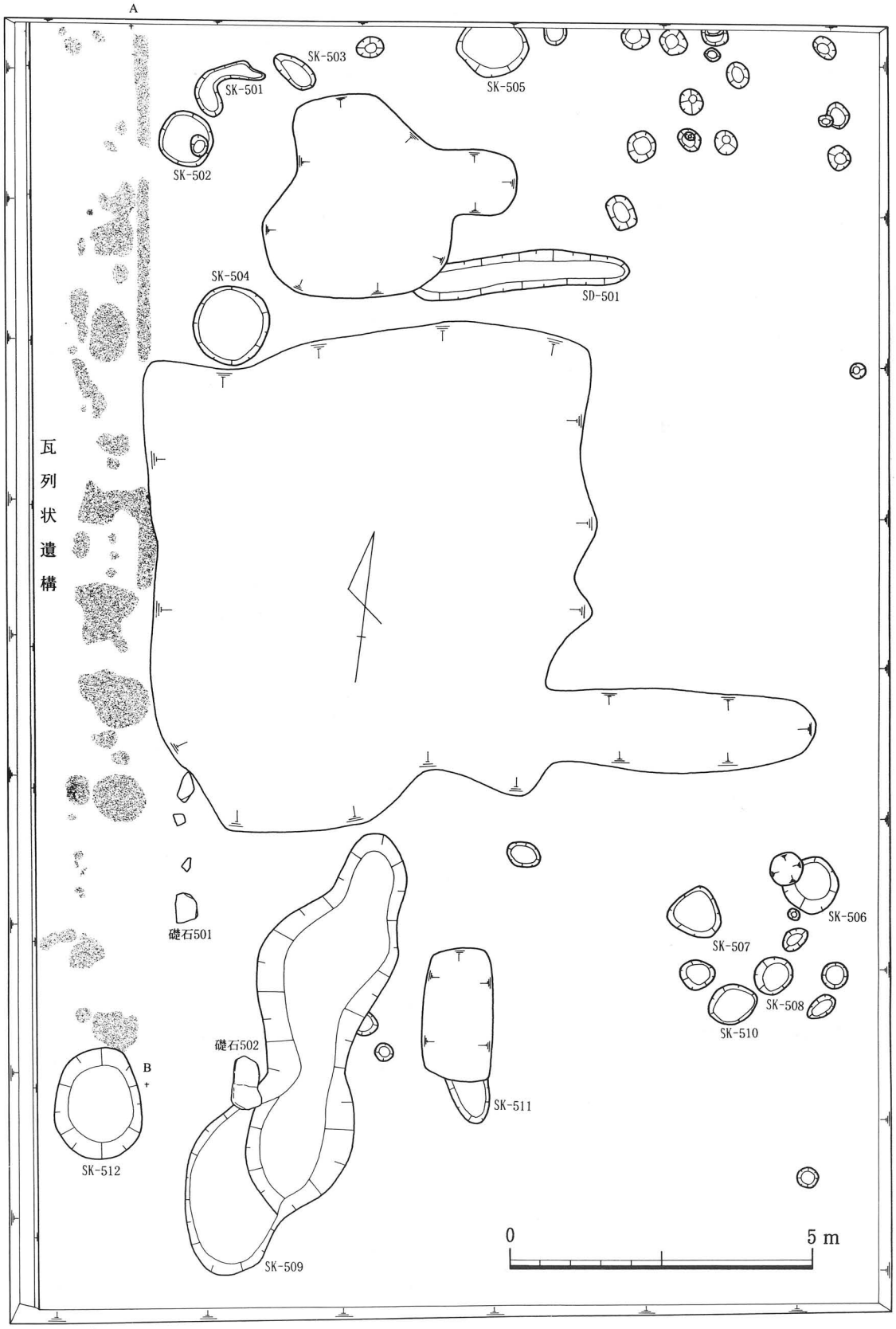
第6図　第1遺構面平面図



第７図　第３遺構面平面図



第8図　第4遺構面平面図



第 9 図　第 5 遺構面平面図

第４節　第６遺構面

遺構は確認できなかったが、第８層（海砂利層）の上面を第６遺構面とした。調査地北側の県民ホールの調査で15世紀頃の火葬墓群が検出されている面と同一面であると思われる。海砂利層が堆積していることから、築城以前は海浜部であったことがうかがえる。なお、上層の遺構や包含層中には弥生後期の甕および製塩土器が数点混入していた。周辺の調査例でも同様に弥生土器が出土していることからも、周辺に弥生の遺跡が存在する可能性を示唆するものである。

第５節　第５遺構面

灰色細砂の整地土層（第７層）上面において検出した遺構面である。出土遺物の大半が瓦であるため詳細な年代決定はできないが、松平氏による東ノ丸築造（1671年）以降で、17世紀末～18世紀前半頃の遺構面と思われる。検出遺構としては、土坑12基、溝１条、ピット26基、礎石、瓦列状遺構がある。

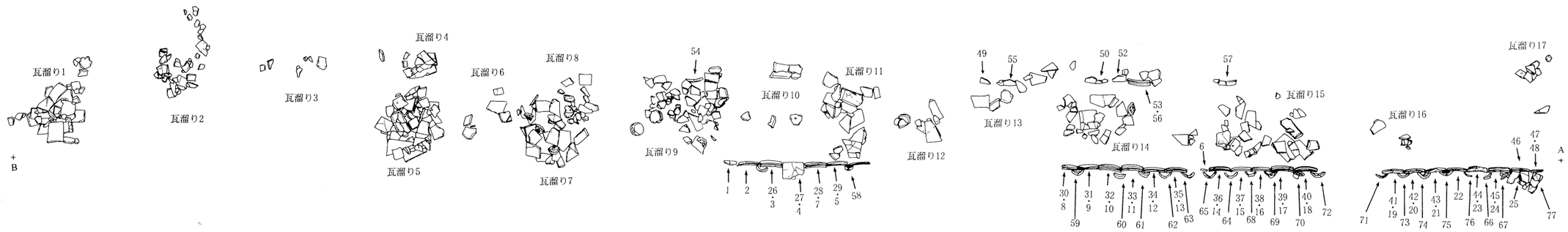
瓦列状遺構

調査区の西端部分において南北に細長く瓦が密集した状態で検出した遺構である。幅約１ｍ、検出部分の長さ約17.5ｍを測り、南側は攪乱のため不明であるが、調査区の北壁に瓦が見えていることから、少なくとも北側には遺構が延びることがうかがえる。上層の整地土層や上層遺構および現代の攪乱等により削平を受け、残存状況は極めて悪いが、比較的残存状況の良好な北半部分においてその全容を推測することができる。遺構の東西両側には、凹面を外側に向けた状態で平瓦を二枚重ねて南北方向に立ち並べ、さらにそのつぎ目部分の外側には凸面を外側に向けた状態で軒丸瓦を瓦当面を上に向け立てらせている。東西両側面から見ると、平瓦と軒丸瓦が交互に所在するように見える。つまり、屋根に瓦を葺いた状態を呈している。瓦列は、調査区の西側に隣接する内堀に平行して構築されている。

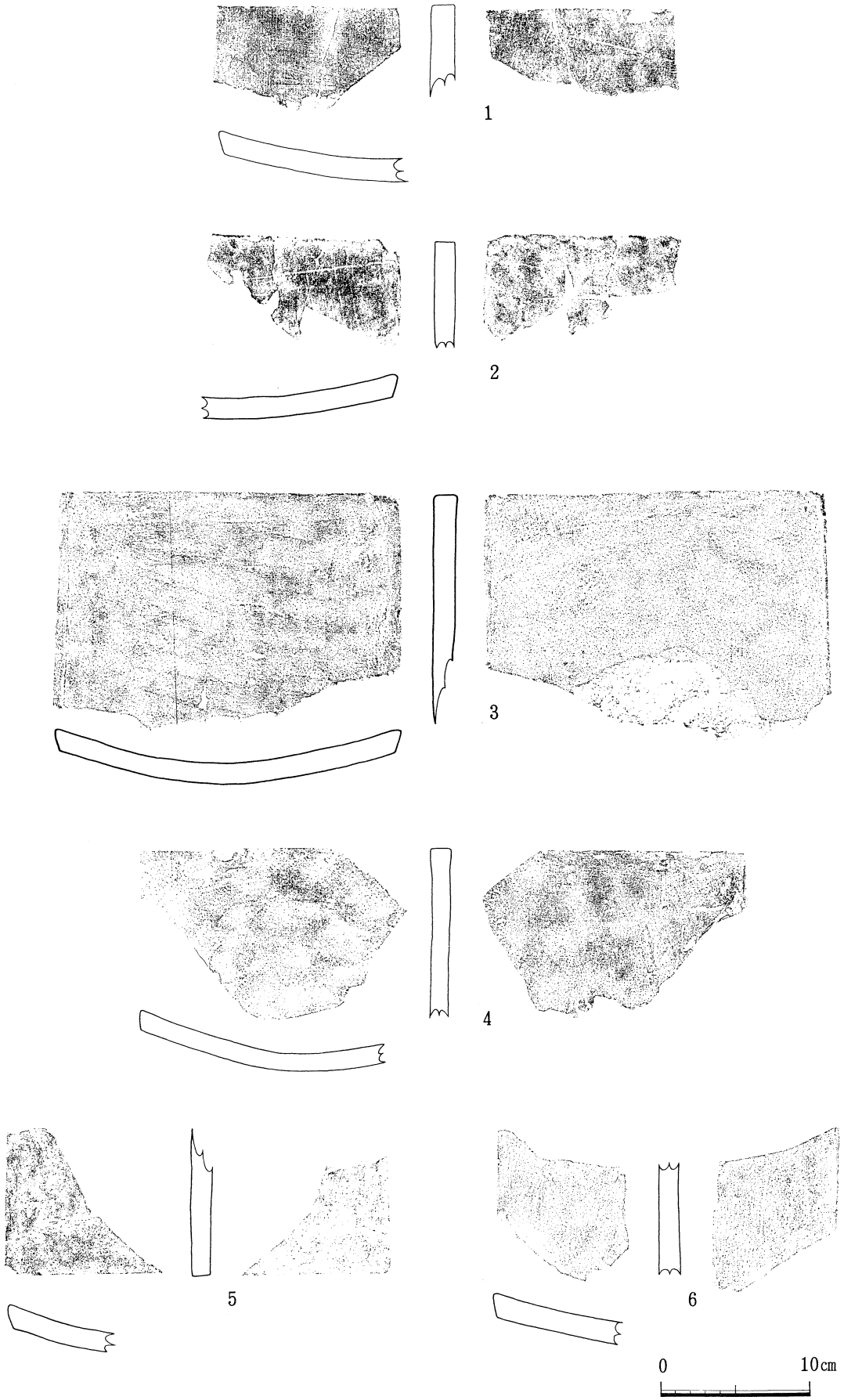
東西の瓦列の内側には瓦が大量に出土した。軒平瓦、軒丸瓦、平瓦、丸瓦と混在した状況で出土しているが、平瓦が多い。残存状況の良好な部分では、瓦は数箇所にわたって約80㎝の円形に集積して廃棄されていることがうかがえ、さらにその瓦溜りと瓦溜りの間は約80㎝間隔となっており、規則的な廃棄をしていたことも考えられる。特に瓦溜り５・８・９において顕著である。

遺構の用途については、排水溝等の用途も考えられたが、内堀に平行して構築されていることからその可能性は低いと考えられる。調査区北壁の土層断面では、瓦列状遺構部分は台形状に盛土されていることがうかがえ、盛土は３層に分層できた。まず下段に黄灰色シルト質極細砂層を20㎝盛土し、中段にはにぶい黄色の礫層を10㎝盛土し、さらに上段には浅黄色粘土層を10㎝盛土している。また、盛土が不十分であったためか数箇所で瓦列が倒壊していたが、瓦はすべて外側に向けて倒壊している。以上から、瓦列状遺構は地表面に露出して構築された一間幅の構造物と考えられ、現段階では築地塀の基礎としての用途を考えたい。

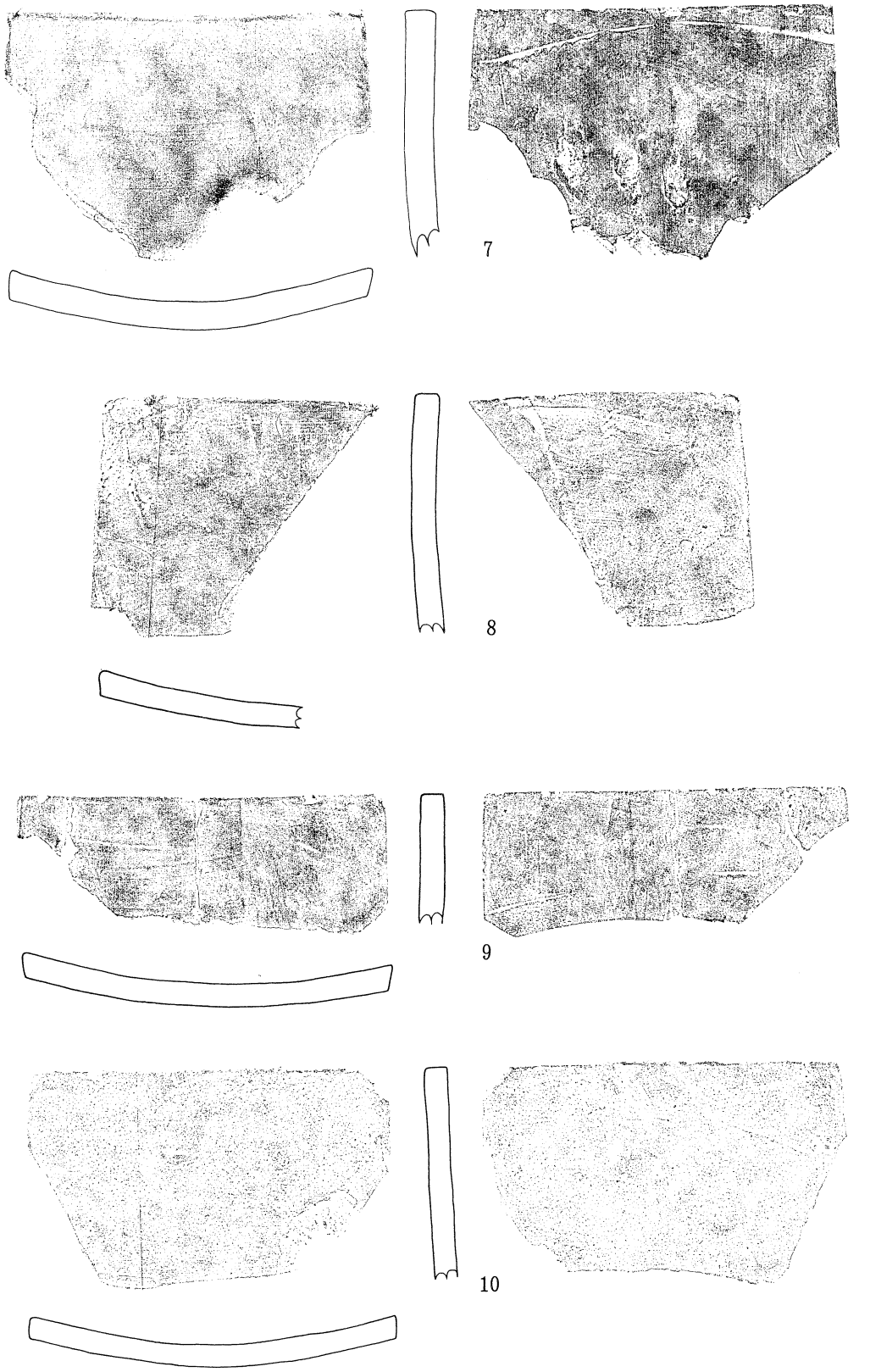
瓦列状遺構出土遺物は第11～50図に掲載した。出土遺物は瓦がほとんどで、遺構全体でコンテナ



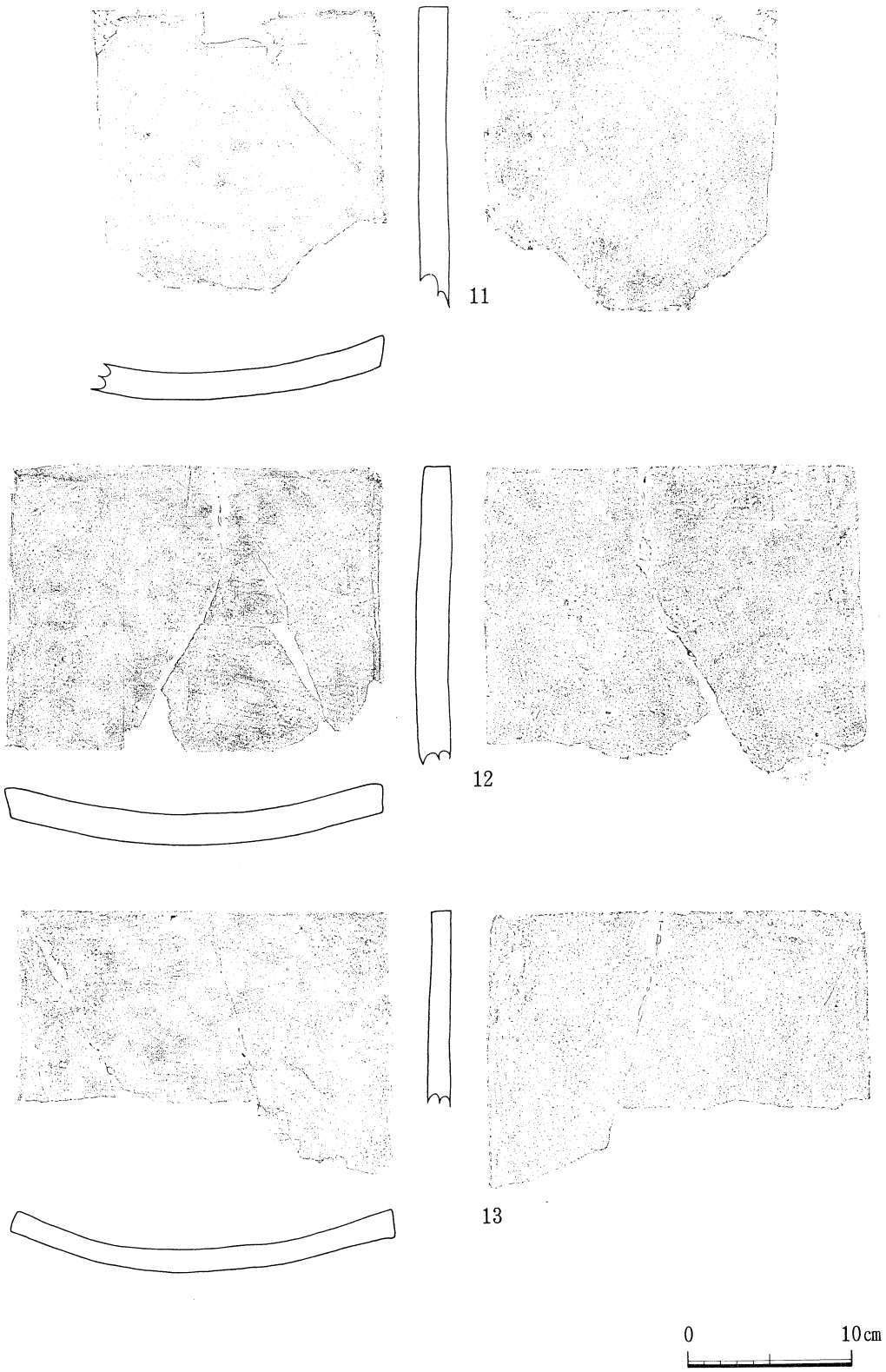
第10図　瓦列状遺構平・立面図



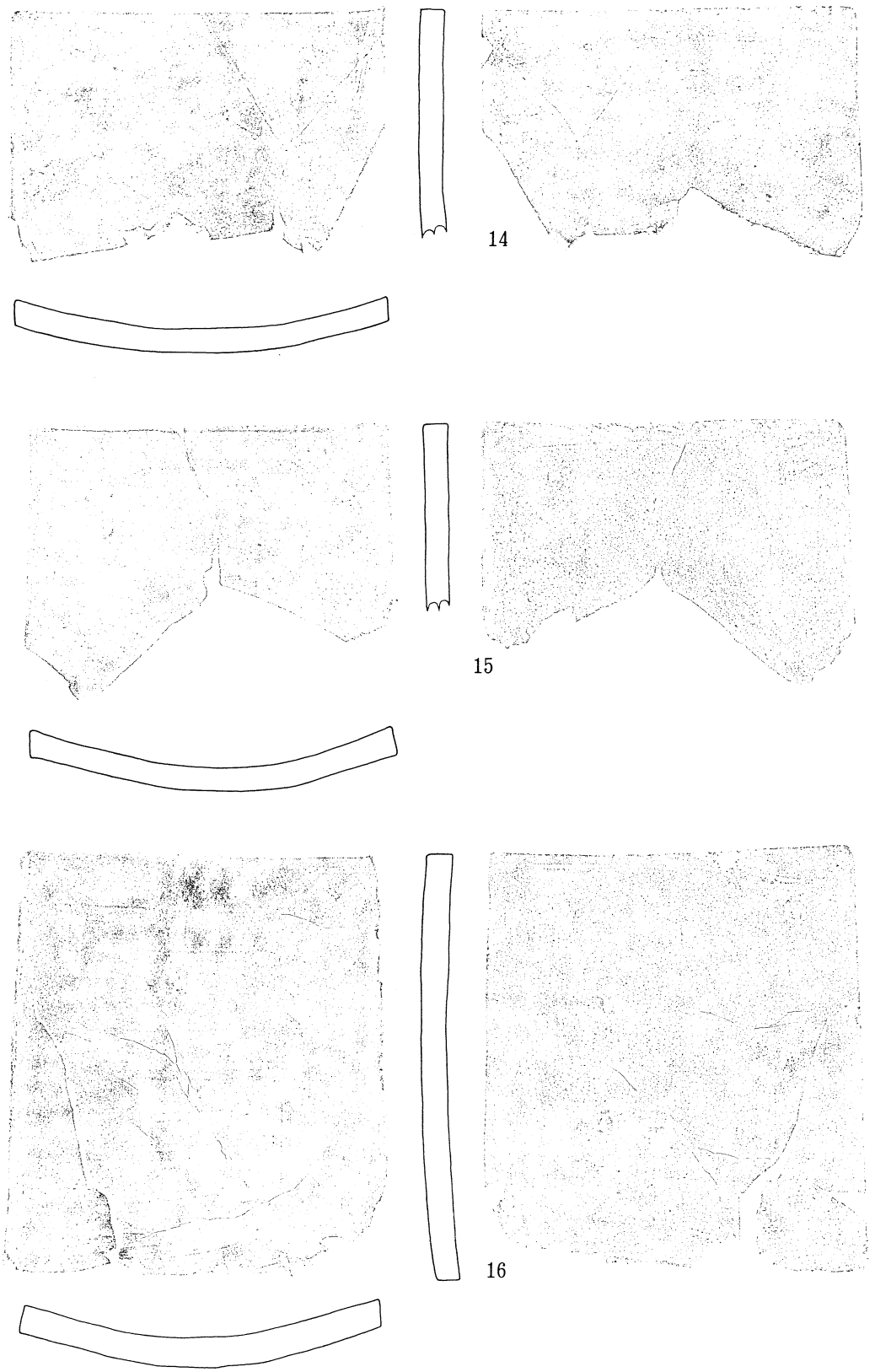
第11図　瓦列状遺構平瓦実測図①



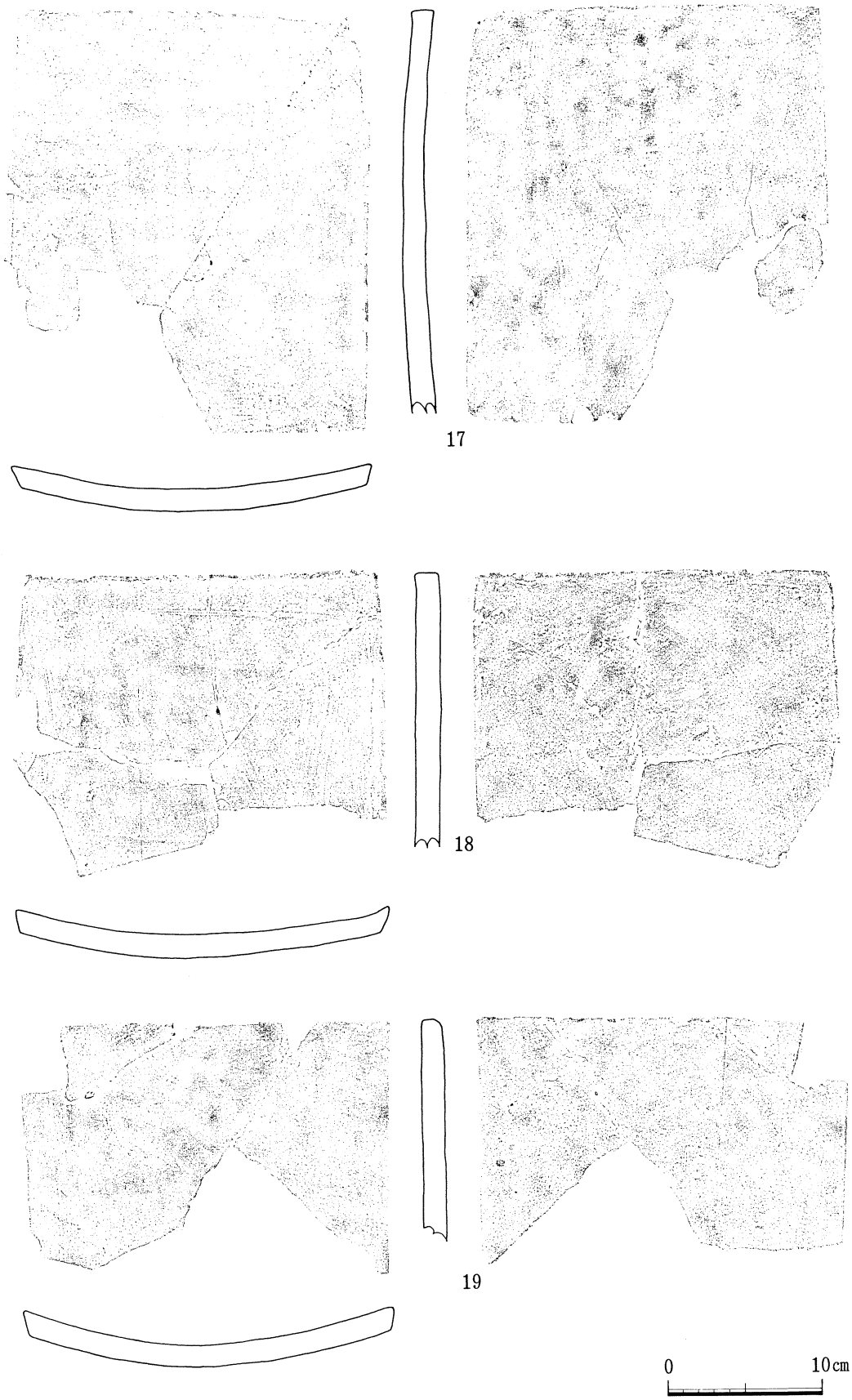
第12図　瓦列状遺構平瓦実測図②



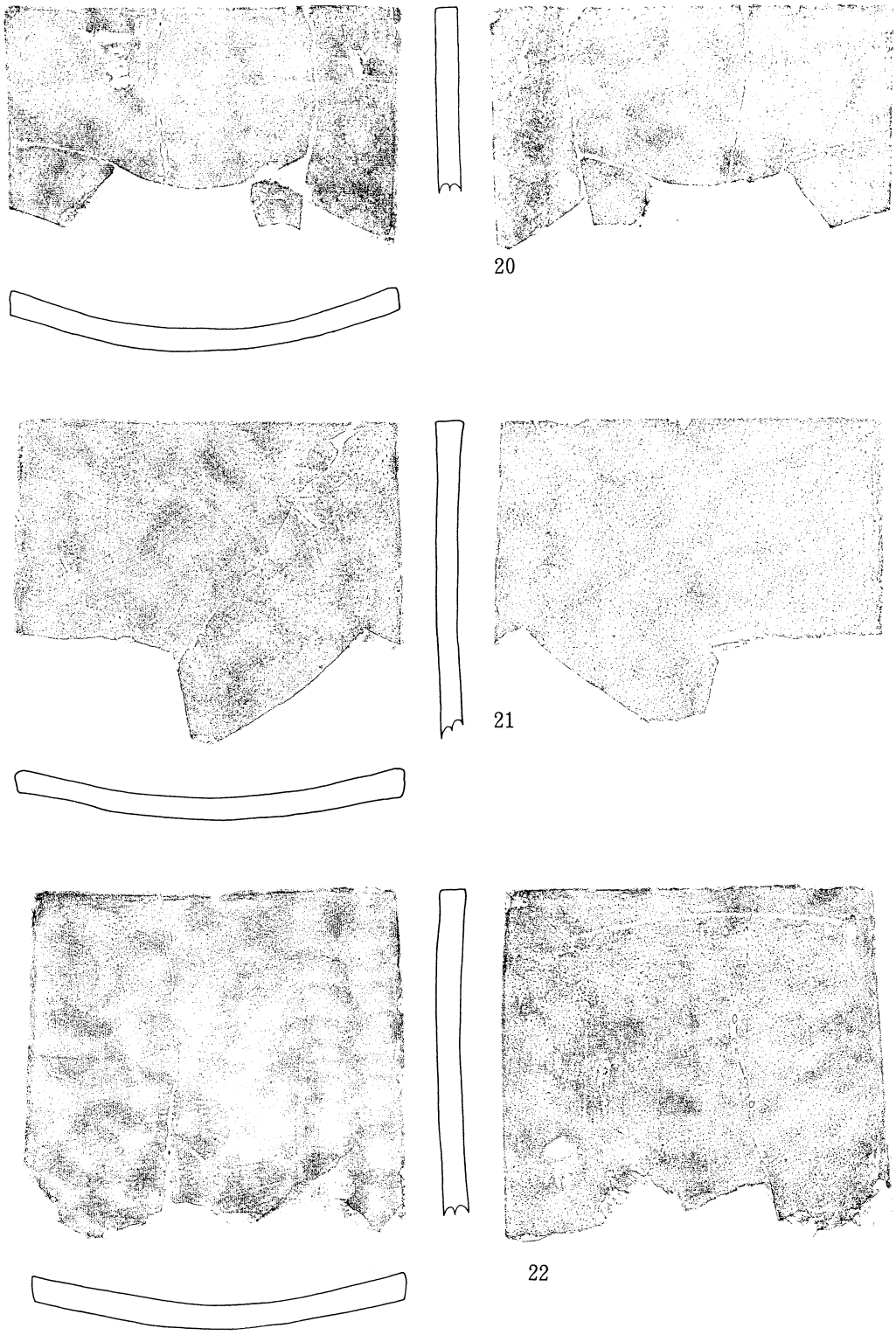
第13図　瓦列状遺構平瓦実測図③



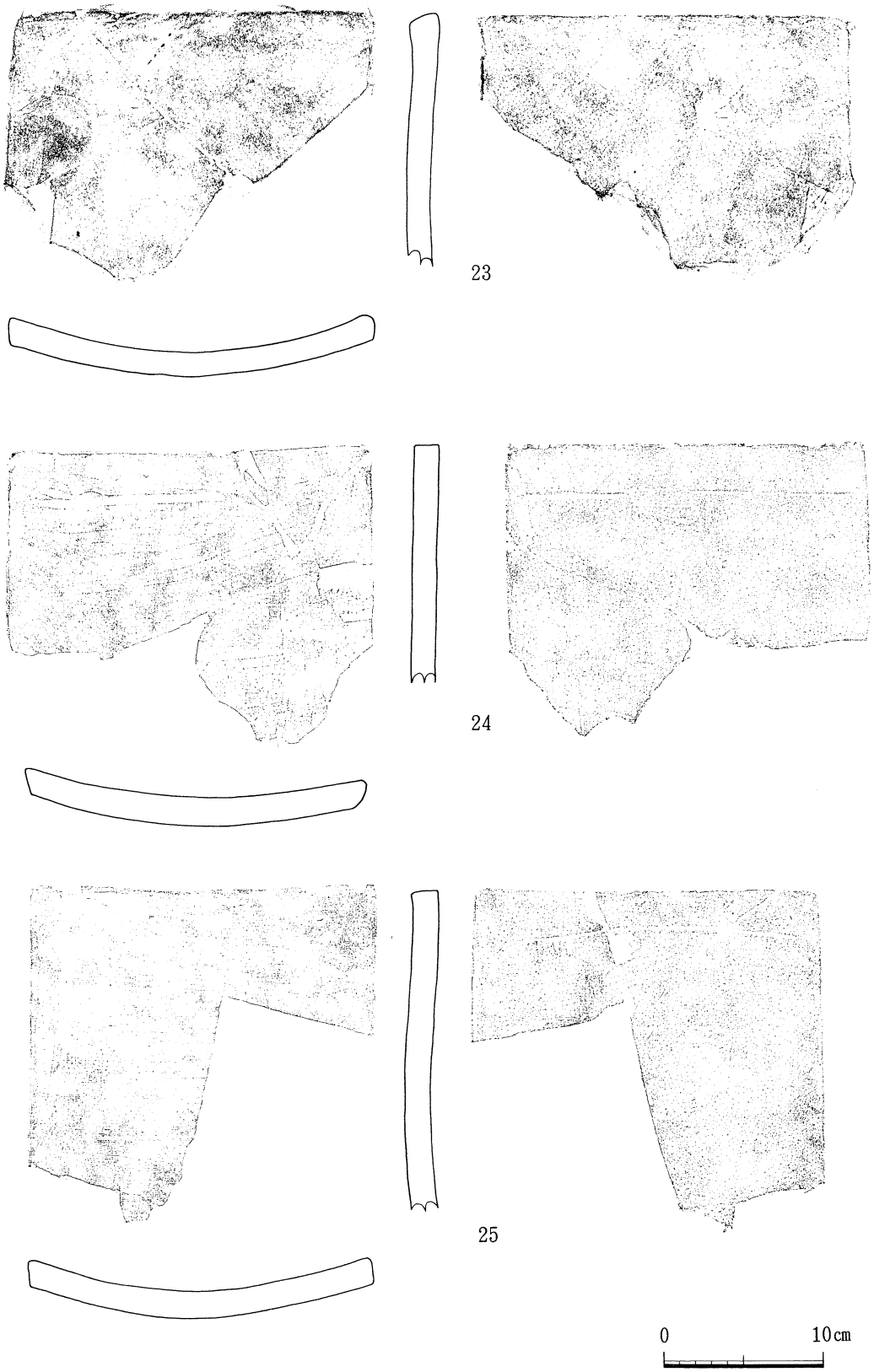
第14図　瓦列状遺構平瓦実測図④



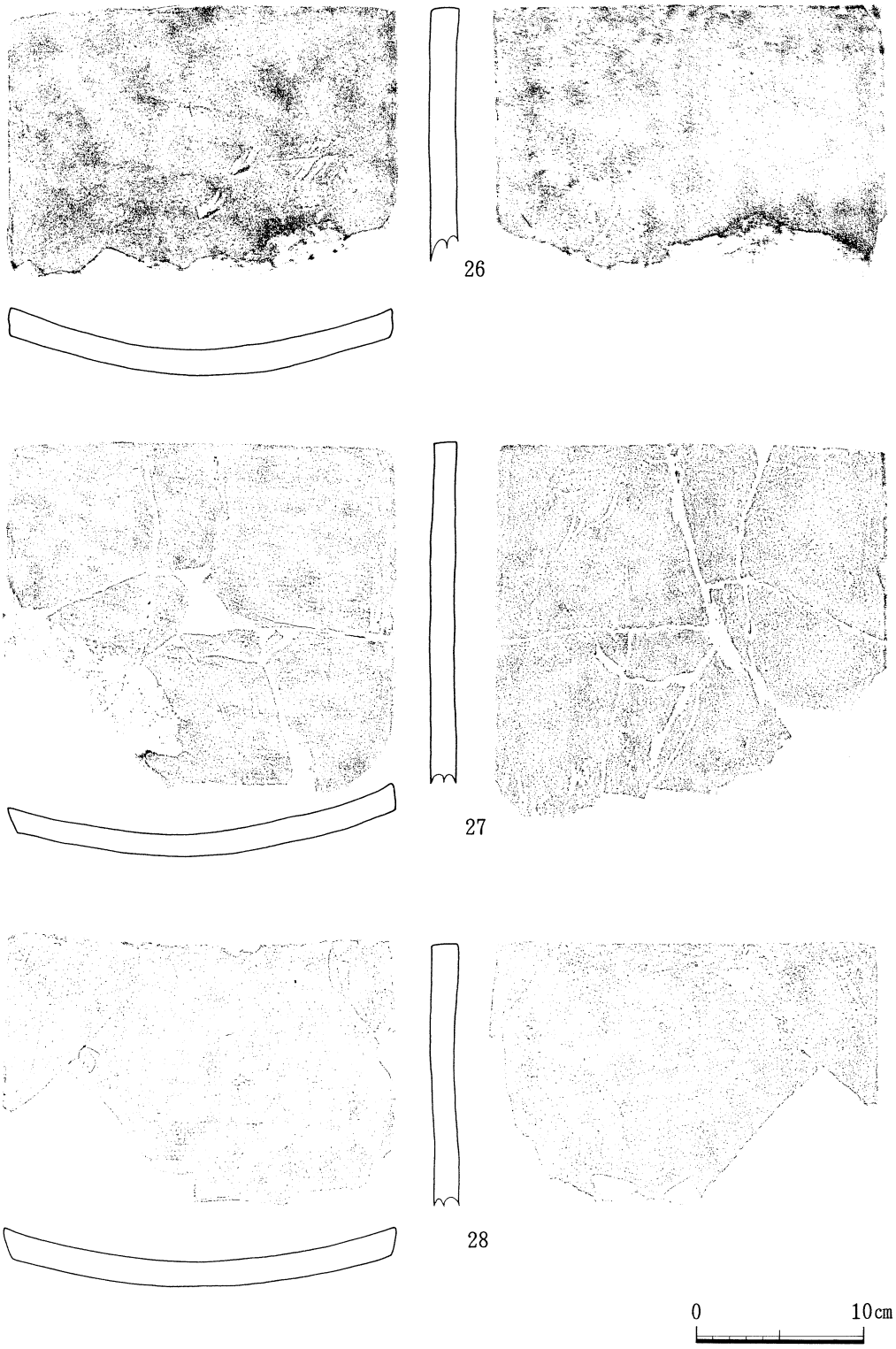
第15図　瓦列状遺構平瓦実測図⑤



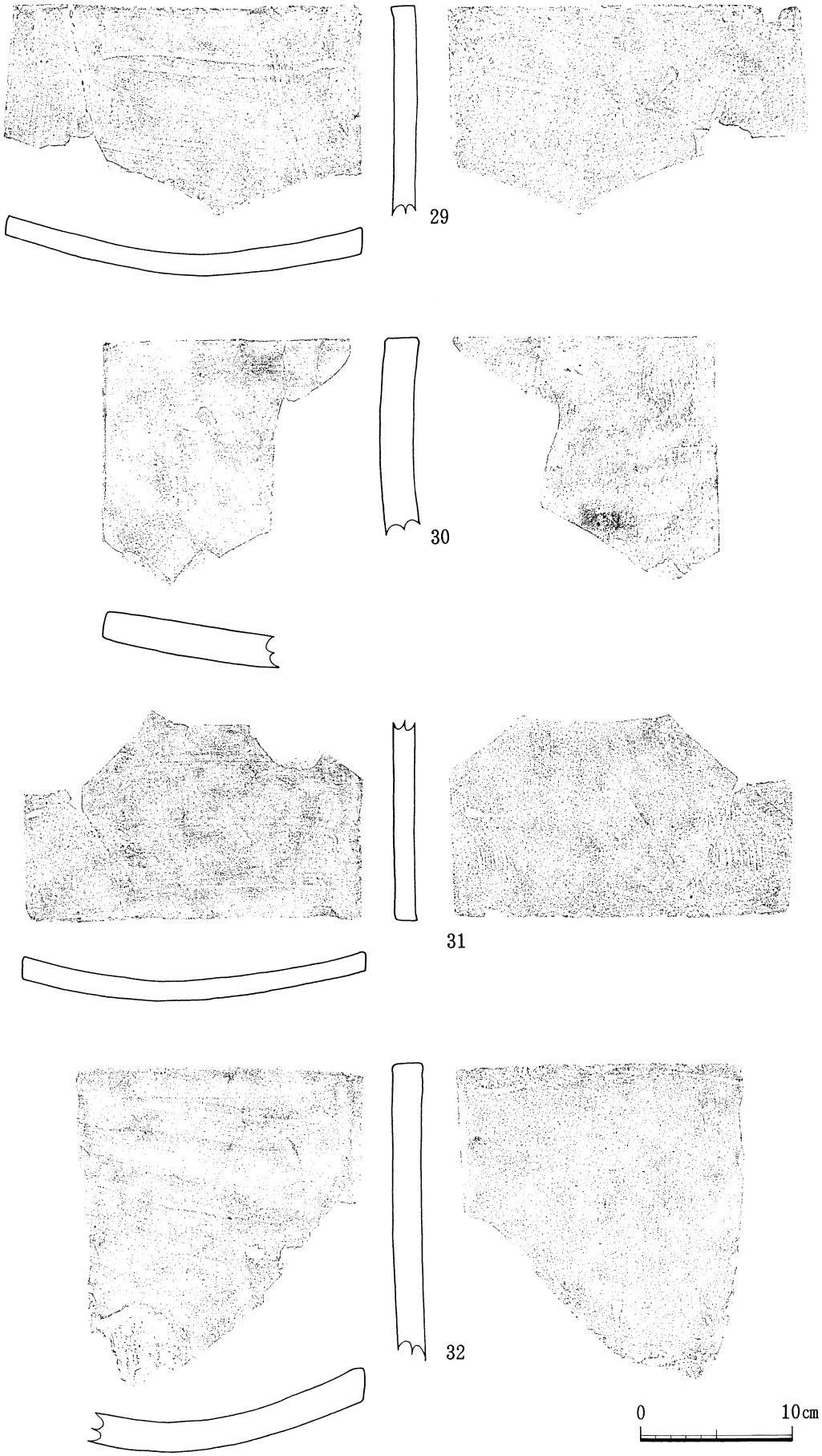
第16図　瓦列状遺構平瓦実測図⑥



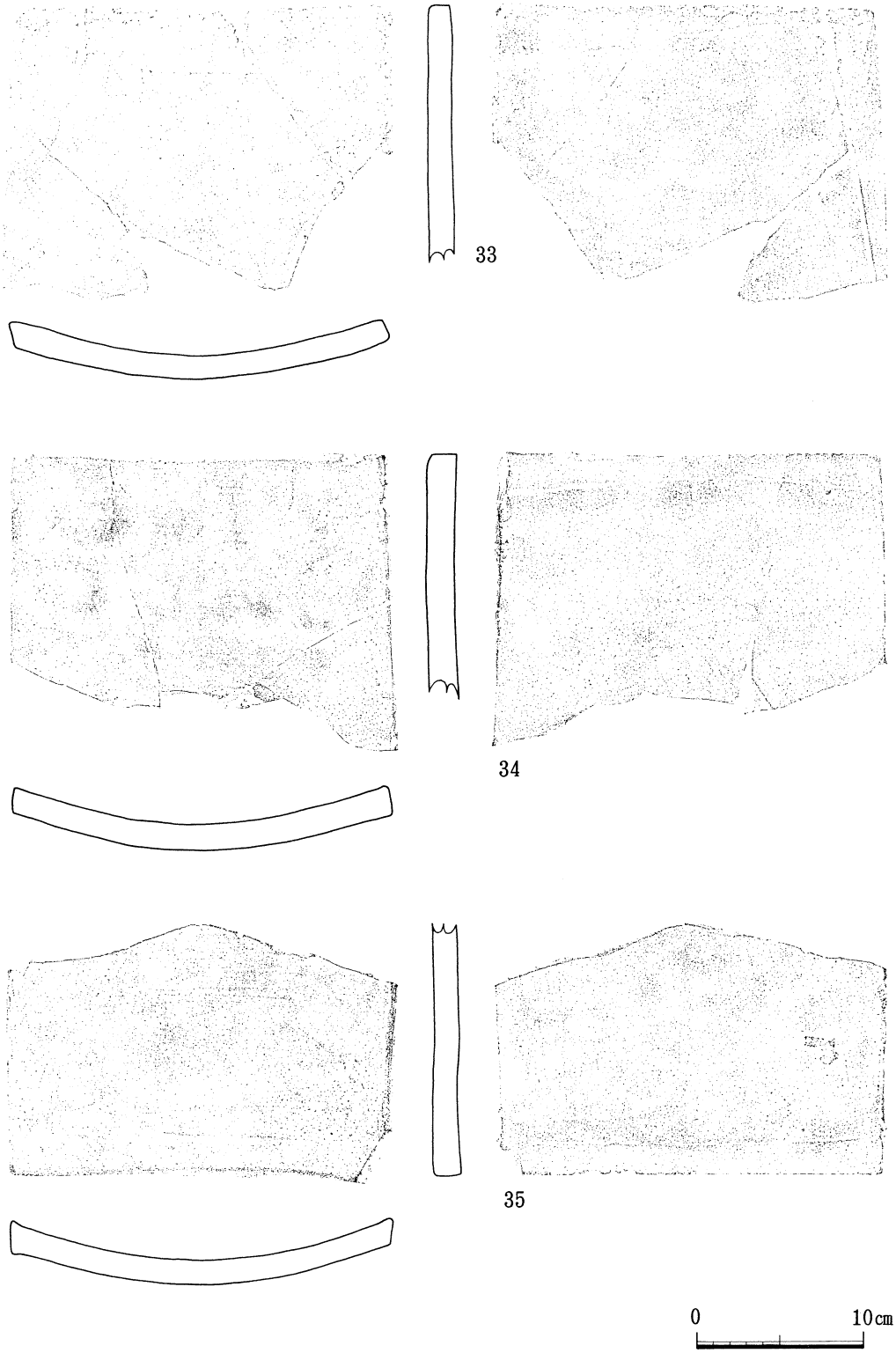
第17図　瓦列状遺構平瓦実測図⑦



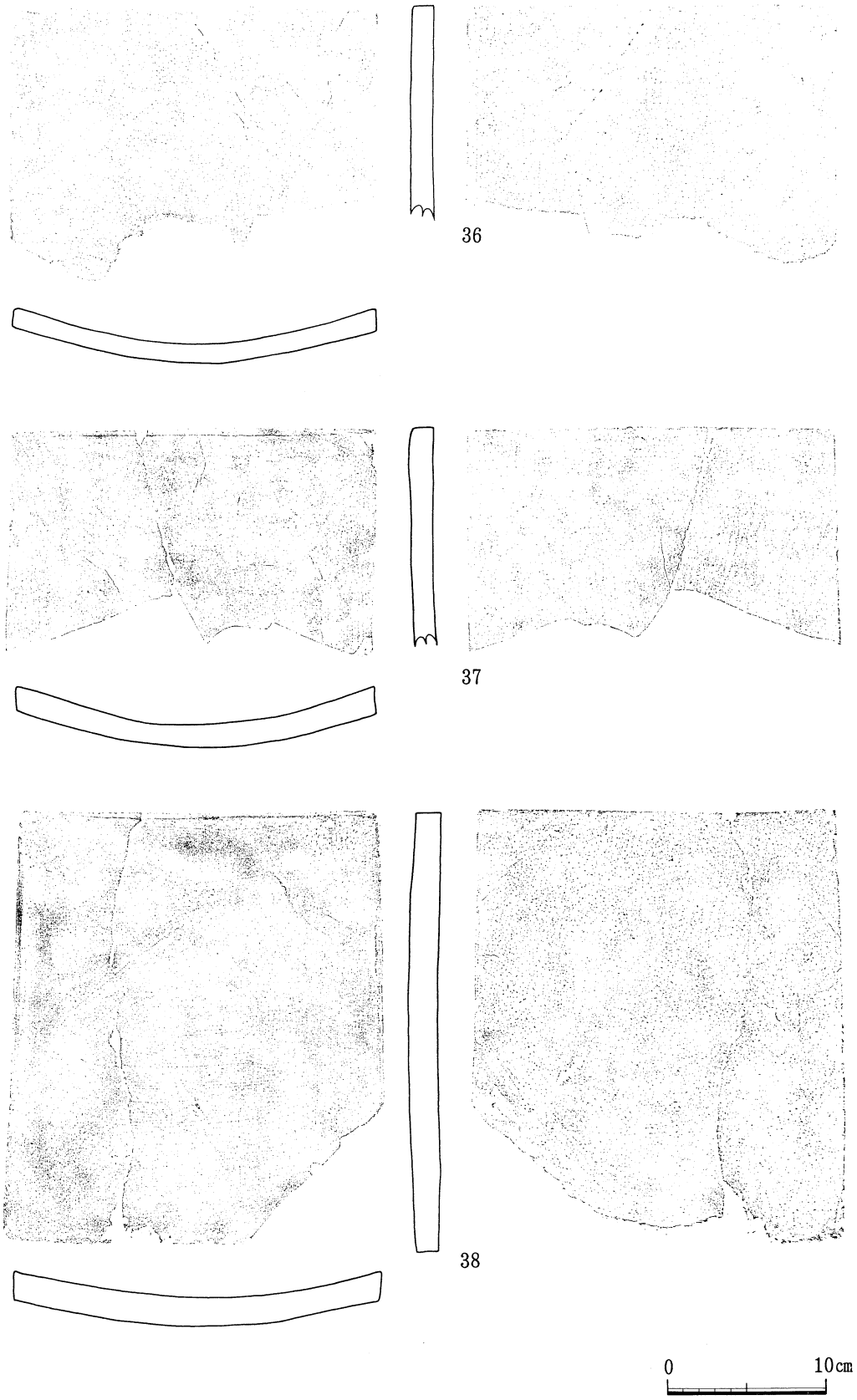
第18図　瓦列状遺構平瓦実測図⑧



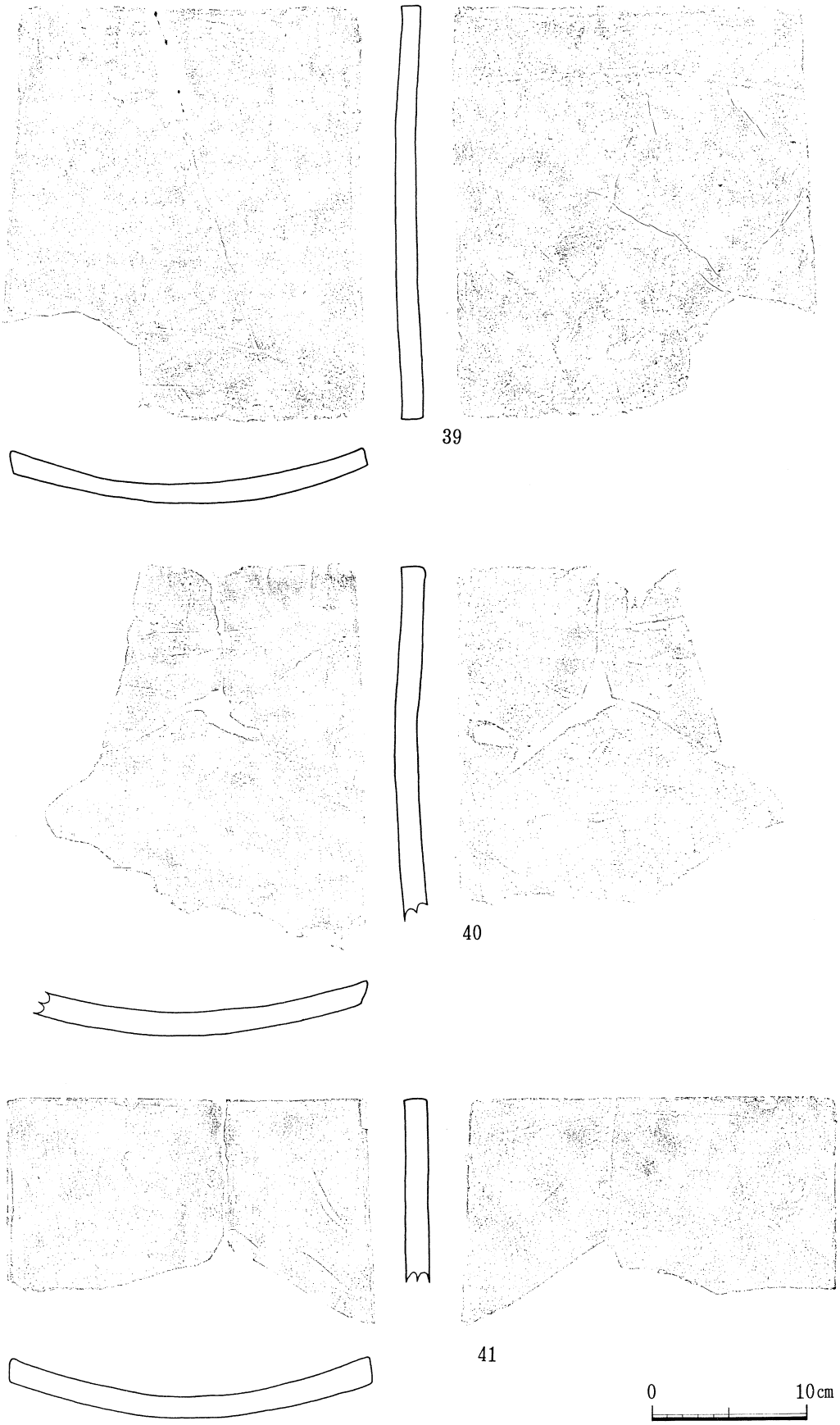
第19図　瓦列状遺構平瓦実測図⑨



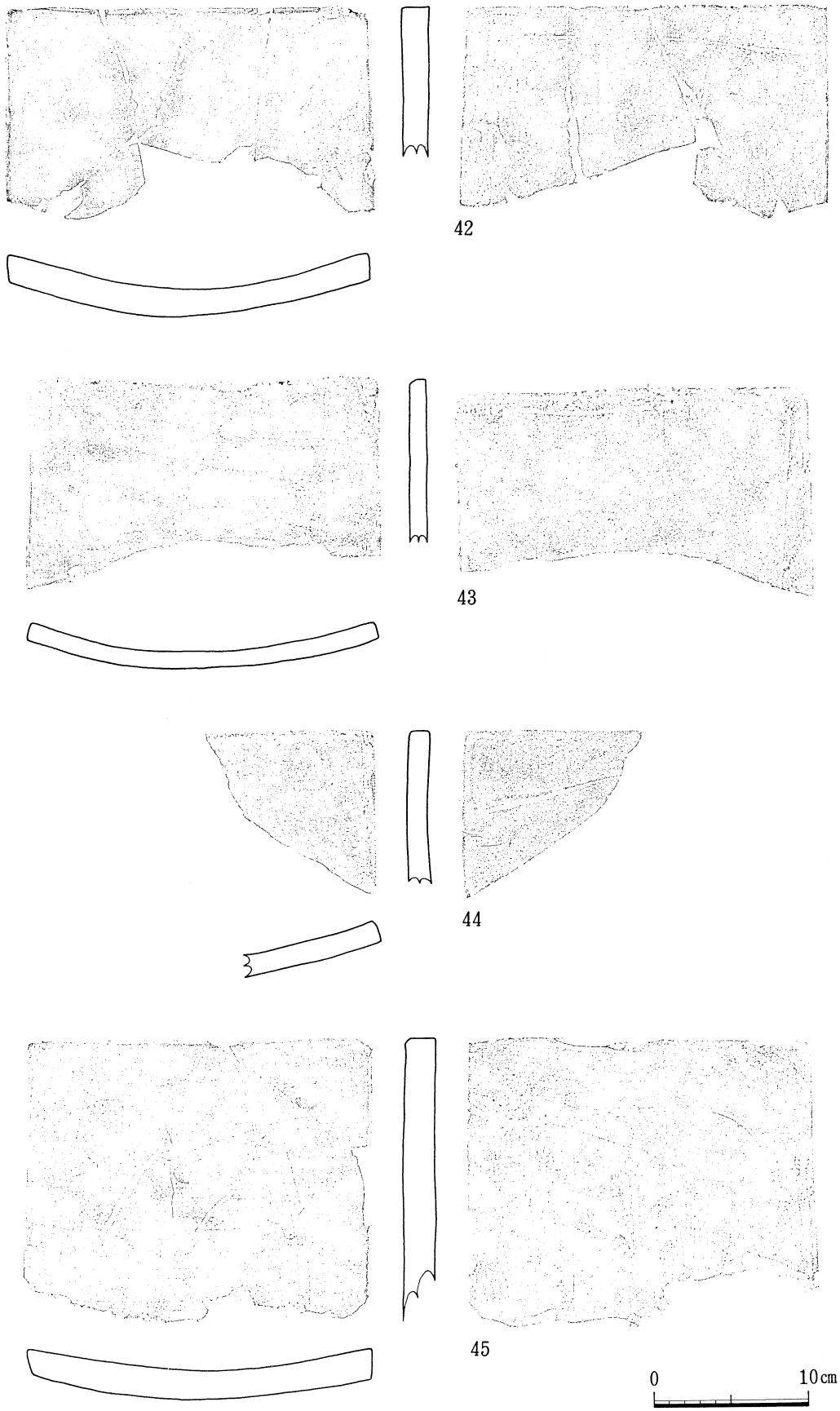
第20図　瓦列状遺構平瓦実測図⑩



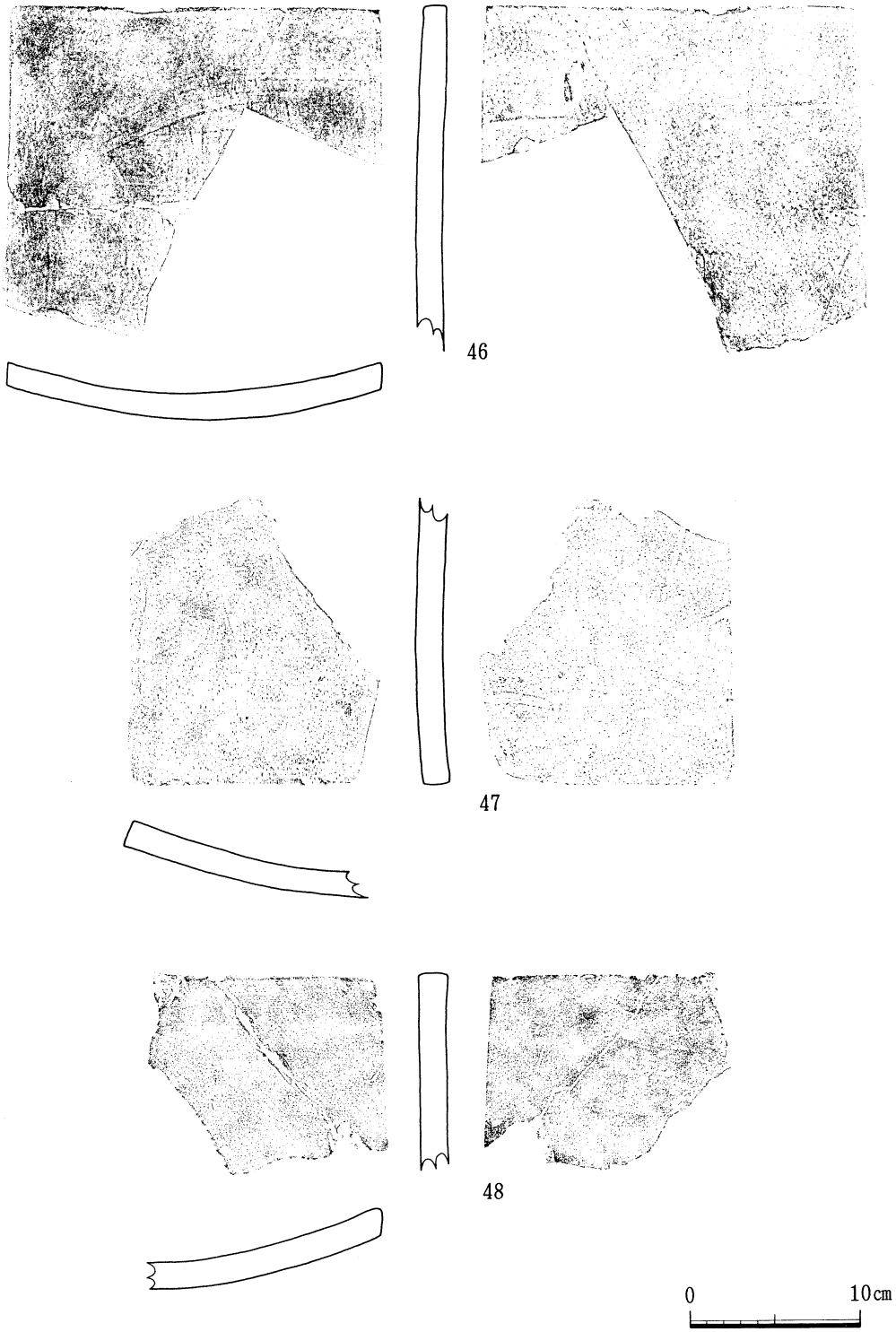
第21図　瓦列状遺構平瓦実測図⑪



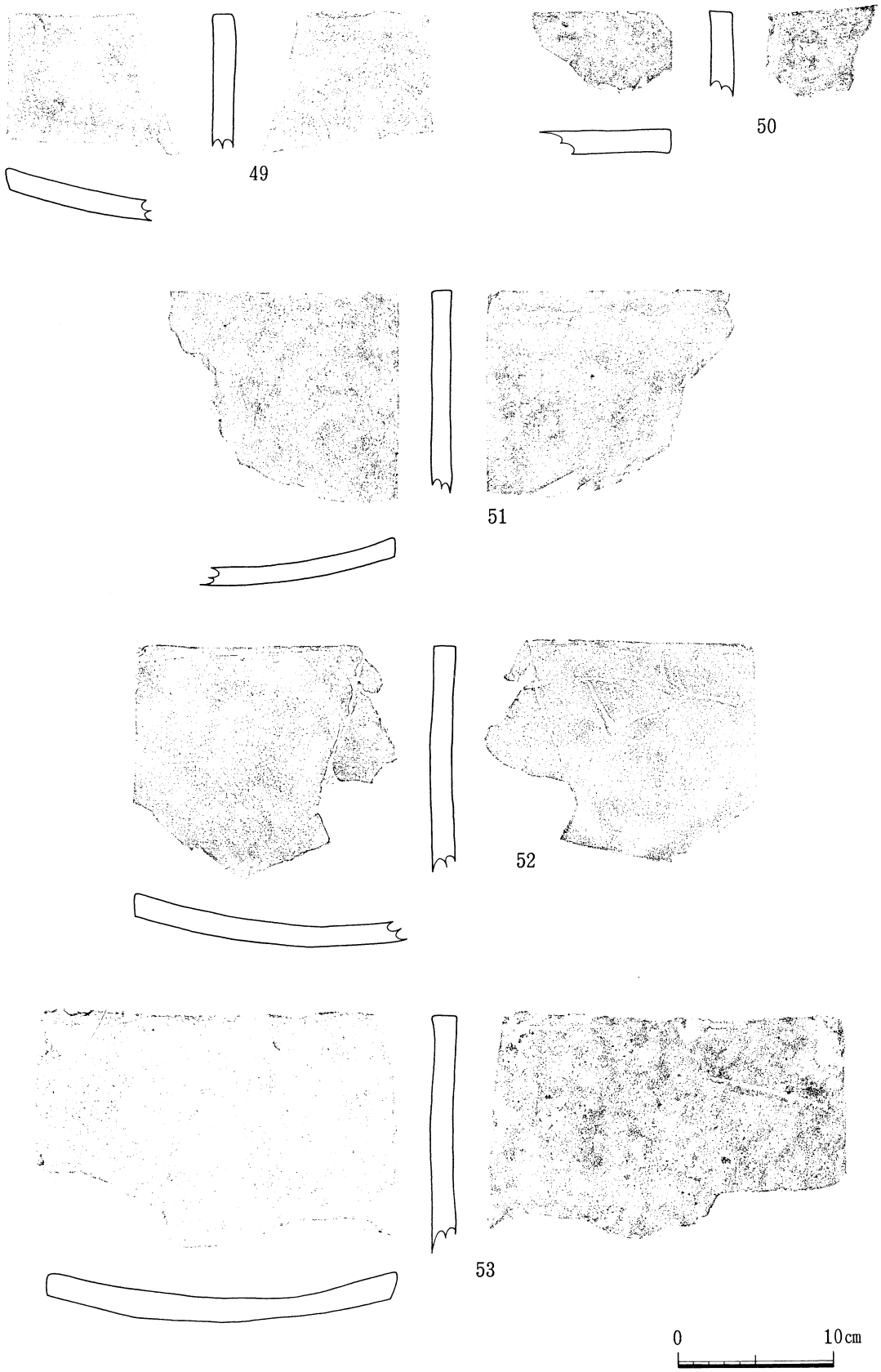
第22図　瓦列状遺構平瓦実測図⑫



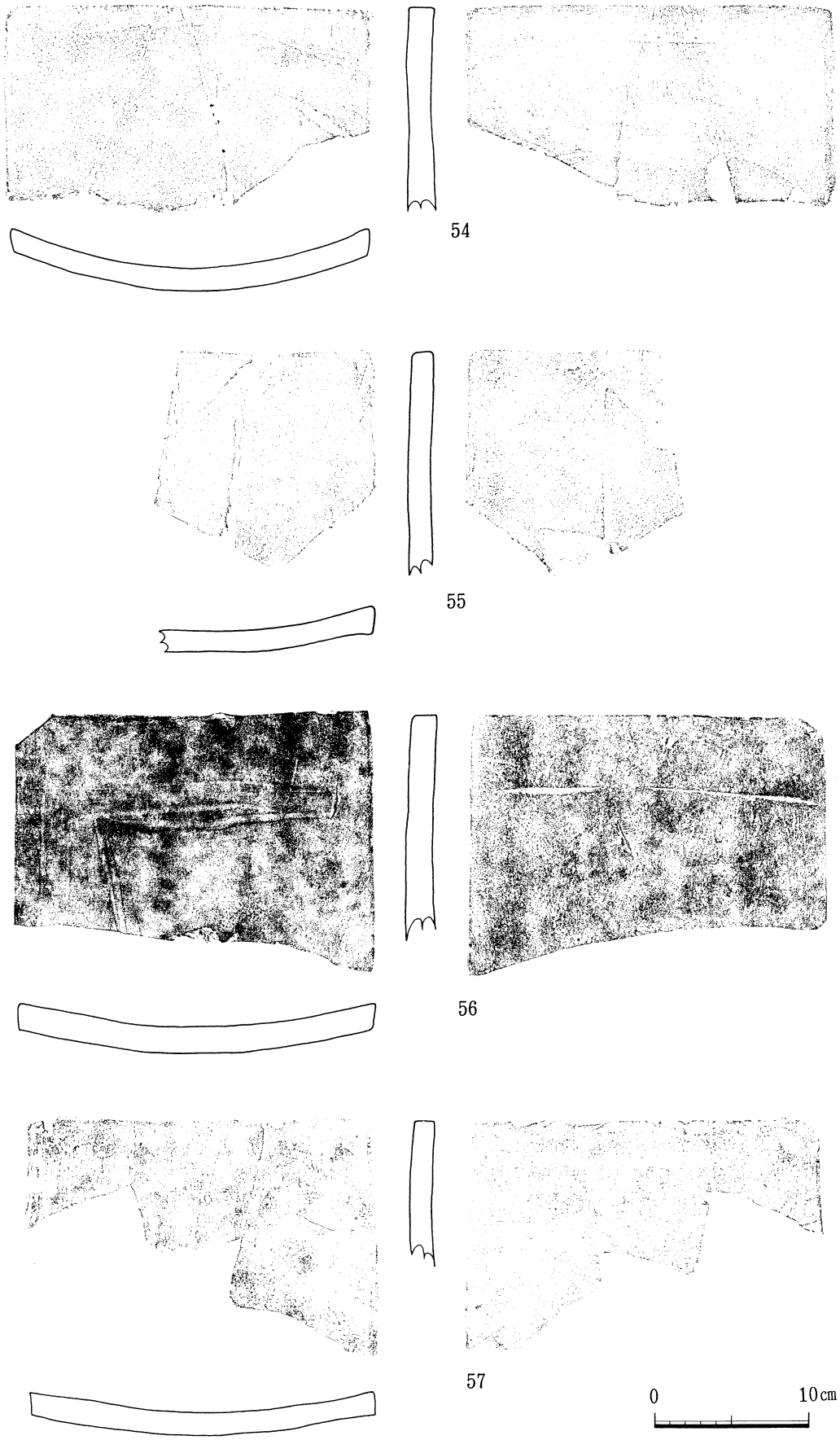
第23図　瓦列状遺構平瓦実測図⑬



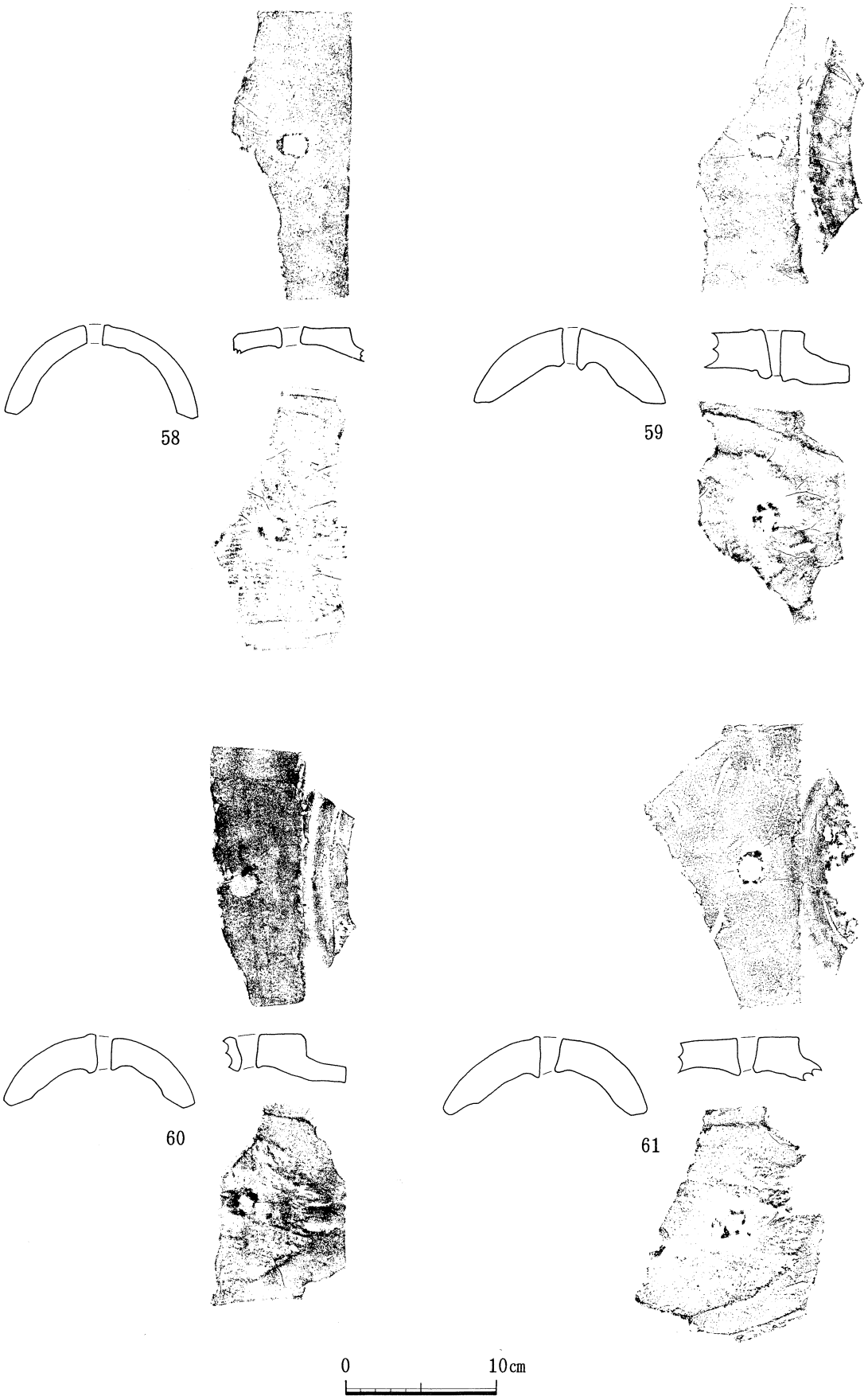
第24図　瓦列状遺構平瓦実測図⑭



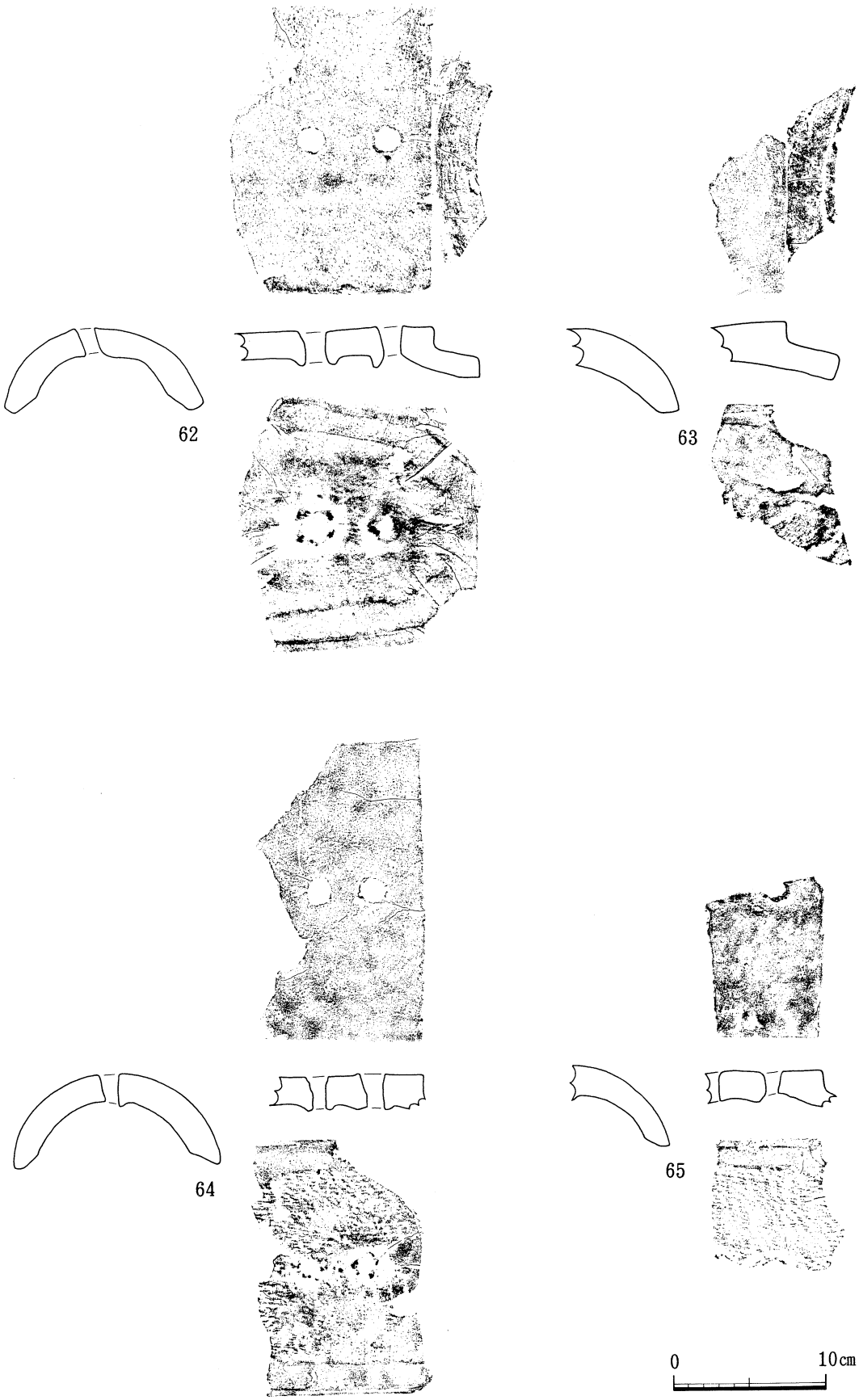
第25図　瓦列状遺構平瓦実測図⑮



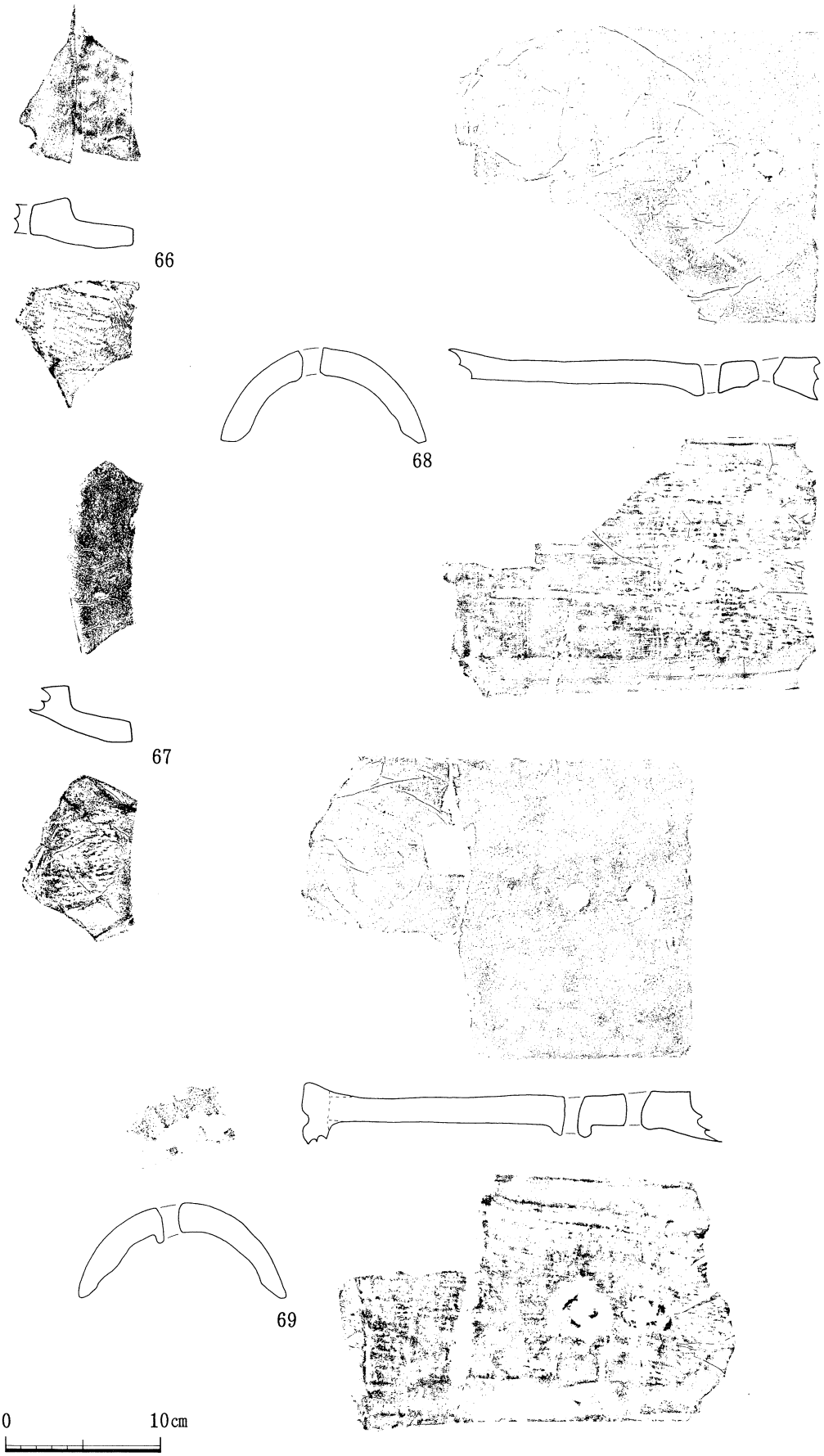
第26図　瓦列状遺構平瓦実測図⑯



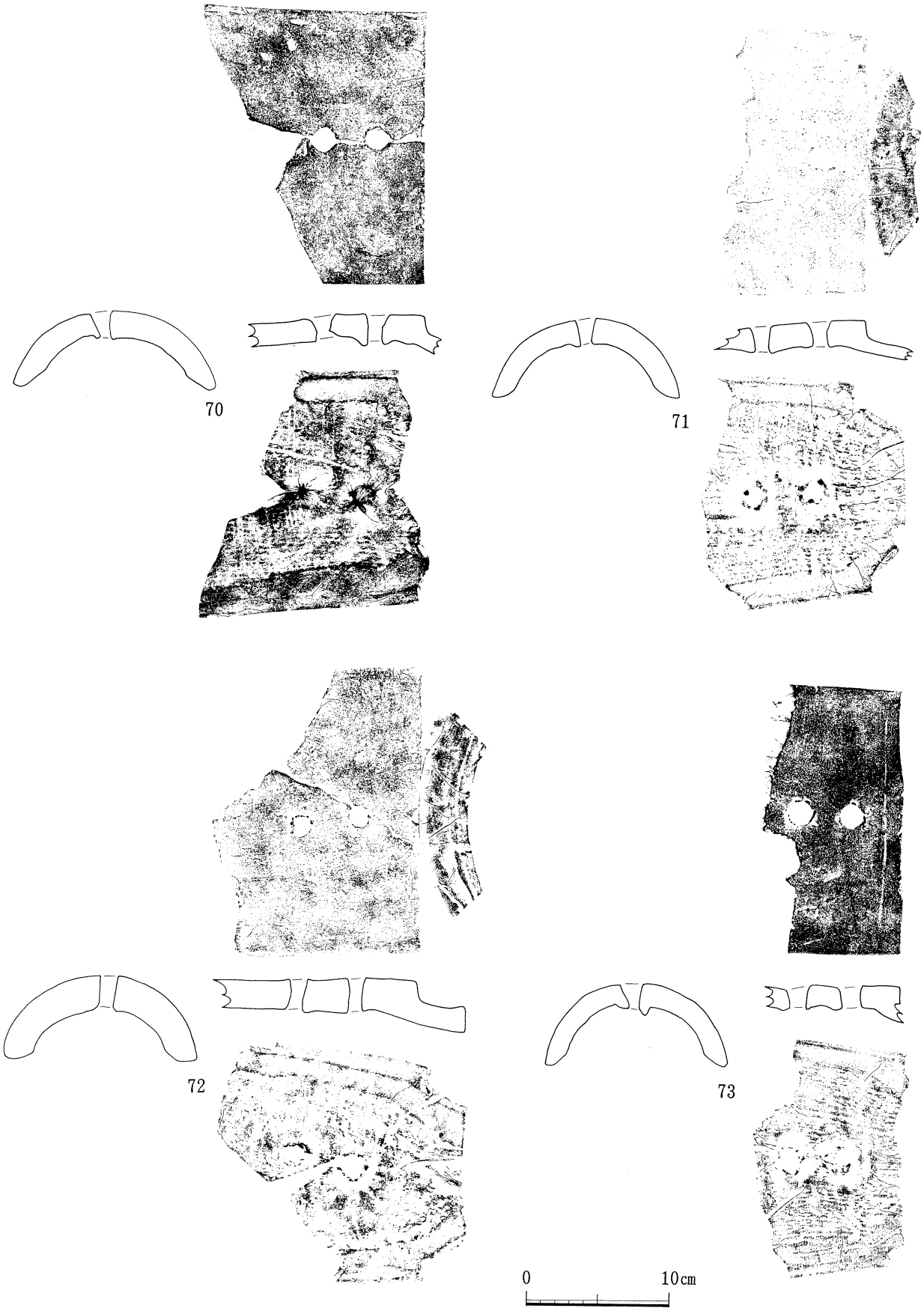
第27図　瓦列状遺構丸瓦実測図①



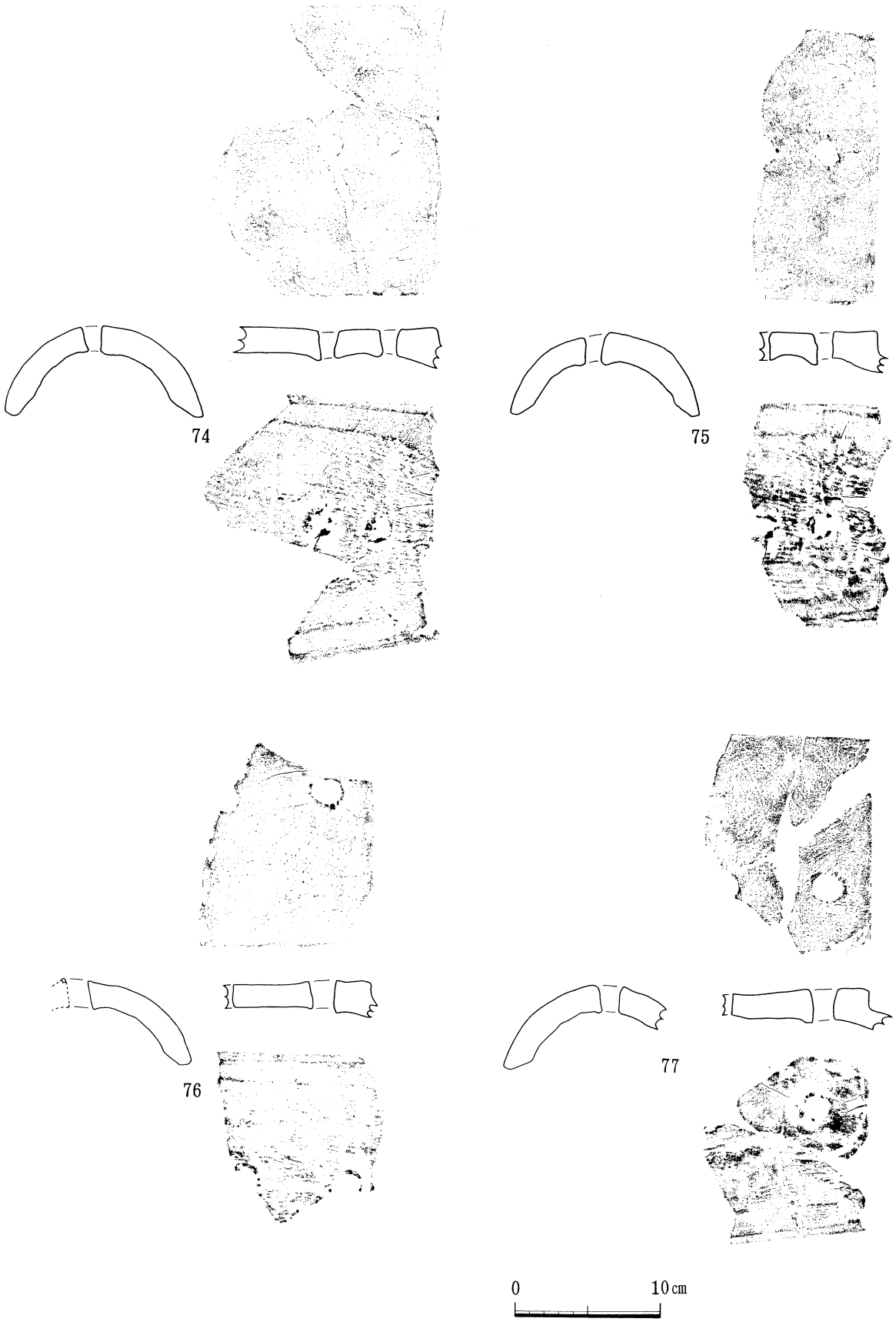
第28図　瓦列状遺構丸瓦実測図②



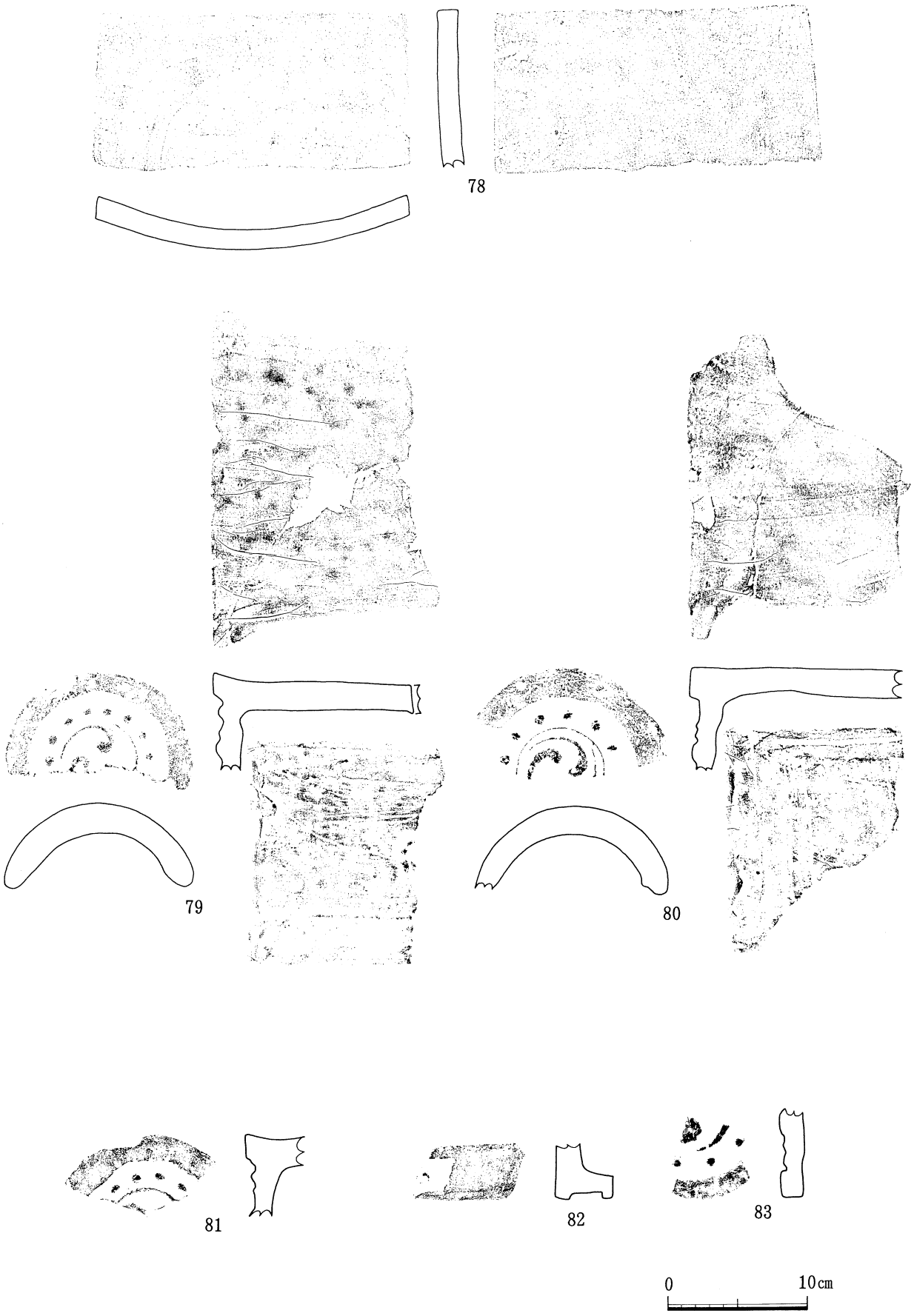
第29図　瓦列状遺構丸瓦実測図③



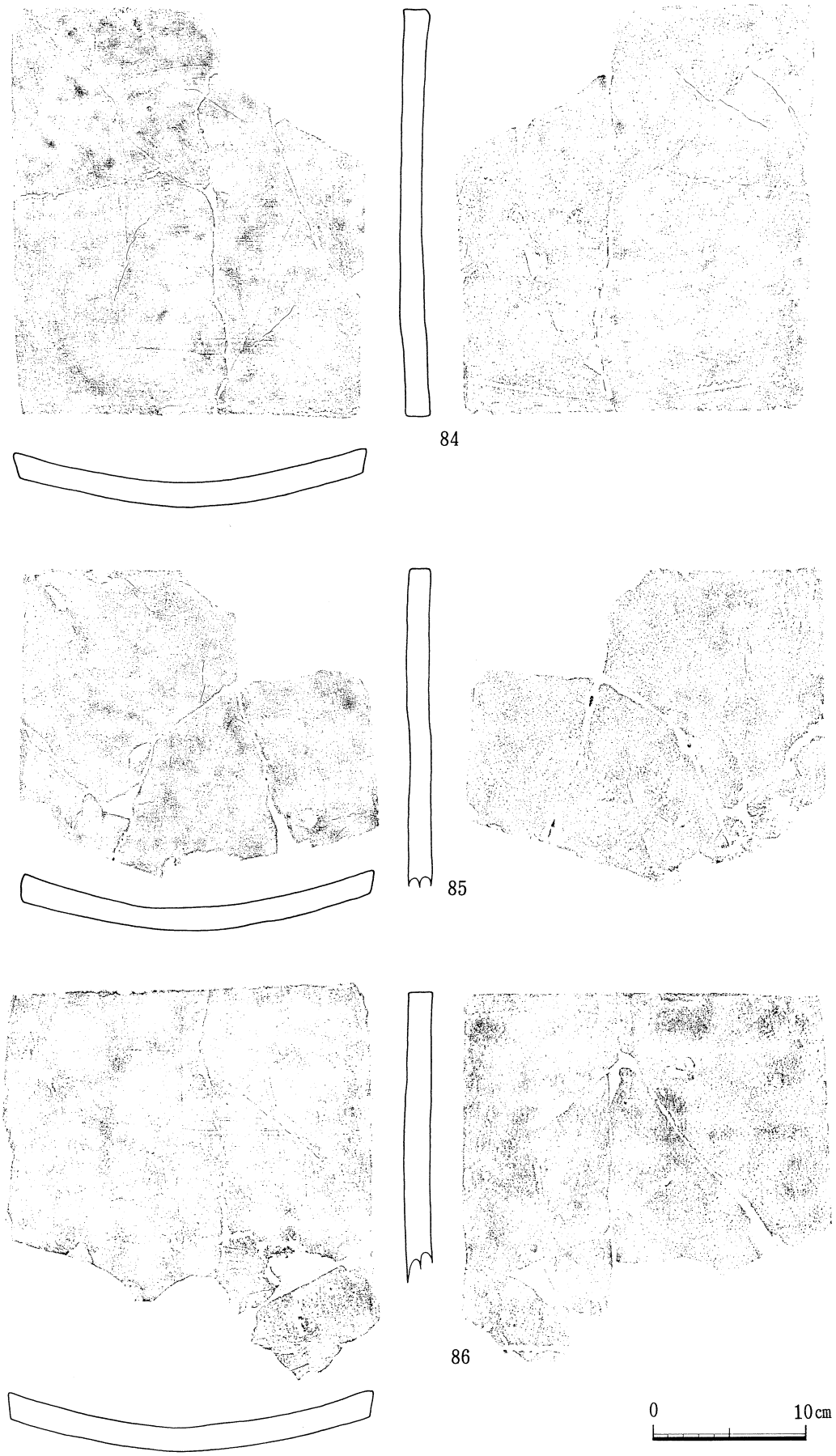
第30図　瓦列状遺構丸瓦実測図④



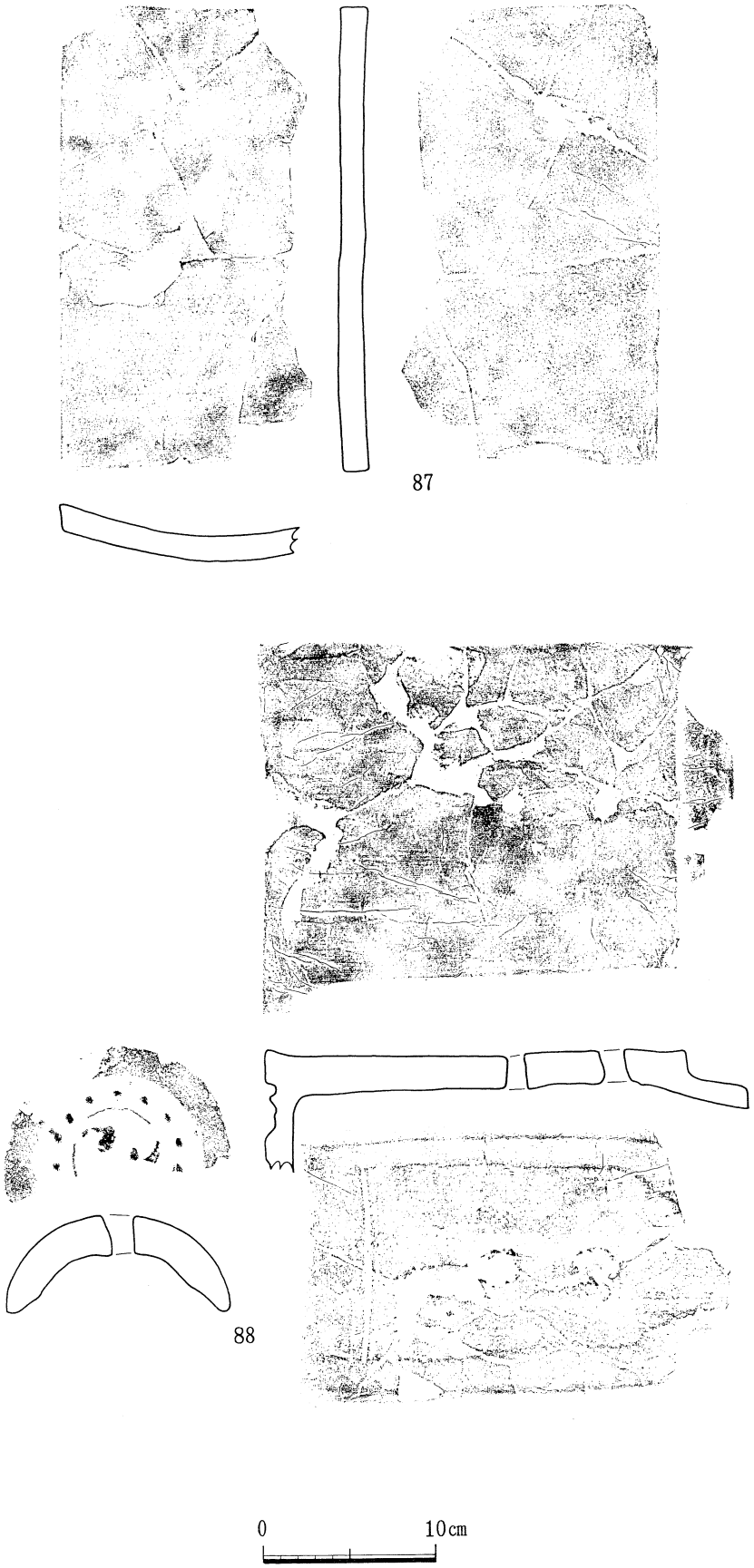
第31図　瓦列状遺構丸瓦実測図⑤



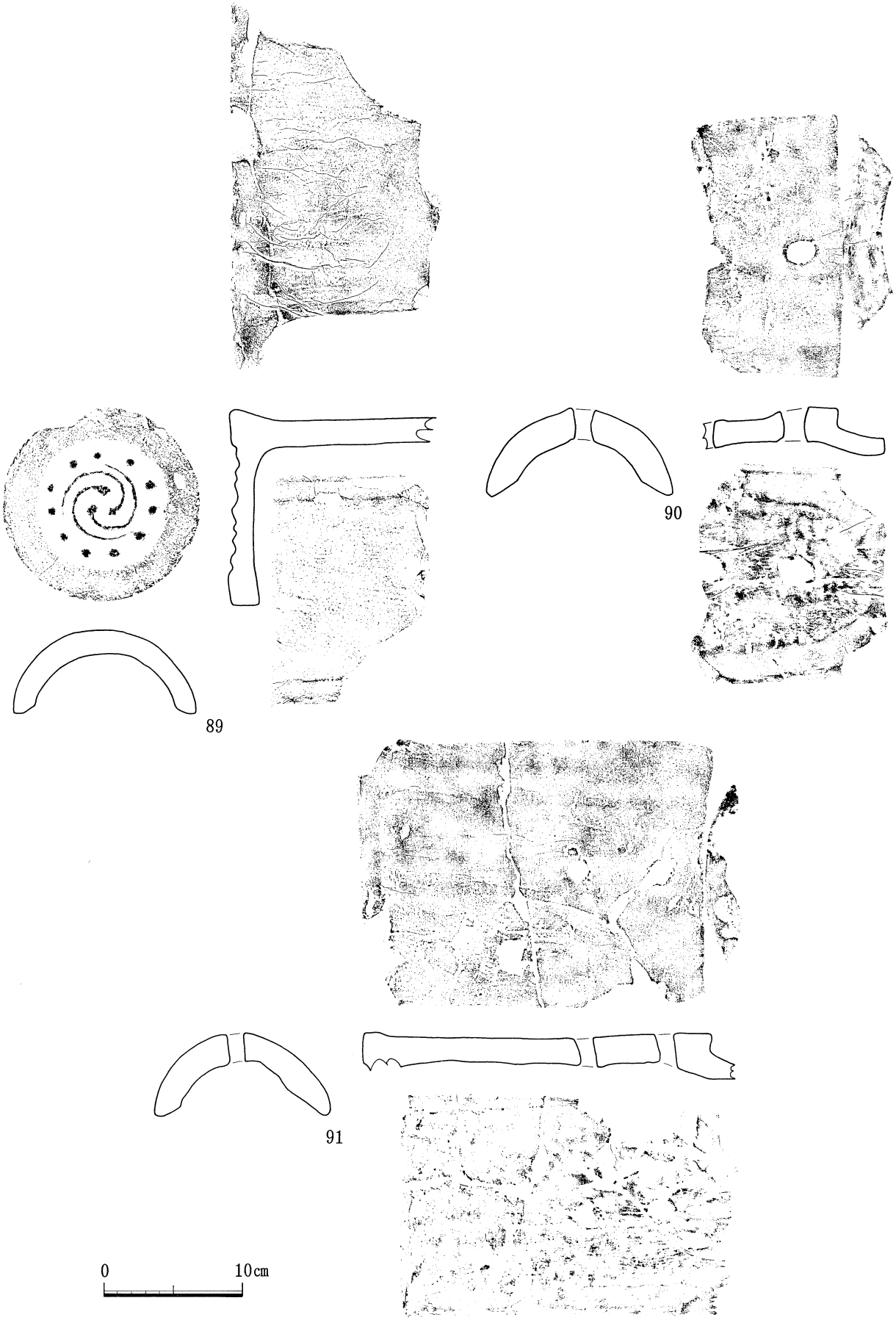
第32図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図①（78～80瓦溜り１、81瓦溜り４、82･83瓦溜り16）



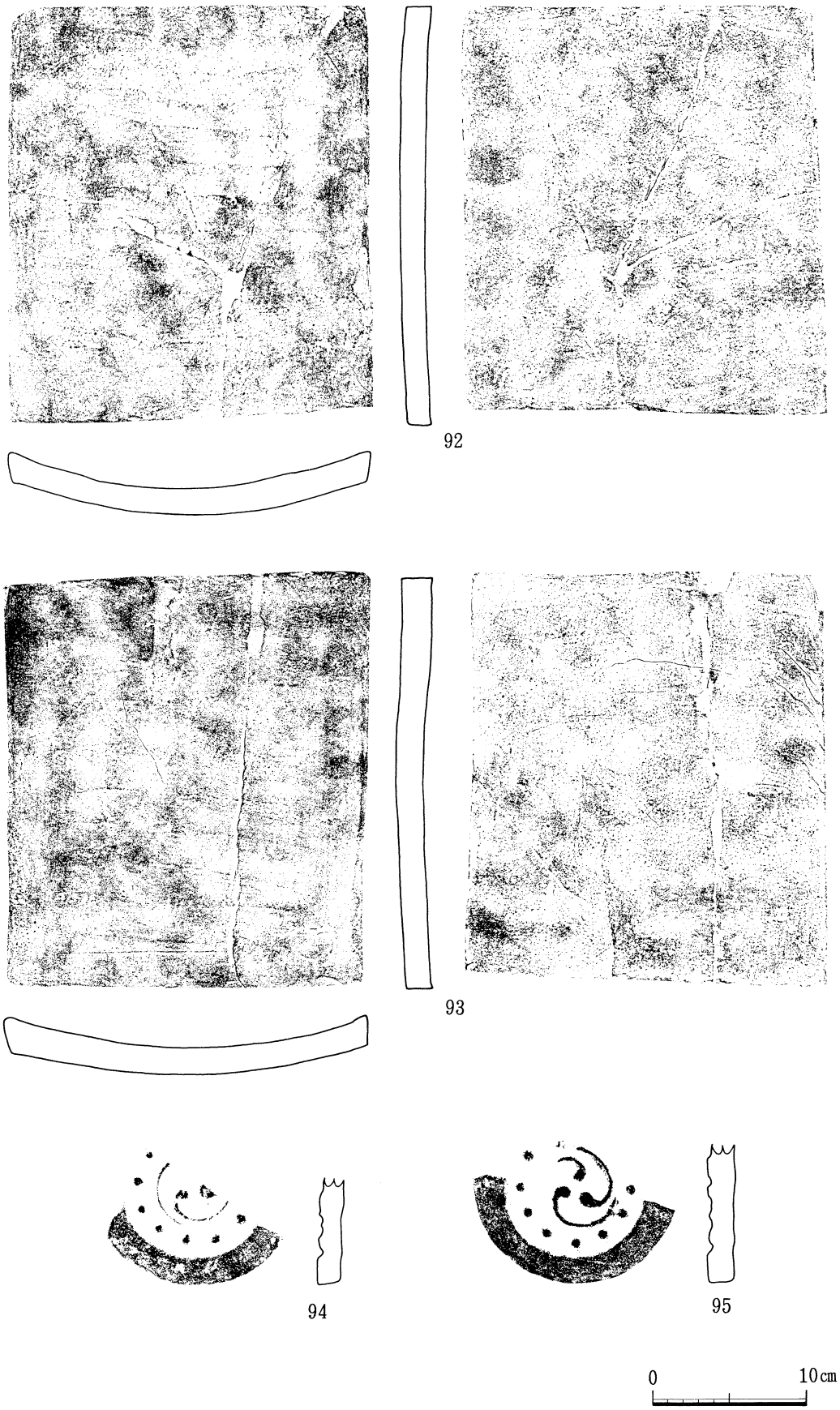
第33図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図②（瓦溜り５）



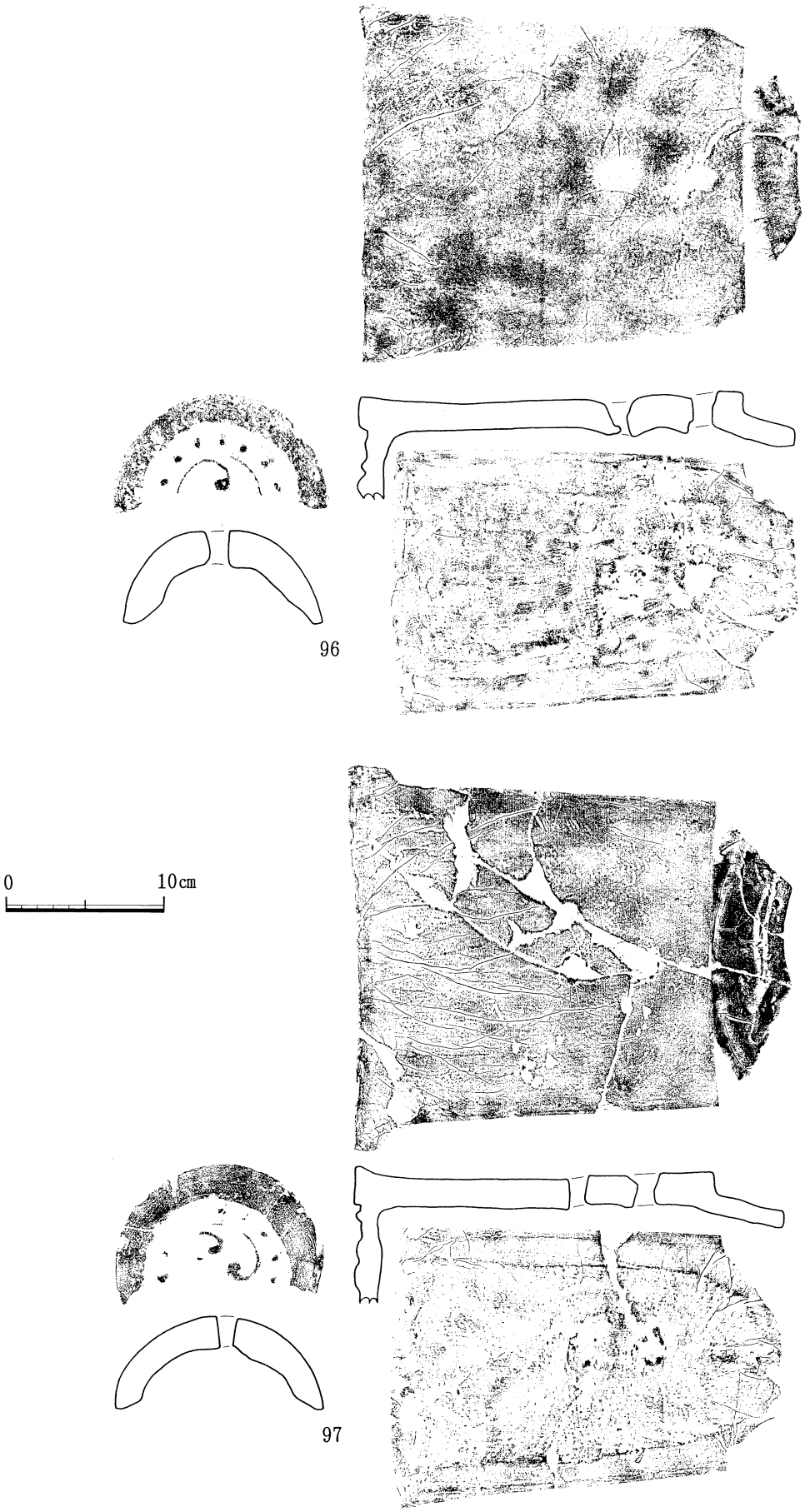
第34図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図③（瓦溜り５）



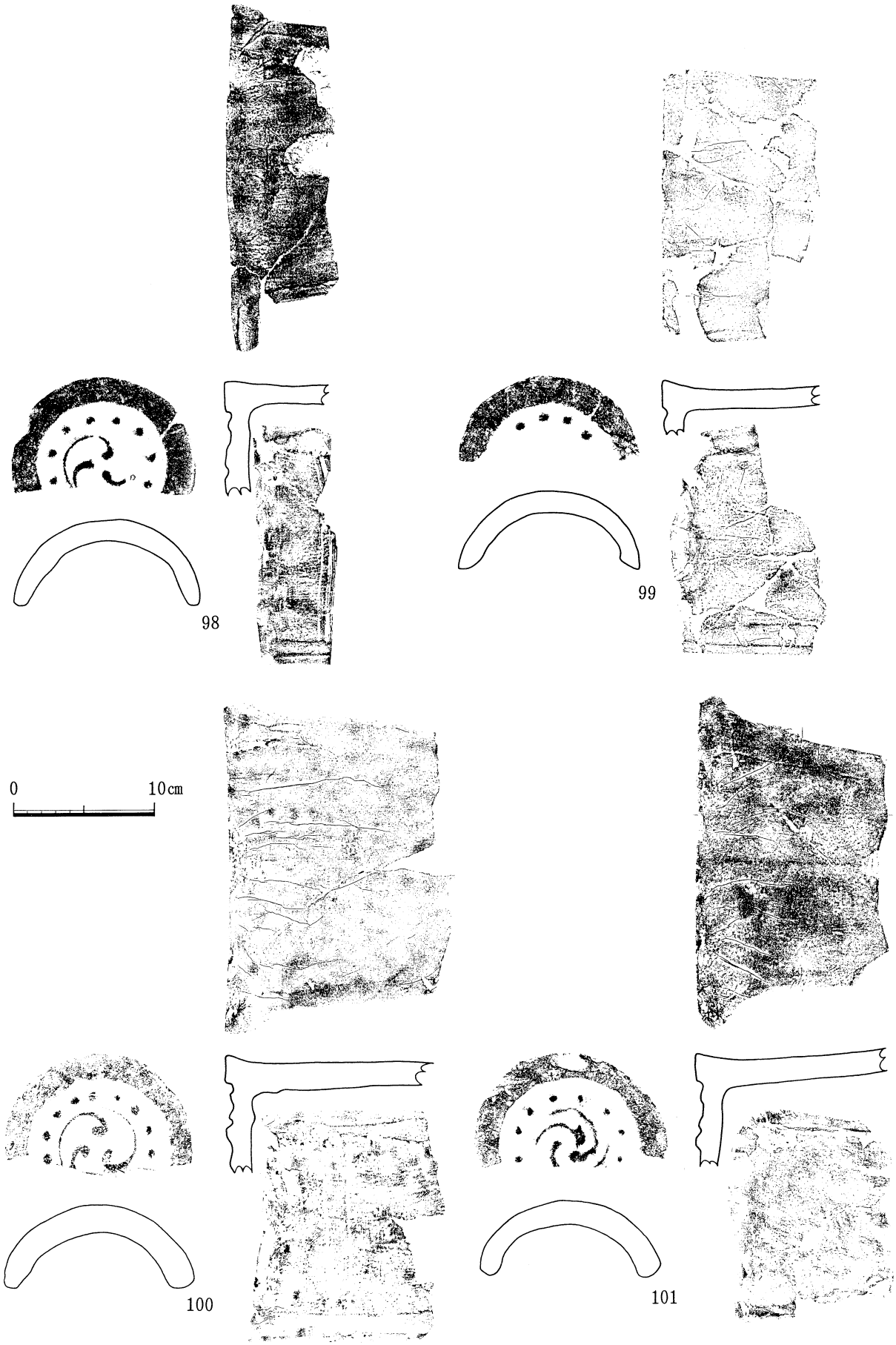
第35図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図④（瓦溜り５）



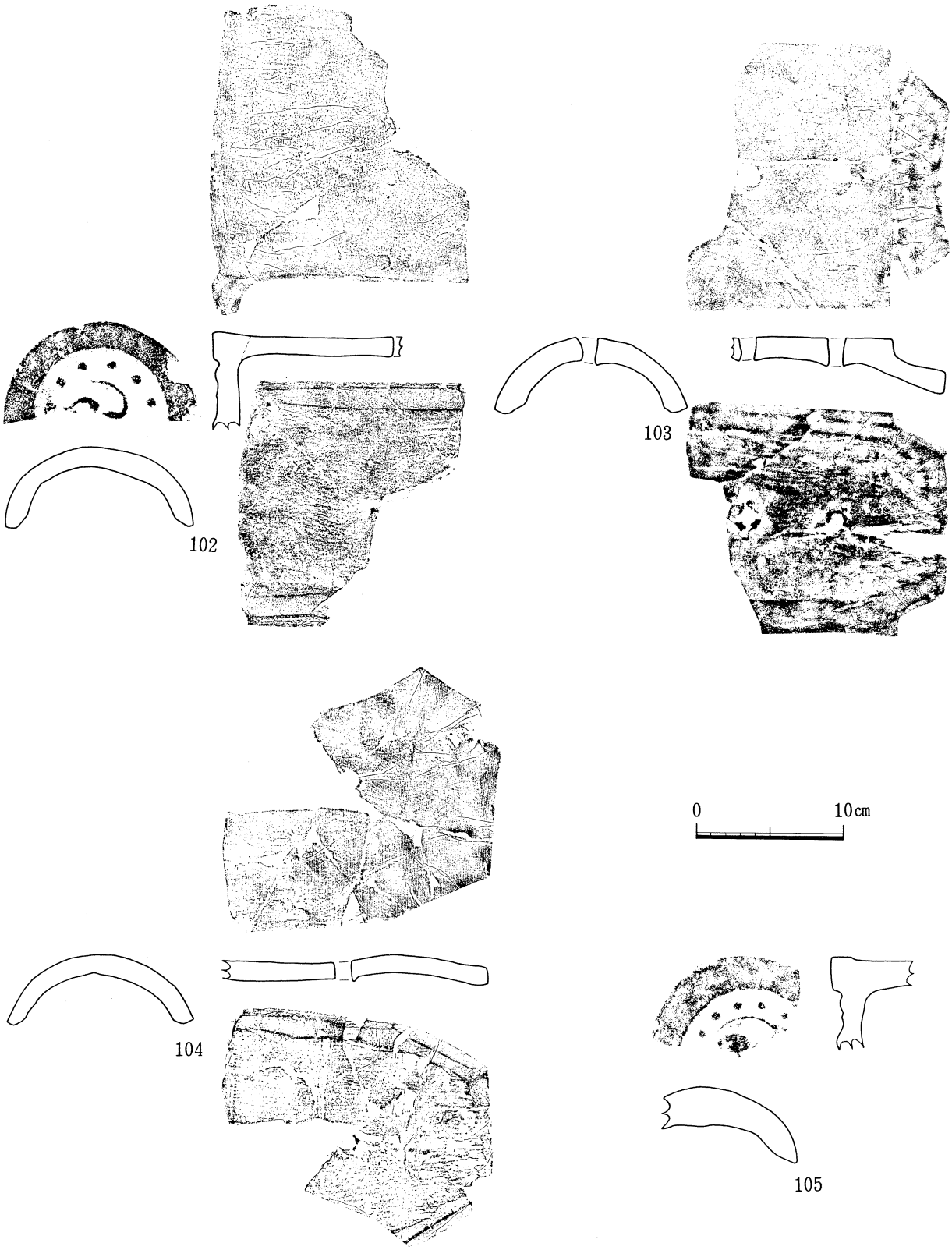
第36図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑤（瓦溜り７）



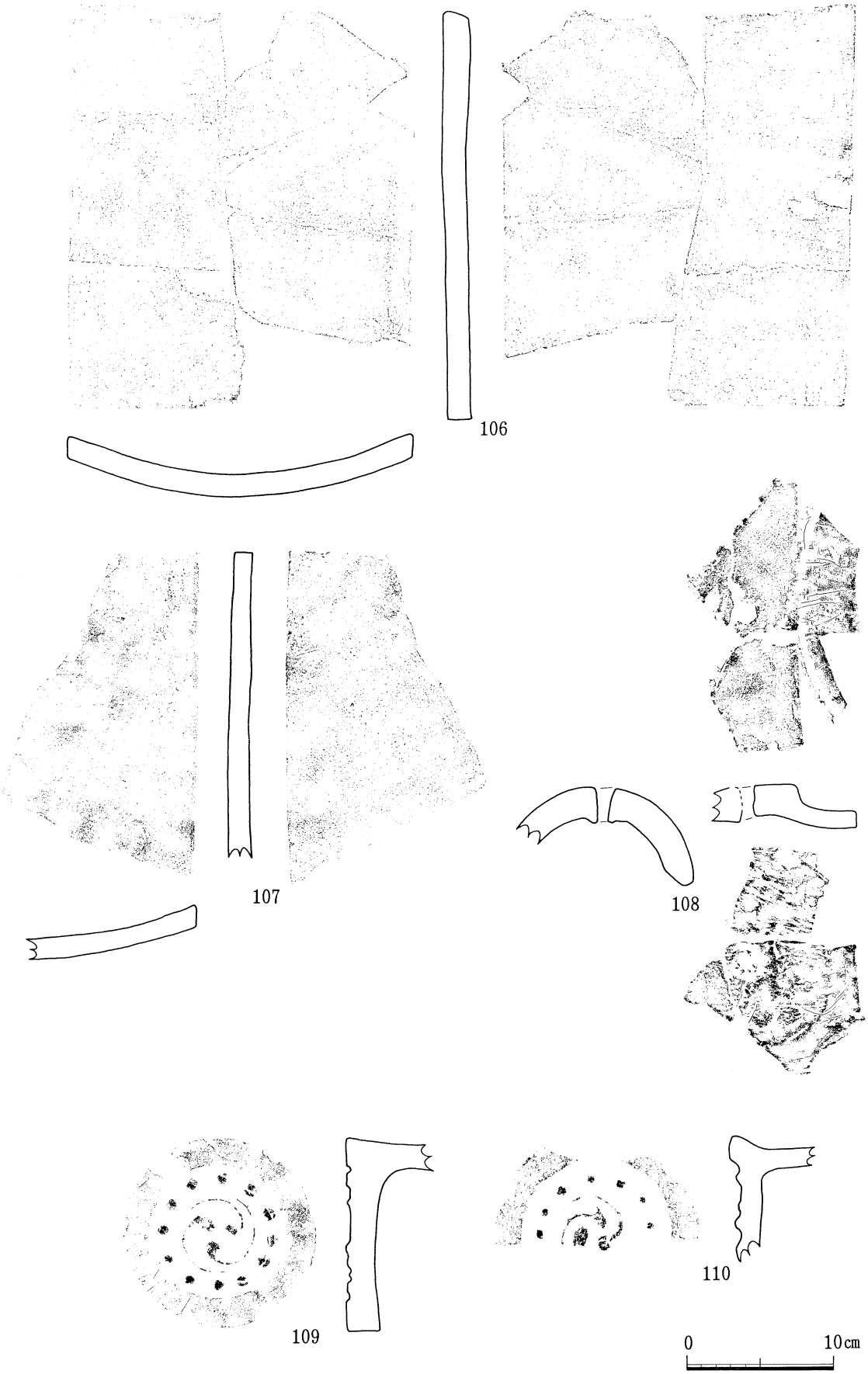
第37図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑥（瓦溜り７）



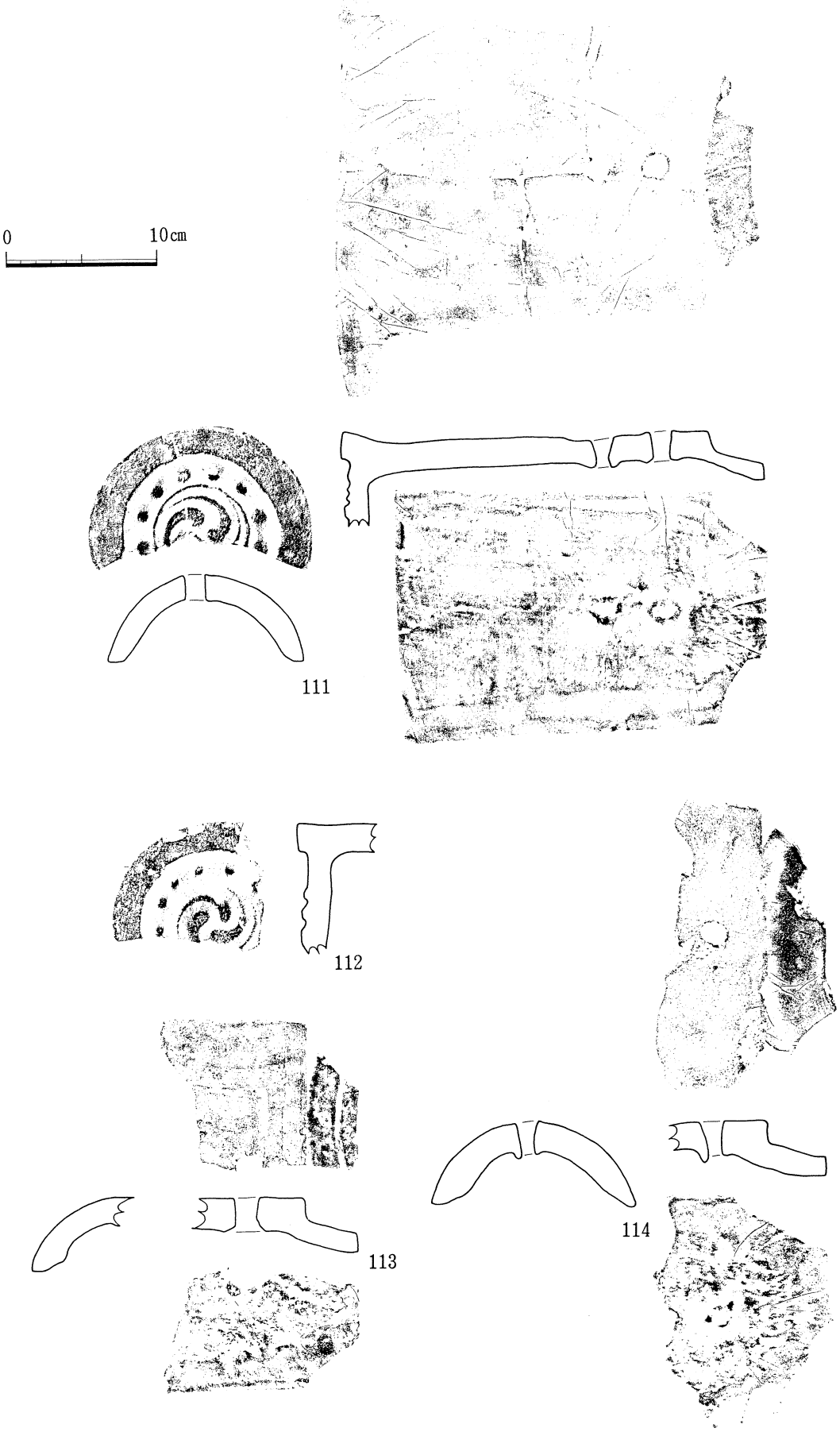
第38図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑦（瓦溜り７）



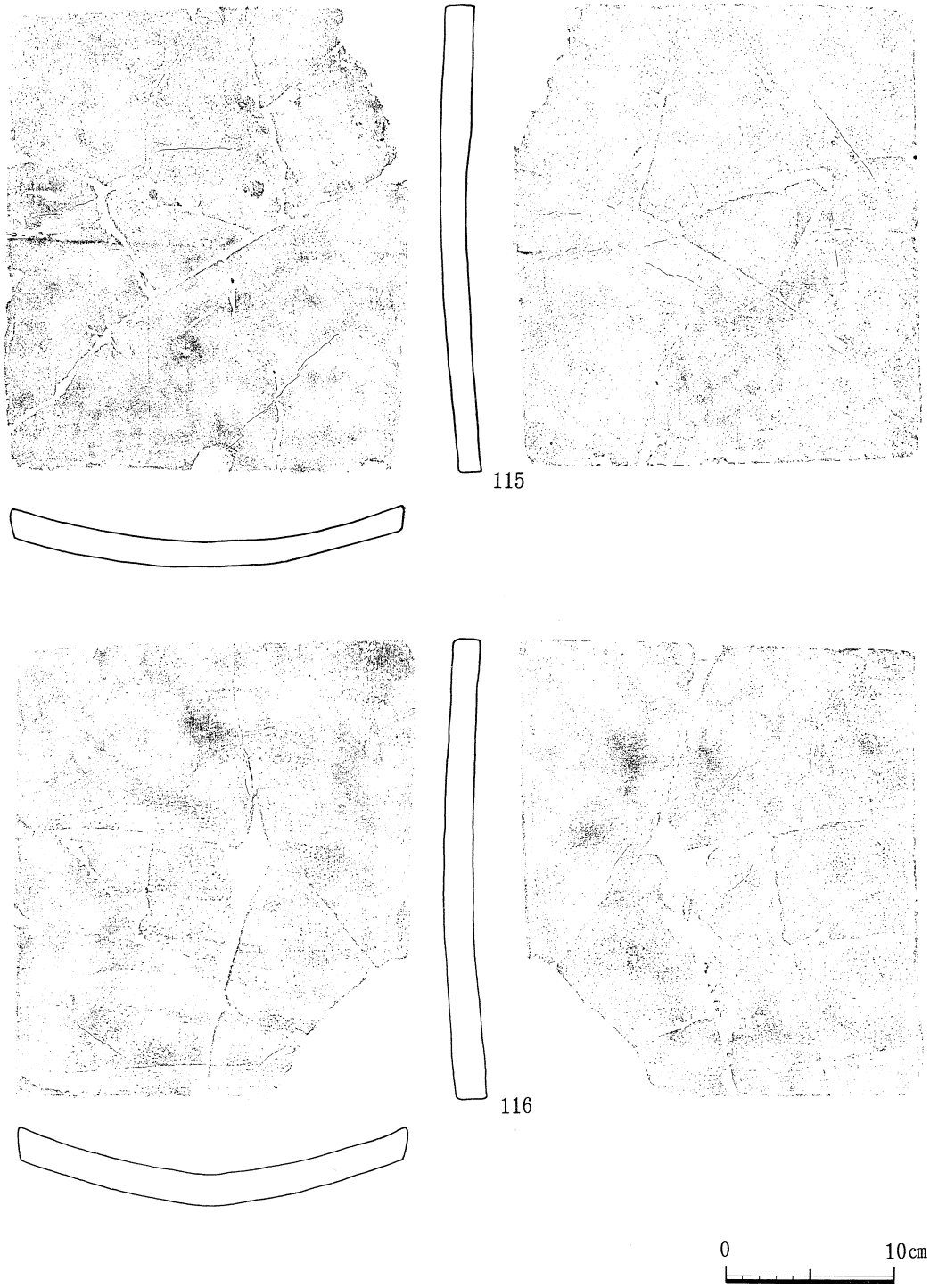
第39図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑧（102～104瓦溜り７、105瓦溜り８）



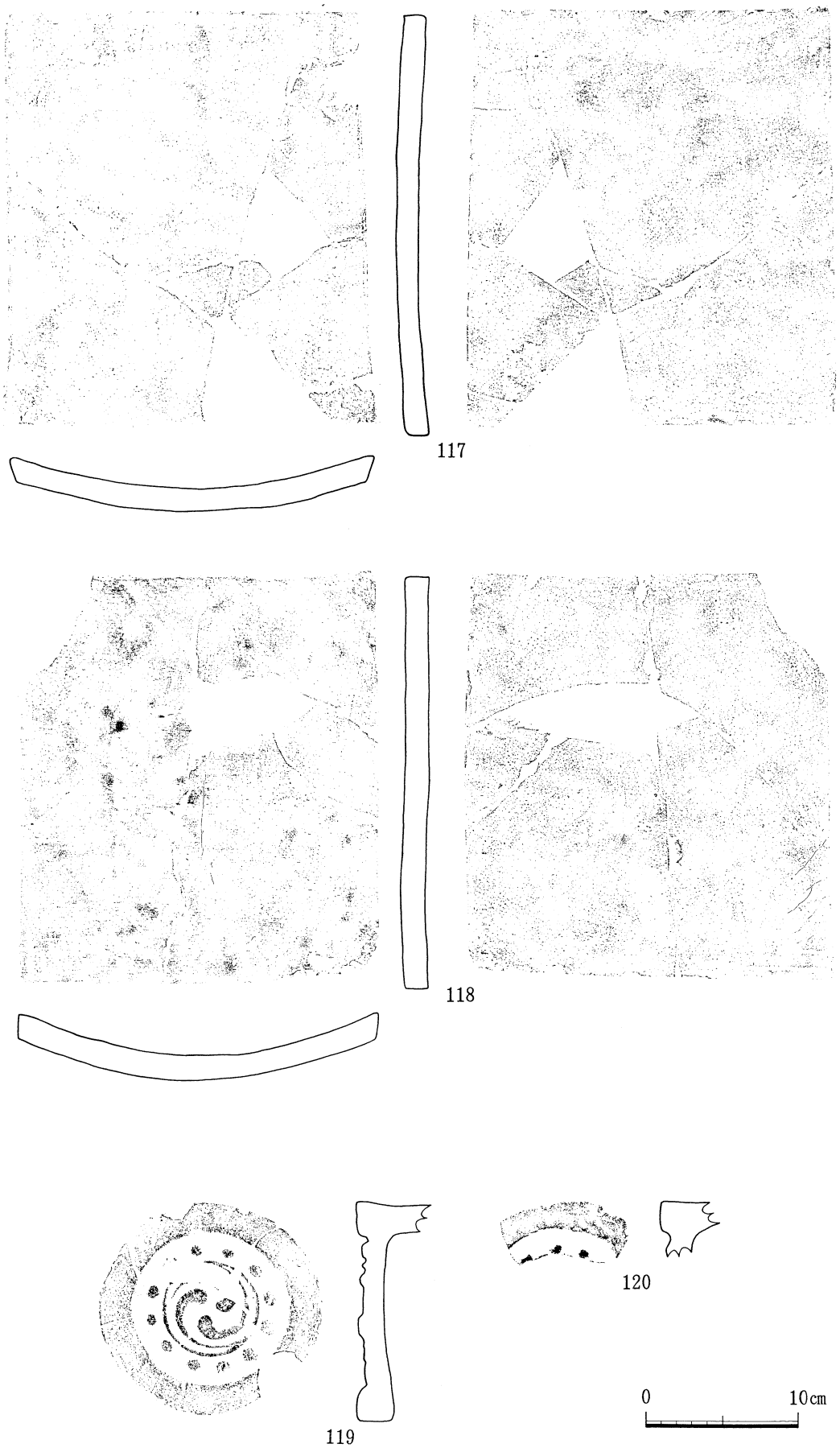
第40図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑨（瓦溜り９）



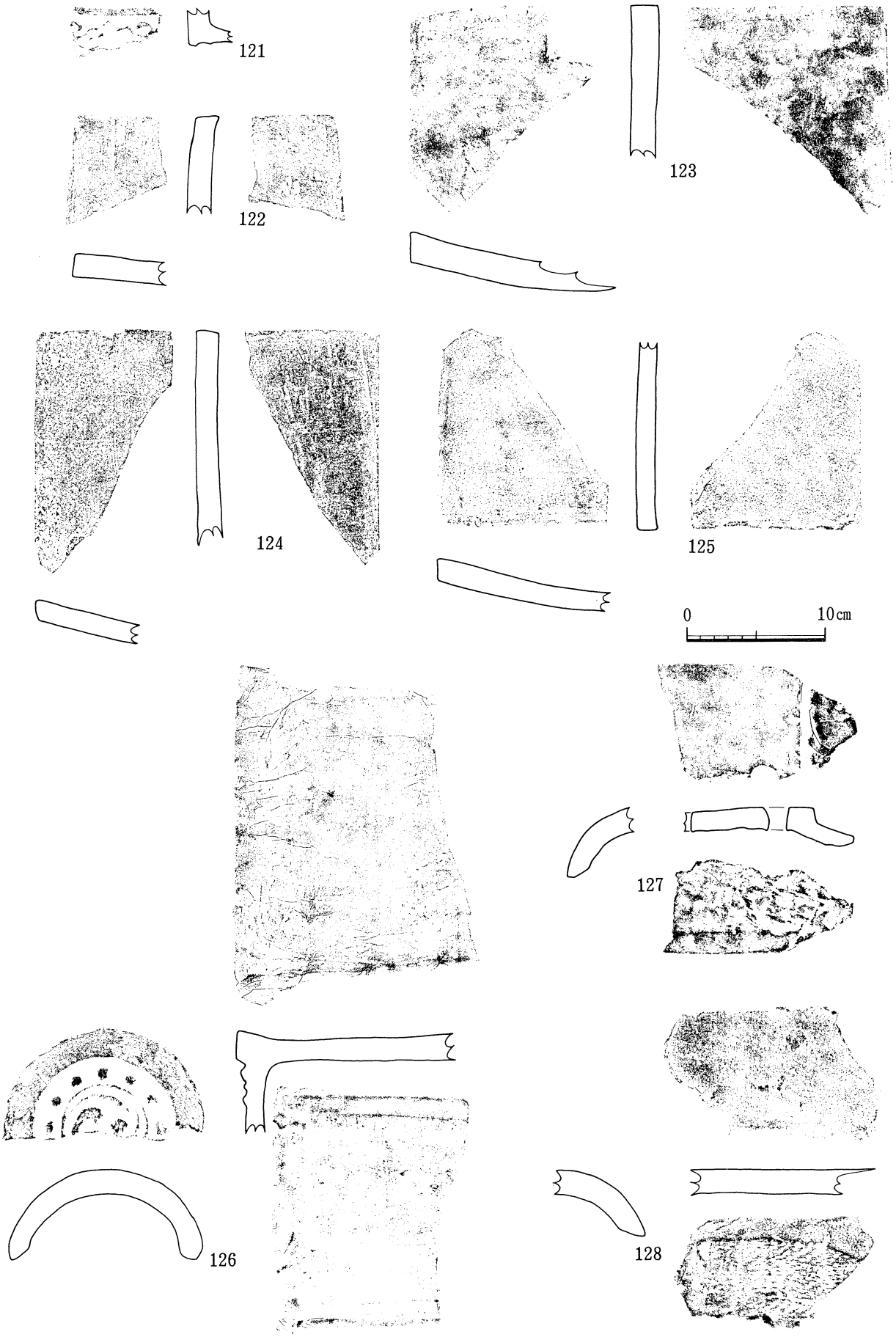
第41図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑩（瓦溜り10）



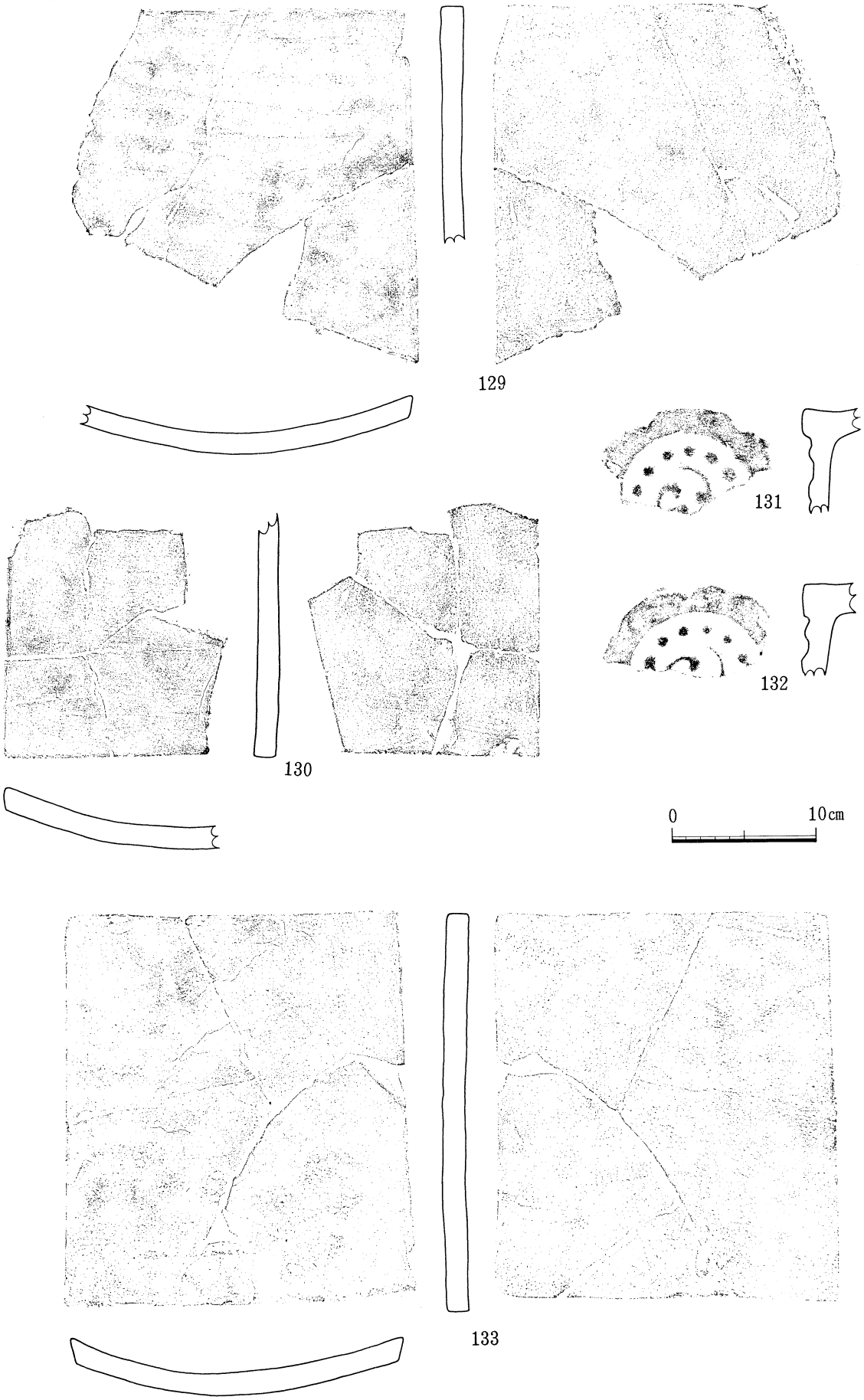
第42図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑪（瓦溜り11）



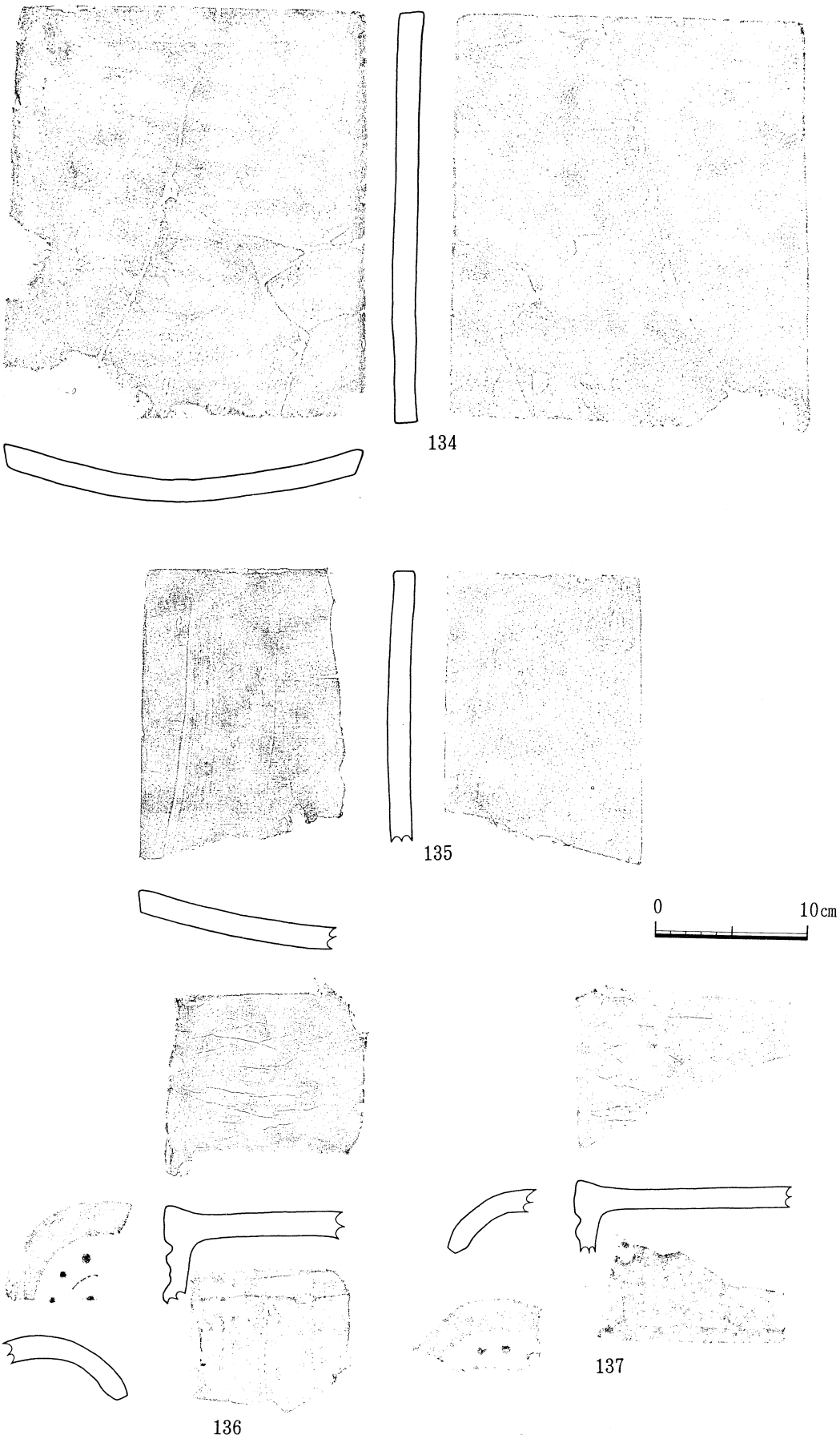
第43図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑫（117・118瓦溜り11、119・120瓦溜り12）



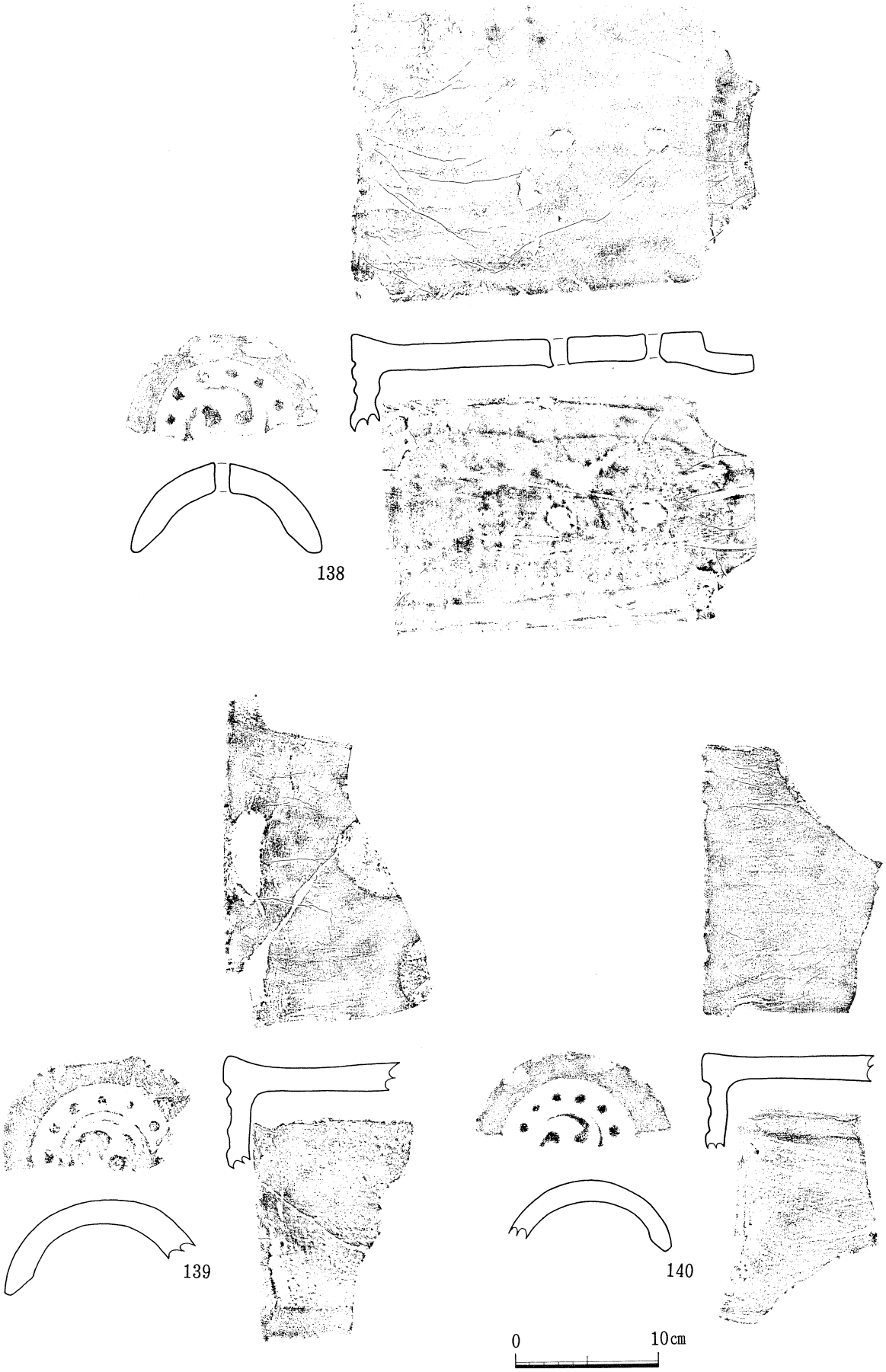
第44図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑬（瓦溜り13）



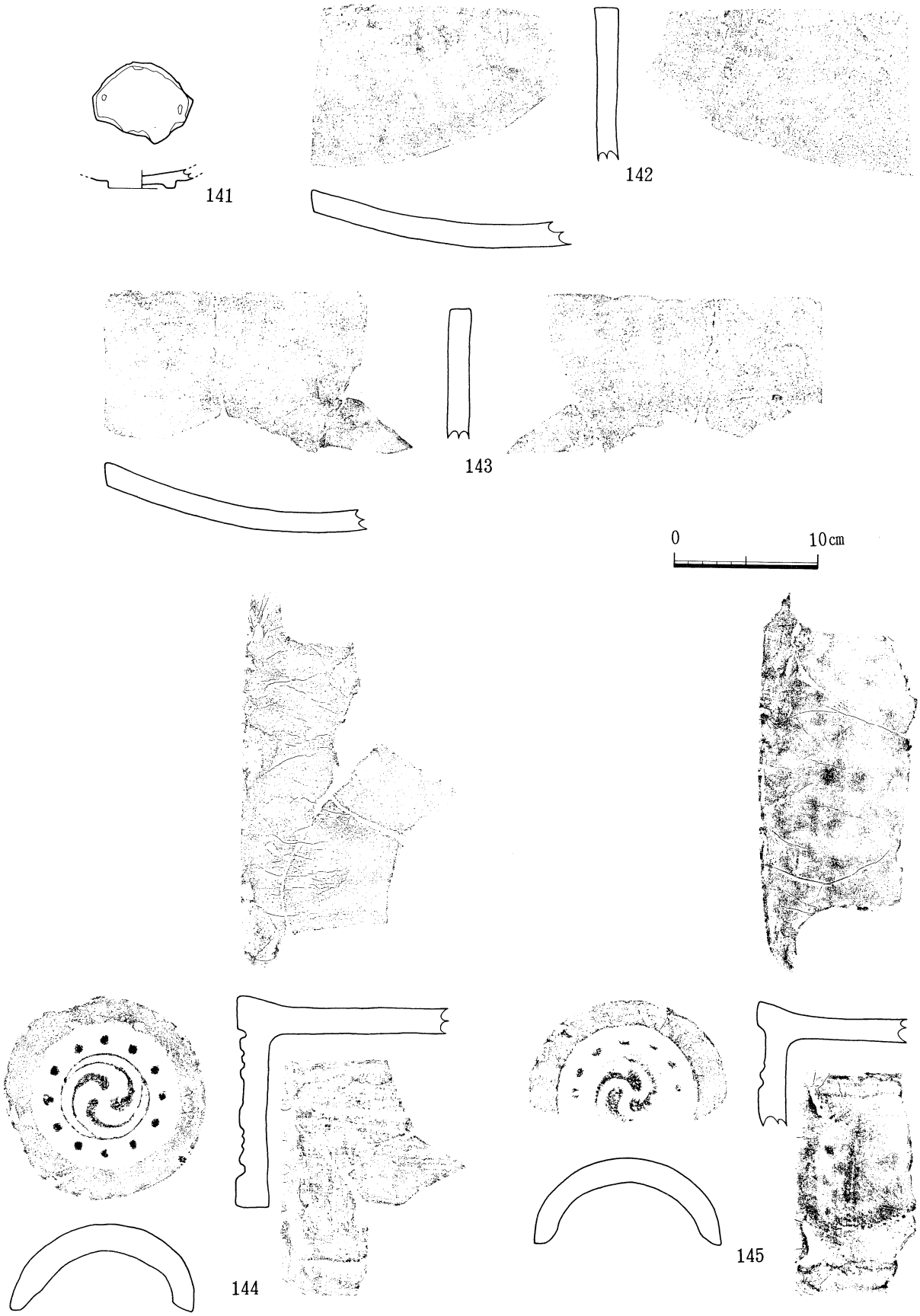
第45図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑭（129～132瓦溜り14、133瓦溜り15）



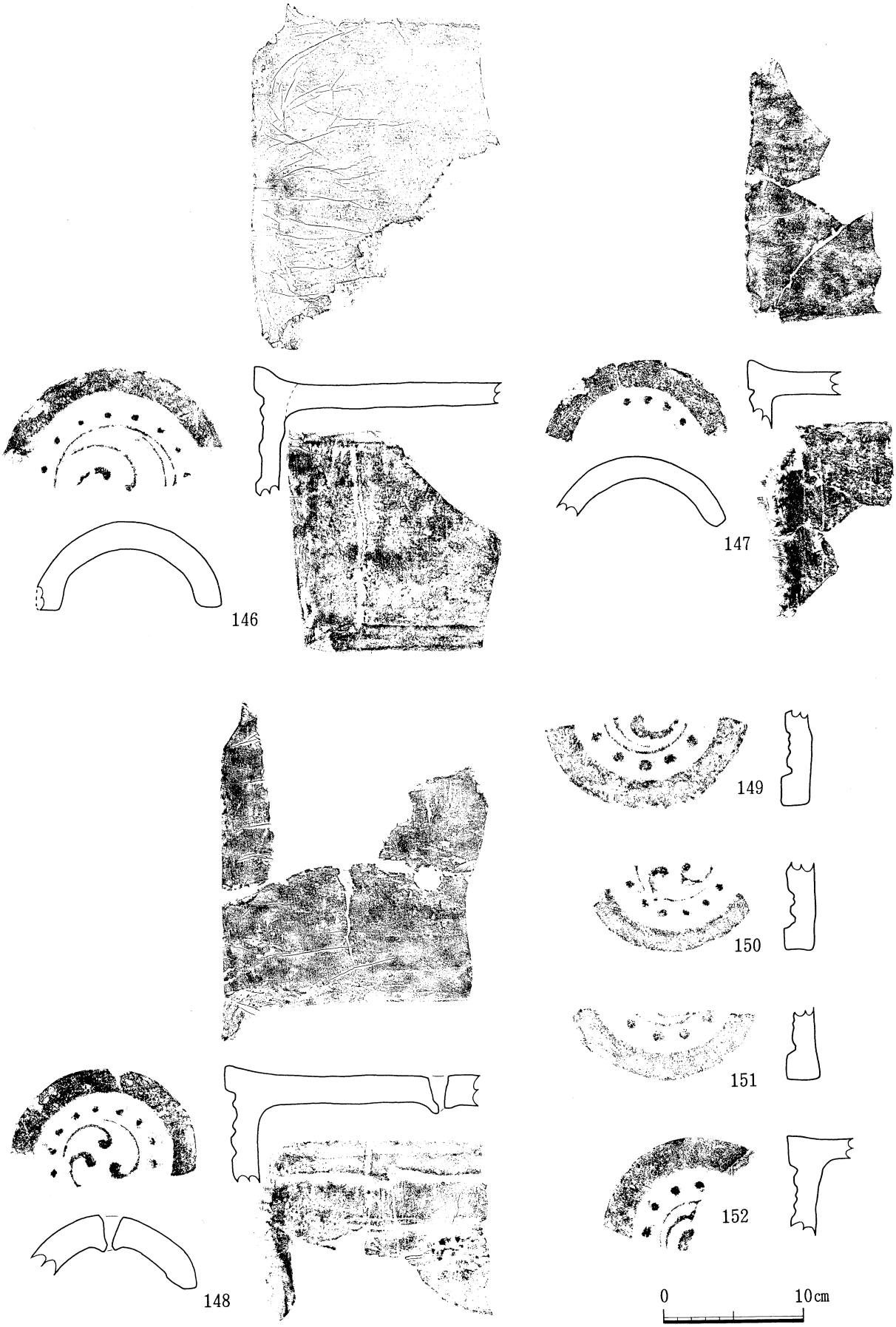
第46図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑮（瓦溜り15）



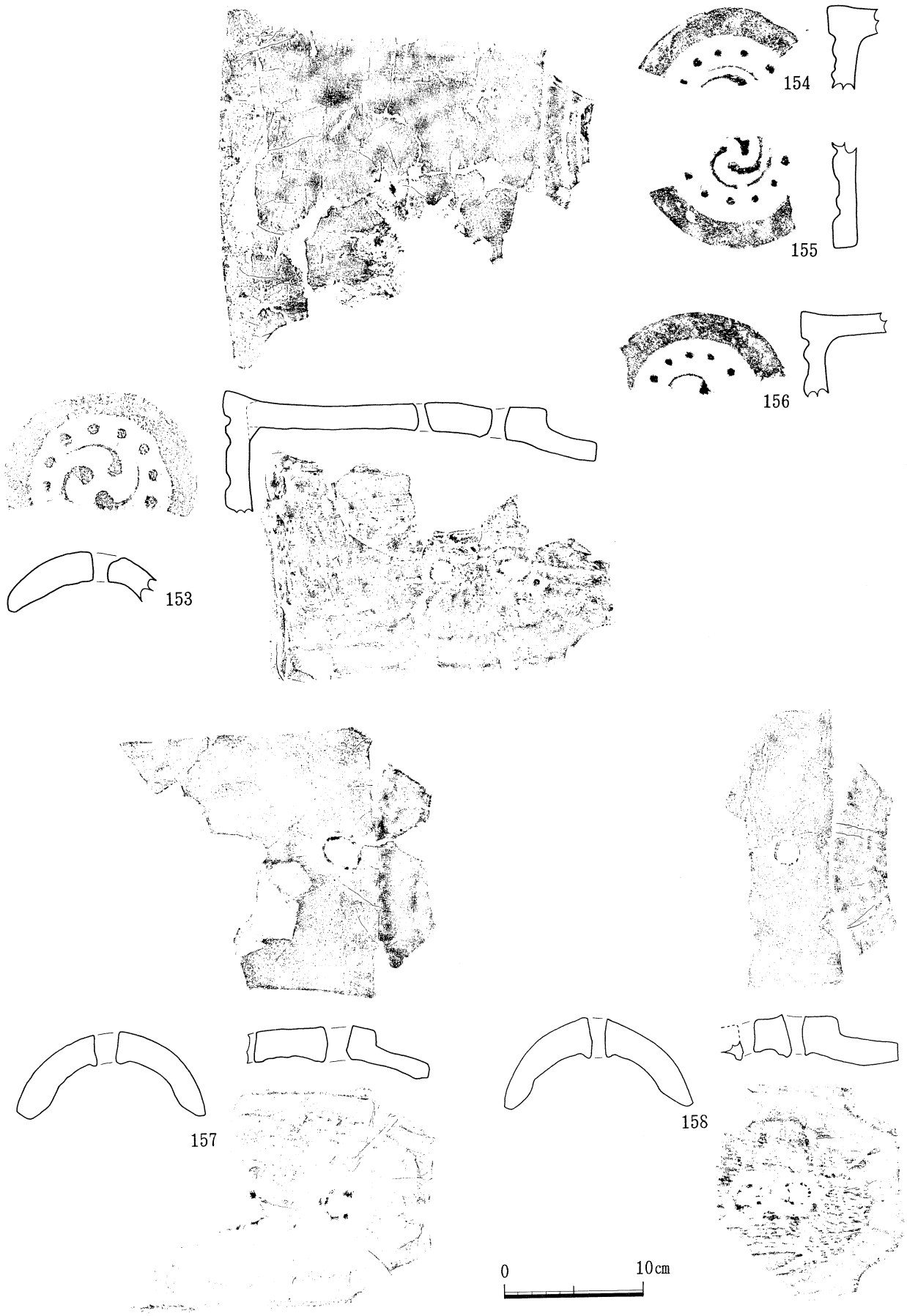
第47図　瓦列状遺構内瓦溜り出土瓦実測図⑯（瓦溜り15）



第48図　瓦列遺構周辺出土遺物実測図①



第49図　瓦列遺構周辺出土遺物実測図②



第50図　瓦列遺構周辺出土遺物実測図③

約30箱分出土した。瓦以外の遺物については、土師器や陶磁器の細片が数点出土しただけである。1～57は東西に立ち並ぶ平瓦、58～77は平瓦のつぎ目に所在した軒丸瓦、 78～140は瓦溜り出土の瓦、141～158は遺物検出時および遺構周辺で出土した瓦である。いずれの瓦もやや小振りな感じも受ける。供伴する遺物が無いため、詳細な時期は不明であるが、整地土による造成面上に設けられた遺構であり、生駒期まではさかのぼらず、松平氏による東ノ丸築造以後のものと考えられる。

礎石

瓦列状遺構の東側に隣接して2つの礎石を検出した。礎石501と礎石502である。 礎石501は安山岩で、長辺50㎝、短辺30㎝の南北に長い長方形を呈する。 礎石502は花崗岩で長辺90㎝、短辺50㎝の南北に長いややいびつな長方形を呈する。石材、規格の違いから、同一建物の礎石とは考えがたい。

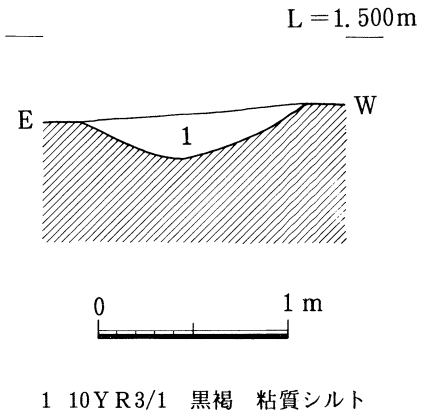
礎石501の北側には礎石と同じ安山岩の小石材が3点並んで所在している。礎石501および小石材の並びが瓦列状遺構に平行していることから、小石材を礎石とした建物が考えられなくはない。

一方、 礎石502については、他に対になるような石材が検出されていないため、建物の復元はできない。

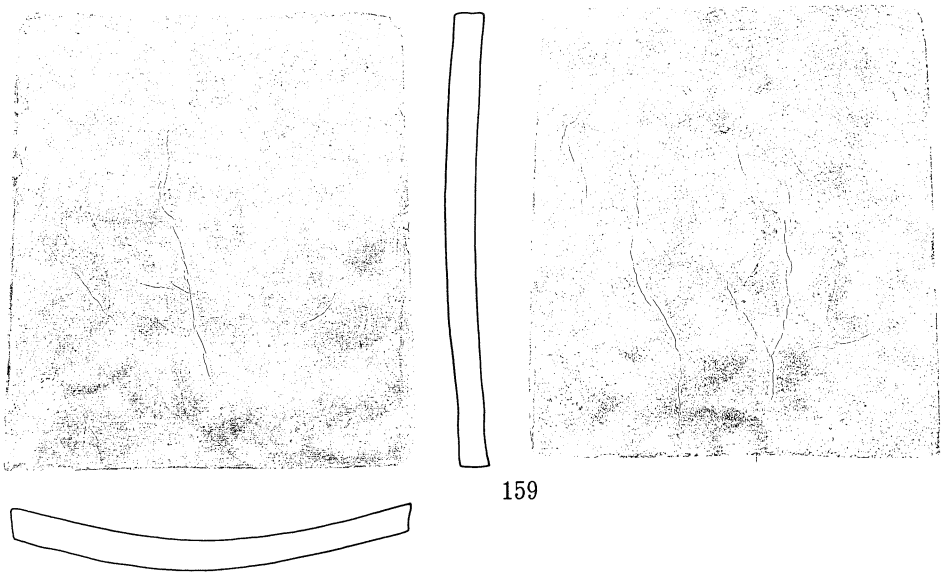
ＳＫ－509

調査区の南西部分で検出した土坑である。 長さ7.3m、最大幅2.1mを測り、蛇行したした溝状を呈する。 土坑の南端部分は一段高くなっているものの、全体にやや深いレンズ状の断面形態となっている。埋土は黒褐色粘質シルト層の単層で、深さ25㎝を測る。遺物はコンテナ3箱分出土しており、瓦が大半を占め、土師器の小片を数点含む程度である。

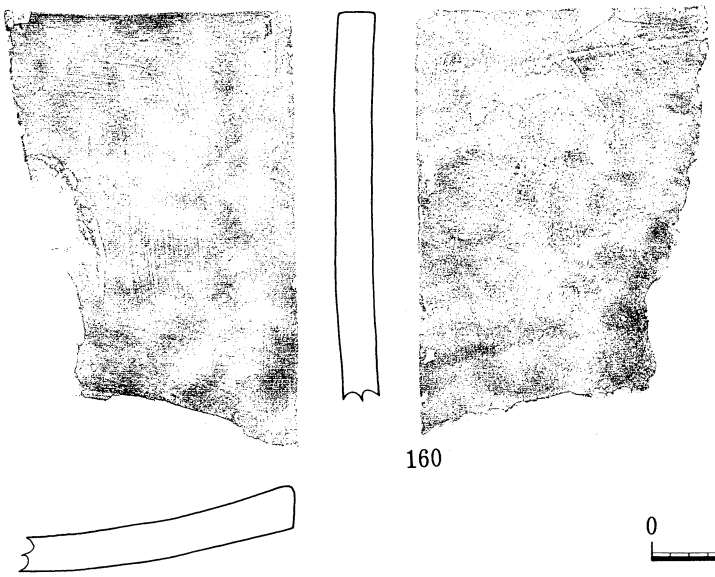
図示できるものを第52～54図に掲載した。159～162は平瓦である。 両面とも丁寧にナデが施されている。163は軒平瓦である。164～169は軒丸瓦である。瓦当面の巴文はやや太く短いつくりになっている。170～173は丸瓦である。全体に小振りで玉縁も短い。詳細な時期は不明である。



第51図 ＳＫ－509断面図

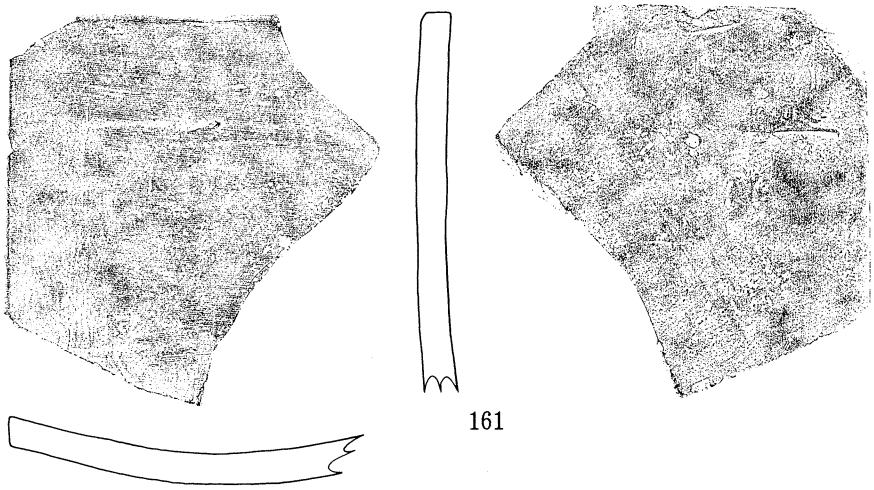


159



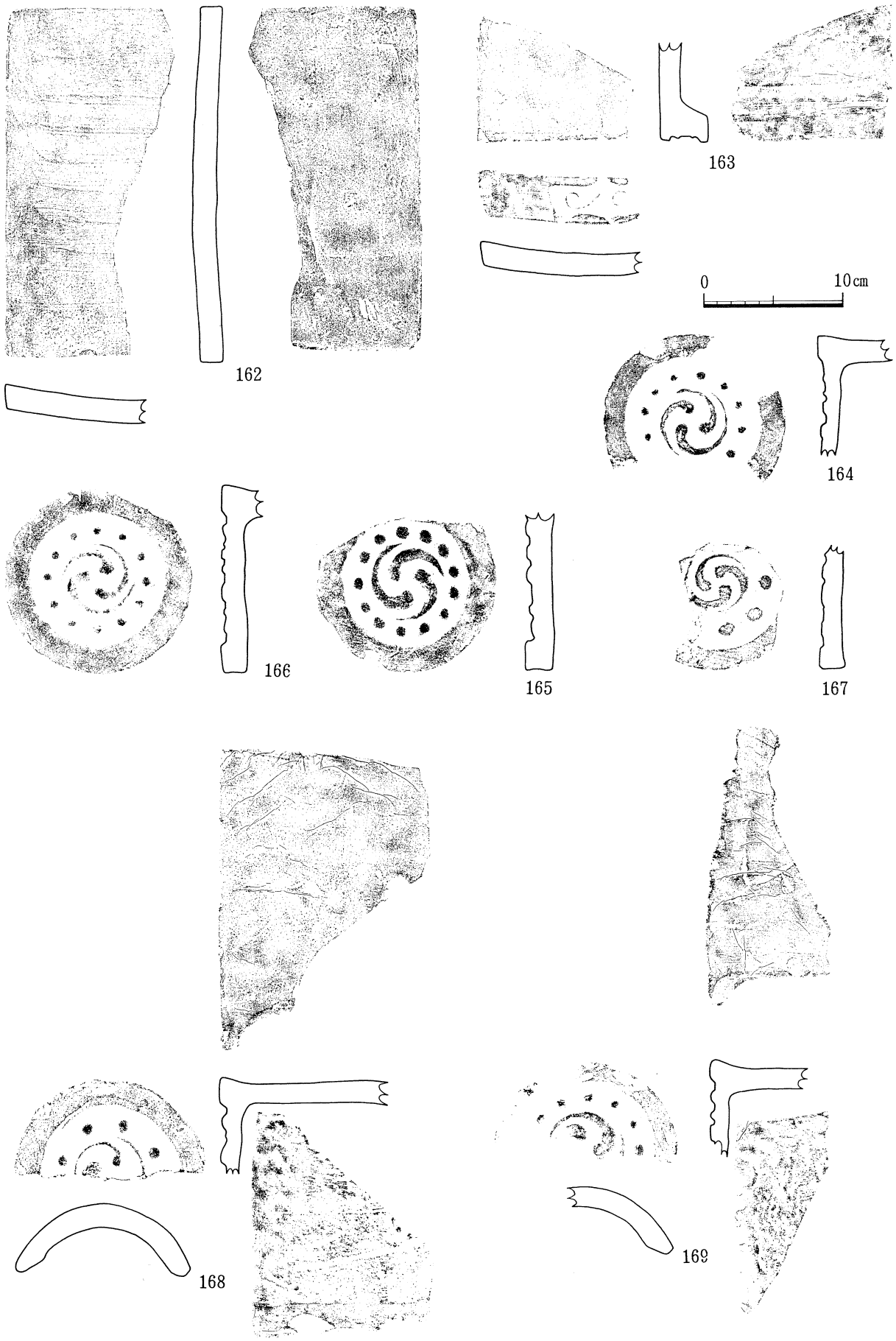
160

0　10cm

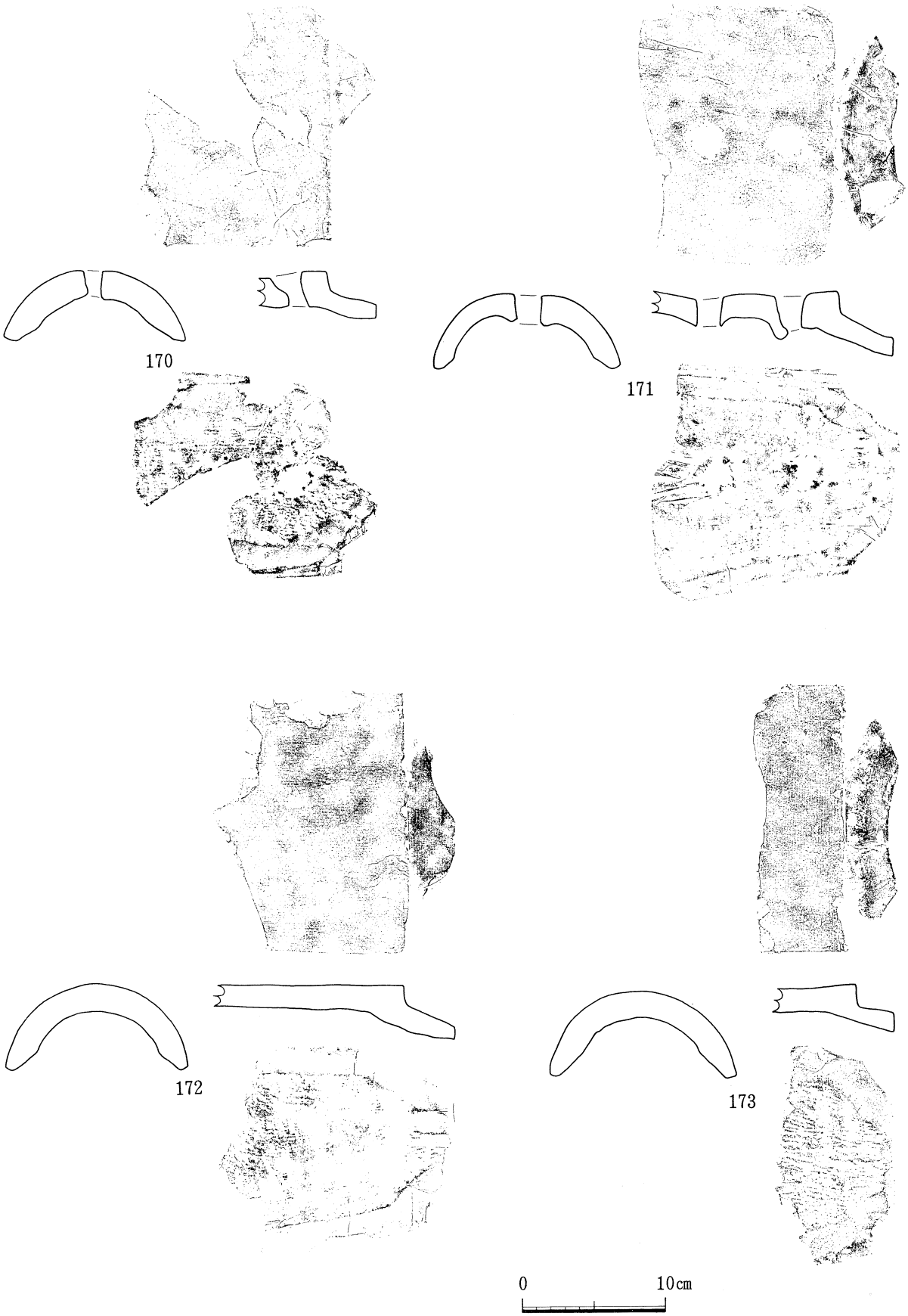


161

第52図　ＳＫ－509出土瓦実測図①



第53図　ＳＫ－509出土瓦実測図②



第54図　ＳＫ－509出土瓦実測図③

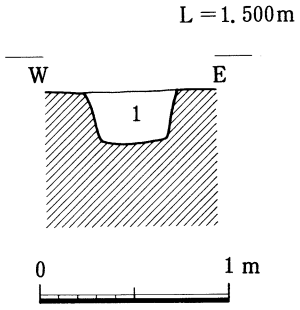
第6節　第4遺構面

にぶい黄色の礫層の整地土層（第6層）上面において検出した遺構面である。第6層は調査地の北半だけに堆積が認められた整地土層であるため、この面での検出遺構は北半にかたよって分布している。検出遺構としては、土坑4基、ピット13基を数える。遺構出土遺物および包含層出土遺物ともに瓦の小片のみで、遺構面の時期決定は難しいが、上層・下層遺構面の年代観から、概ね18世紀後半のものと考えられる。

ＳＫ－401

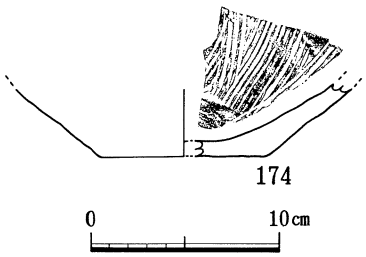
調査区の北西端で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径80㎝、短径70㎝、深さ25㎝を測る。埋土は褐灰色粘質シルト層の単層で、断面形状は逆台形を呈する。

出土遺物は瓦の小片が多いが、備前焼の擂鉢が1点出土した。 第56図174である。内面の擂目は粗いが密である。外面はヨコナデである。



1　10ＹＲ4/1　褐灰　粘質シルト

第55図　ＳＫ－401断面図



第56図　ＳＫ－401出土遺物実測図

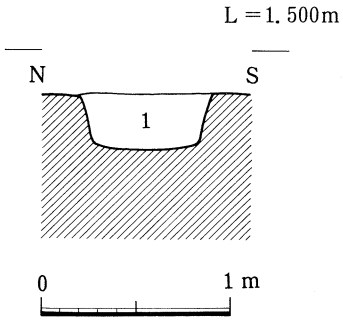
ＳＫ－402

調査区の北東部で検出した土坑である。 平面形態は短い溝状を呈し、長辺1.2m、短辺40㎝、深さ20㎝を測る。埋土は褐灰色粘質シルト層の単層で、断面形状は逆台形を呈する。遺物は出土していない。

ＳＫ－403

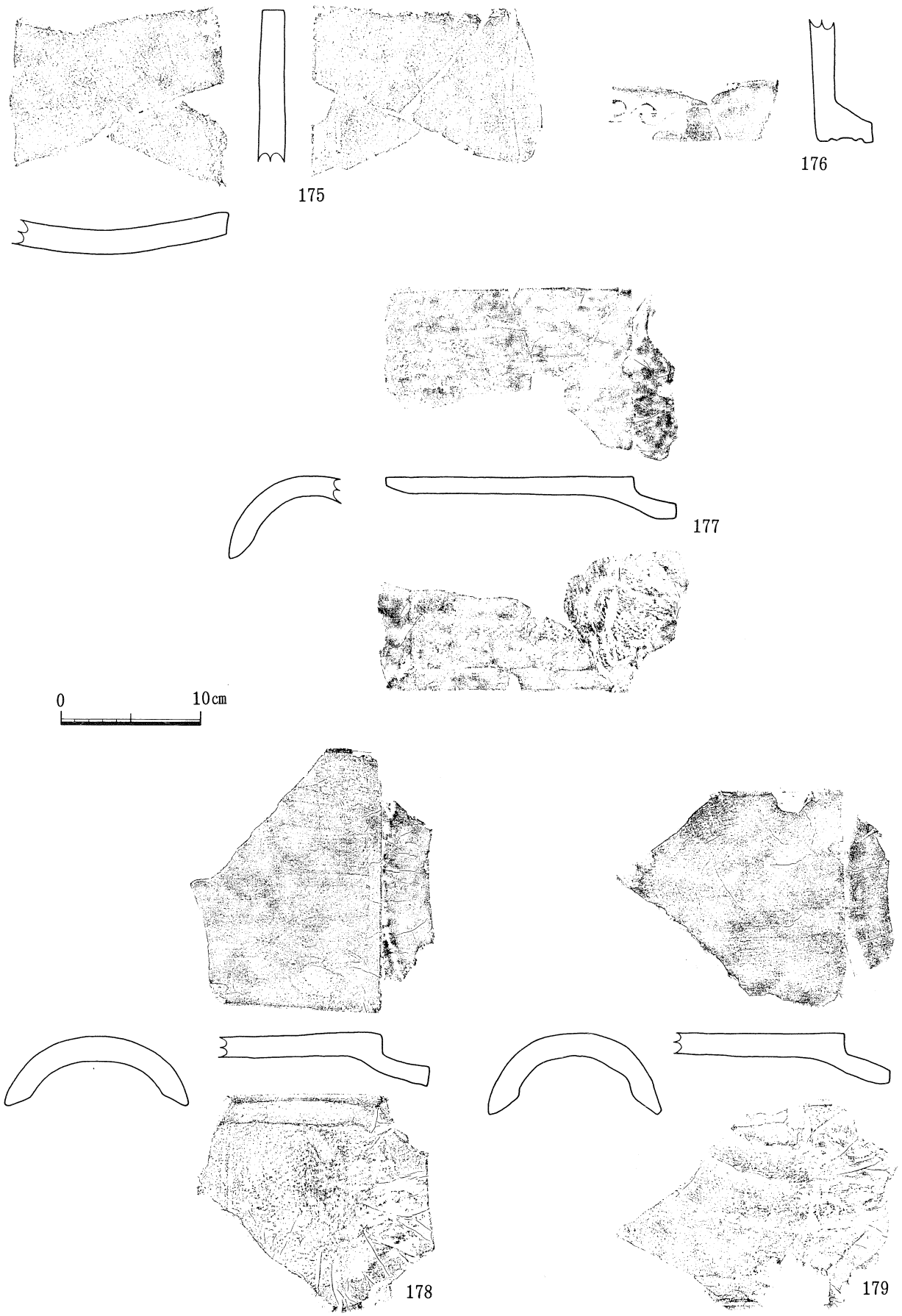
調査区の北東端で検出した土坑である。平面形態は長方形を呈し、長辺70㎝、短辺55㎝、深さ30㎝を測る。埋土は褐灰色粘質シルト層の単層で、断面形態は逆台形を呈する。埋土中からは漆喰の小片が多量に出土した。

遺物は、瓦片を中心にコンテナ1箱分出土した。図示できたものを第58～60図に掲載した。 175・183・184は平瓦である。両面にナデが施されている。176は軒平瓦である。 177～181は丸瓦である。丸瓦は長さ21～24㎝と全体に小振りである。凹面

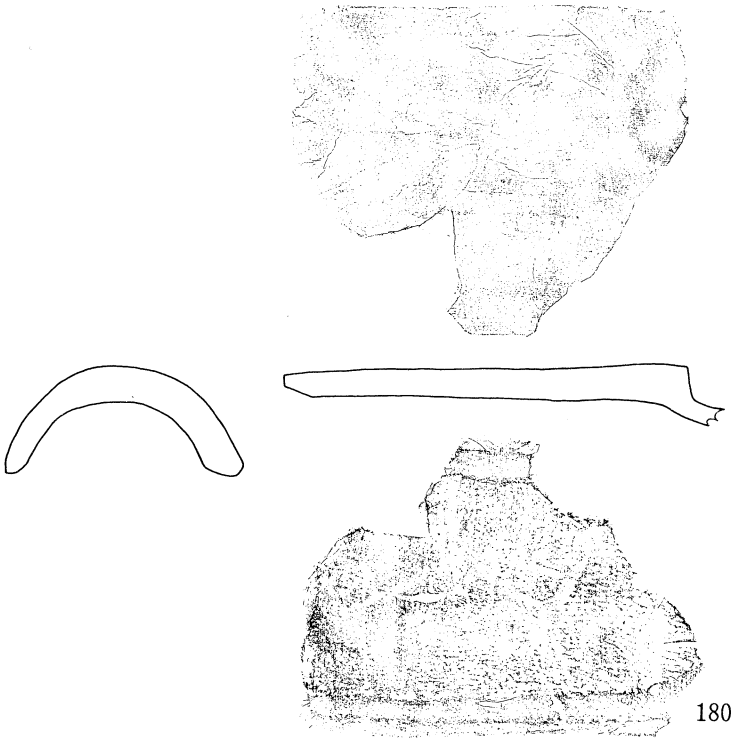


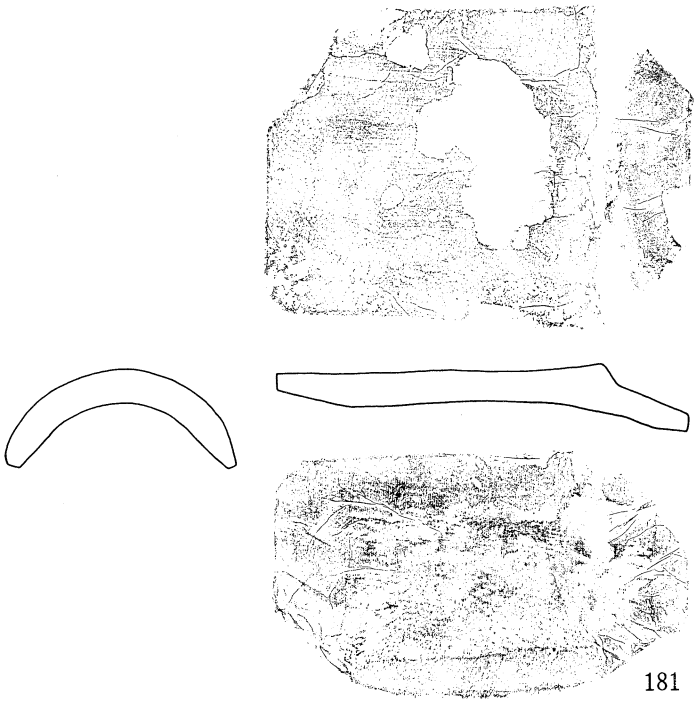
1　10ＹＲ4/1　褐灰　粘質シルト

第57図　ＳＫ－403断面図



第58図　ＳＫ－403出土遺物①

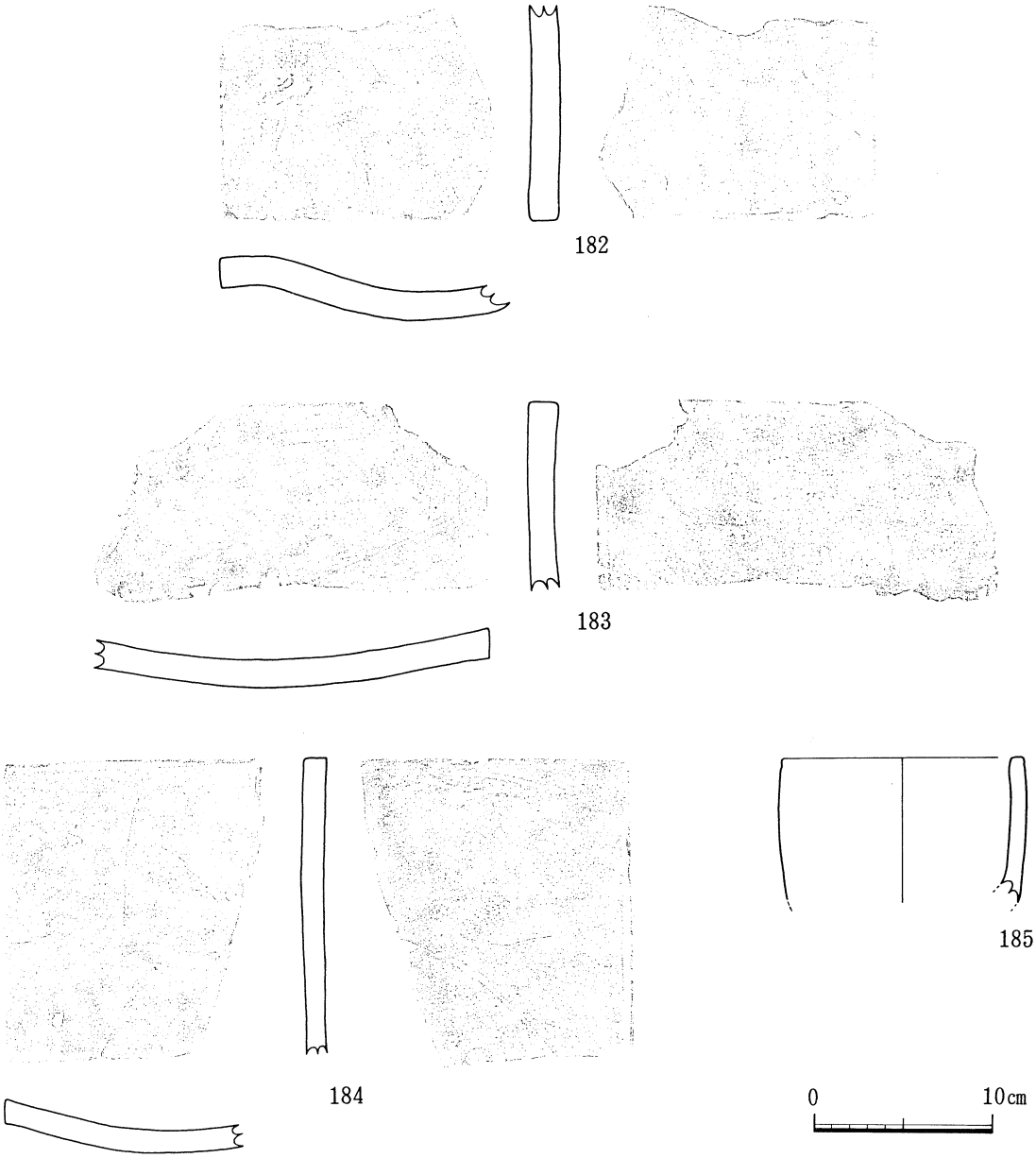




0　　10cm

第59図　ＳＫ－403出土遺物②

はコビキＢ・ゴザ目・ナデが認められ、凸面はナデである。 179の凸面には漆喰が付着していた。182は桟瓦である。185は備前焼の鉢で内外面ともナデが施されている。18世紀後半以降と考えられる。



第60図　ＳＫ－403出土遺物③

ＳＫ－404

調査区の北東部分で検出した土坑である。 平面形態はややいびつな長方形を呈し、長辺2.2m、短辺1.4m、深さ20cmを測る。 埋土は褐灰色粘質シルト層で、断面形態は逆台形を呈する。底面でピット1基を検出した。

出土遺物は無く、時期不明である。

第７節　第３遺構面

黄灰色粘土層の整地土層（第５層）上面において検出した遺構面である。現代の攪乱によって遺構面の大部分が削平を受けているものの、多数の遺構が見られ、さらに瓦を中心とした遺物も多量に出土した。検出遺構としては、礎石建物１棟、礎石列１列、土坑23基、溝５条、ピット多数である。遺構面を厚く覆う炭・瓦片を多量に含んだ黒色粘土層内から明治初期の陶磁器が出土することや、第３遺構面の遺構内出土遺物の時期から19世紀前半～幕末の遺構面と考えられる。

ＳＢ－301

礎石305～313で構成される礎石建物である。攪乱等により抜き取られており、９個の石材が現存するのみである。礎石に使用された石材が花崗岩であるためか、各所にひび割れが多く目立ち、礎石308については、粉々に砕けてしまっている。 礎石の大きさは、最大のもので長辺90㎝×短辺40㎝、最小のもので長辺60㎝×短辺40㎝で、長方形を呈するものが多い。南北方向に長軸を向けて据えているものが多い。礎石の加工については、柱を支える上部のみで、他の面についてはほとんど加工されていない。礎石の上面は平坦面に仕上げ、中央部分には径５㎝、深さ３㎝のほぞ穴が穿たれており、柱を支えていた場所を特定することができる。礎石のほぞ穴とほぞ穴の間隔の最大公約数は約２ｍとなっており、柱間一間は２ｍと考えられる。 柱間２ｍと考えると、ＳＫ－312・ＳＫ－320等については、この礎石建物を構成する礎石の抜き取り穴と考えることができる。

残存する９個の礎石および抜き取り穴の配列から推定すると、調査区の南側にさらに礎石が存在する可能性もあり、東西２間（約４ｍ）×南北８間（約16ｍ）以上の南北に細長い建物を復元することができる。

抜き取り穴等からの遺物の出土は無く、時期は不明である。

ＳＡ－301

礎石301～304で構成される礎石列である。 ＳＢ－301の北側約２ｍの位置に同一方位で東西に４個、約１ｍ間隔に並んだ礎石列である。ＳＢ－301の西辺延長部分にＳＡ－301の西端礎石がそろうように存在するが、東端はＳＢ－301の東辺より約１ｍ、柱間にして一間分内側に入る。 礎石は最大のもので、長辺55㎝×短辺25㎝の長方形を呈し、ＳＢ－301を構成する礎石に比べ小さい。また、長辺を東西に向けている点もＳＢ－301とは異なる点である。 礎石は加工痕もほとんどなく、ほぞ穴も見られない。

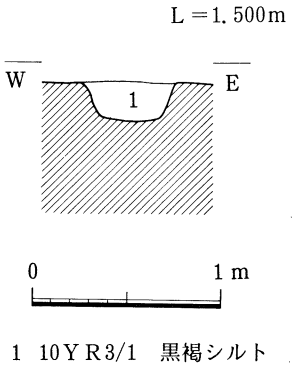
ＳＡ－301に伴い建物になるような礎石は北側および南側に認められない。 南側に関してはＳＢ－301が所在するため礎石が認められないと考えられるが、 北側については十分にそのスペースが存在したと思われる。調査区外に逃げることも予想されるが、ＳＡ－301の柱間（１ｍ)およびＳＢ－301の柱間（２ｍ）の間隔では北側に礎石は見られない。また、礎石304の西にさらにもう１点礎石が存在したことも考えられ、ＳＢ－301の建物に付随する施設であった可能性も十分考えられる。しかしながら、現状では礎石の規模および加工等の違いから別の遺構とした。

遺構の時期としてはＳＢ－301と同時期と思われるが、同様に詳細な時期は不明である。

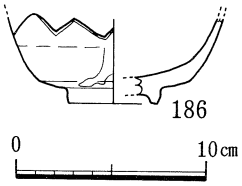
ＳＫ－302

調査区の北端で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、直径50㎝、深さ20㎝を測る。埋土は黒褐色シルトの単層で、断面形態は逆台形を呈する。

出土遺物は第62図の肥前系陶器碗である。内外面ともに暗褐色の釉が施され、高台無釉とする。



第61図 ＳＫ－302断面図

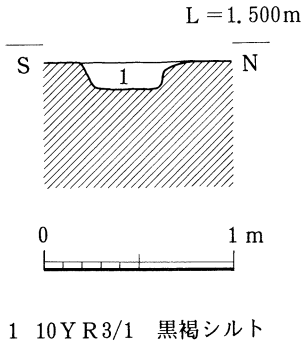


第62図 ＳＫ－302出土遺物実測図

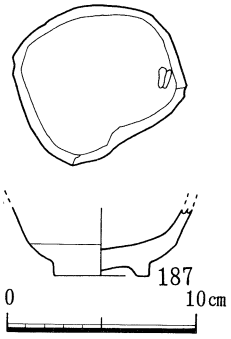
ＳＫ－304

調査区の北端、ＳＫ－302の南側で検出した土坑である。平面形態は円形を呈し、直径70㎝、深さ15㎝を測る。埋土は黒褐色シルト層の単層で、断面は北肩が二段落ちになっている。

出土遺物は、瓦の小片とともに第64図187の肥前系陶器碗が出土した。内外面とも暗灰黄色の施釉、高台無釉とする。内面には重ね焼の痕跡が認められる。



第63図 ＳＫ－304断面図

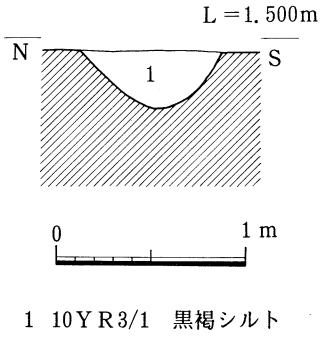


第64図 ＳＫ－304出土遺物実測図

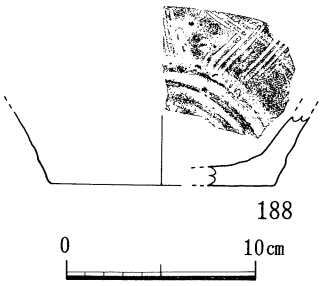
ＳＫ－306

調査区の北端、 礎石301に切られた状態で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径１ｍ、短径75㎝、深さ30㎝を測る。埋土は黒褐色シルト層の単層で、断面形態は半円形を呈する。

出土遺物中図示できたものは、第66図188の備前焼擂鉢である。外面ヨコナデ、内面に４本一束の擂目が認められる。横方向に



第65図 ＳＫ－306断面図



第66図 ＳＫ－306出土遺物実測図

擂目を施していることから中世末の時期が考えられ、混入品である。

ＳＫ－307

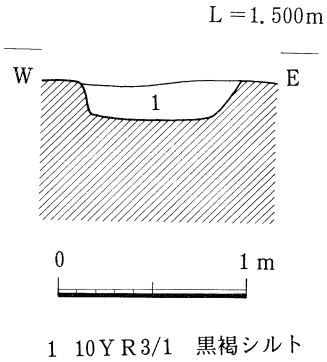
調査区の北東端、ＳＡ－301の下層で検出した土坑である。 土坑の東端は調査区外に延びるため不明であるが、平面形態は蛇行した長方形を呈する。検出延長4.7m、短辺2.7m、深さ20mを測る。埋土黒褐色シルト層の単層で、埋土中に多量の漆喰の小片を含む。断面形態は浅い逆台形である。

遺物は出土していない。

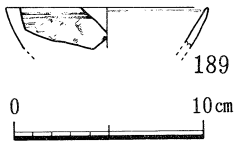
ＳＫ－309

調査地の東半中央部で攪乱に囲まれた状態で検出した土坑である。平面形態は卵形を呈し、長径90㎝、短径60㎝、深さ20㎝を測る。埋土は黒褐色シルト層の単層で、断面形態は逆台形を呈する。

瓦片が中心であるが、肥前系の染付碗が1点出土している。第68図189である。体部外面に草花文を描き、口縁部外面に２条、口縁部内面に１条圏線が巡る。



第67図 ＳＫ－309断面図

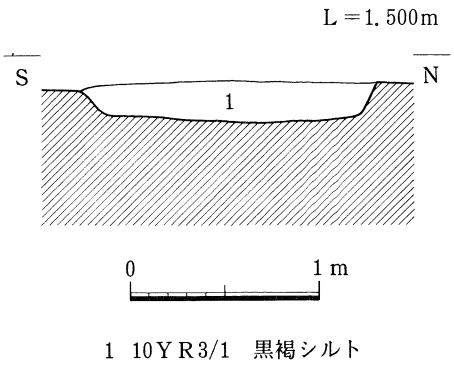


第68図 ＳＫ－309出土遺物実測図

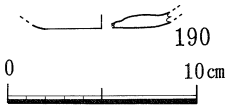
ＳＫ－311

調査区の東半中央、ＳＢ－301の中央に位置し、 攪乱およびピットに切られた状態で検出した土坑である。切り合いのため全体像は不明であるが、平面形態は隅丸長方形を呈していたと思われる。長辺1.5m、検出部分での短辺70㎝、深さ20㎝を測る。 埋土は黒褐色シルト層の単層で、断面形態は浅い逆台形を呈する。

出土遺物の多くは瓦片であるが、第70図190の土師器小皿が出土している。



第69図 ＳＫ－311断面図



第70図 ＳＫ－311出土遺物実測図

ＳＫ－312

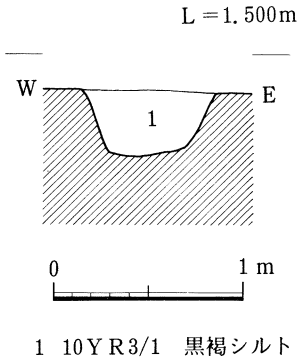
調査区の東端中央部で検出した土坑である。 ＳＢ－301を構成する礎石311と礎石312の中間に位置し、礎石の抜き取り穴と考えられる。東端は調査区外に延びるが、平面形態は卵形を呈する。検出部分の長径90cm、短径80cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色シルト層の単層で、断面形態は逆台形を呈する。

遺物は出土していない。

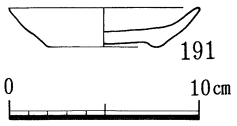
ＳＫ－316

調査区東半に所在するＳＢ－301の中央、ＳＫ－312の西に隣接した状態で検出した土坑である。平面形態は楕円形を呈し、長径70cm、短径55cm、深さ35cmを測る。埋土は黒褐色シルト層の単層で、断面形態は逆台形を呈する。

遺物は瓦の他に瀬戸美濃系陶器皿が１点出土した。第72図191である。 内外面とも施釉されており、外面にはトチン痕が見られる。



第71図 ＳＫ－316断面図



第72図 ＳＫ－316出土遺物実測図

ＳＫ－320

調査区の東南部で検出した土坑である。ＳＢ－301を構成する礎石307と礎石308の中間に位置し、礎石の抜き取り穴と考えられる。 平面形態は長方形を呈し、長辺1.1m、短辺45cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色シルト層の単層で、断面形態は逆台形を呈する。

遺物は出土していない。

ＳＤ－301

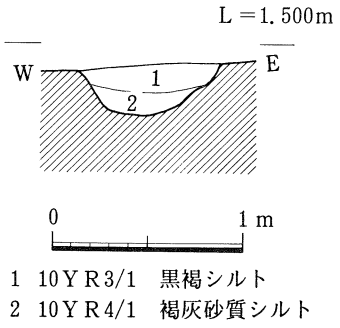
調査区の北西端で検出した南北方向の溝である。北側へ延びることが想定されるが、乱によって不明である。流路方位はＳＢ－301と同一方位をとる。 最大幅１m、深さ20cm、検出部分の長さは3.2mである。 埋土は黒褐色シルト層の単層で、断面形態は逆台形を呈する。

遺物は出土していない。

ＳＤ－302

調査区の北東部分でＳＫ－307に切られた状態で検出した溝である。幅50cm、深さ25cm、検出部分の長さ２mを測り、弧を描く。埋土は２層に分層でき、第１層が黒褐色シルト層、第２層が褐灰色砂質シルト層である。断面形態は逆台形を呈するが、東肩が２段落ちになっている。

遺物は出土していない。

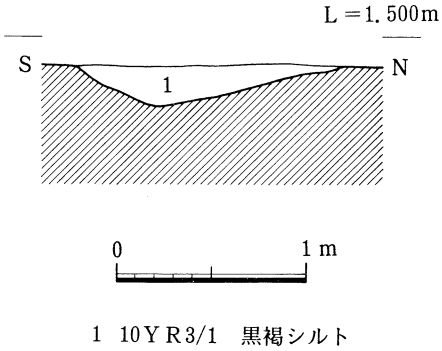


第73図 ＳＤ－302断面図

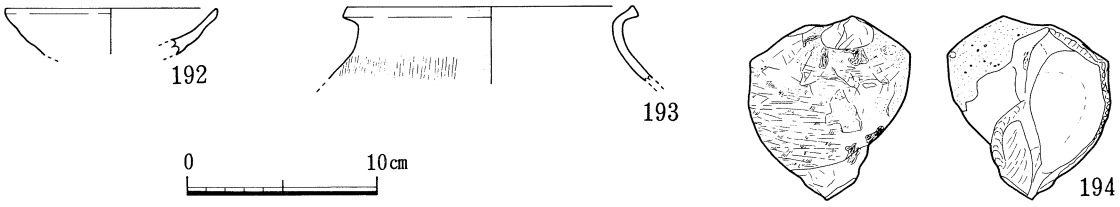
ＳＤ－303

調査区の東端中央で検出した東西方向の溝である。溝は調査区外へ延びているため、東端は検出できていない。最大幅1.7m、深さ20㎝、検出部分の長さ4.6mを測る。埋土は黒褐色シルト層の単層で、断面形態は浅い三角形を呈する。調査区東壁の溝底においてピット２基を検出した。

出土遺物は瓦片等、コンテナ１箱分出土した。図示できたものを第75図に掲載した。 192は肥前系陶器皿で、内外面ともに施釉されている。193は甕である。外面にタテハケが施され、形態等から弥生後期のものと思われ、混入品である。194はサザエの殻である。サザエは調査区内のいたるところで出土しているが、一番残りの良いものである。殻に突起が無く瀬戸内海産のものと推定できる。



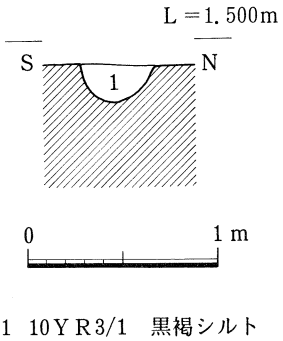
第74図 ＳＤ－303断面図



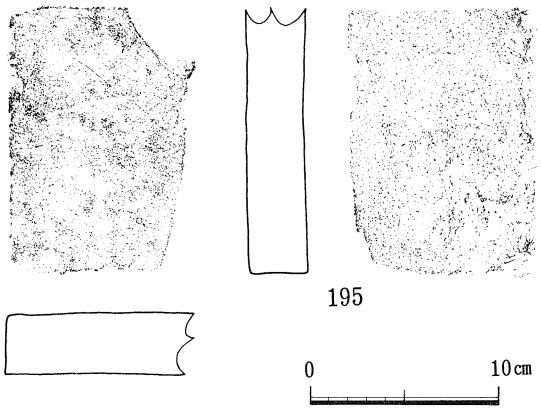
第75図 ＳＤ－303出土遺物実測図

ＳＤ－304

調査区の東端中央、ＳＤ－303の南側で同一方位に流れる短い溝である。ピットに切られており、幅40㎝、深さ20㎝、検出部分の長さ1.2mを測る。 埋土は黒褐色シルト層の単層で、断面形態は半円形を呈する。



第76図 ＳＤ－304断面図

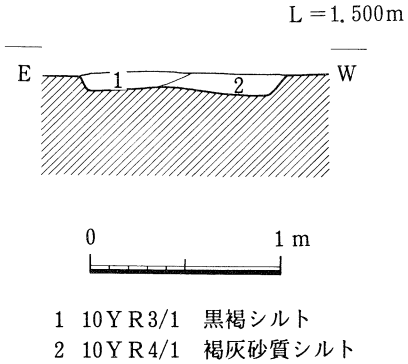


第77図 ＳＤ－304出土遺物実測図

第77図195が出土した。平瓦あるいは瓦質の磚に似た形状である。通常の瓦に比べ、1.5～2倍も厚いつくりで、平坦である。内外面ともナデが施されている。

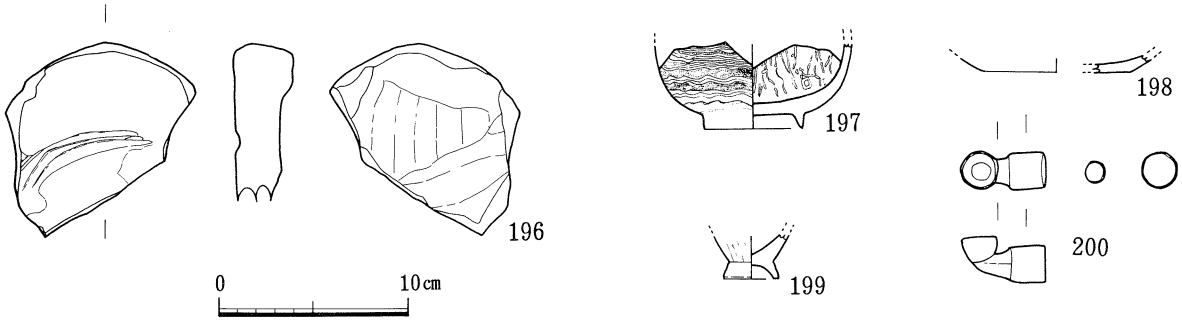
ＳＤ－305

調査区の南東端で検出した南北方向の溝である。ＳＢ－301を構成する礎石312・313の西側に接するように、つまりＳＢ－301の東辺内側に接するように流れており、方位も同一方位をとる。南端は調査区外へ延びるため不明であるが、北端は円形の土坑状を呈し、やや深い。幅40㎝、深さ５㎝、検出部分の長さ５ｍを測る。北端の土坑状を呈する部分については径１ｍ、深さ10㎝を測る。埋土は２層に分層でき、第１層が黒褐色シルト層、第２層が褐灰色砂質シルト層で、断面形状は浅い逆台形である。



第78図 ＳＤ－305断面図

出土遺物は瓦片を中心にコンテナ１箱分出土した。図示できたものを第79図に掲載した。196は瓦である。通常の瓦より1.5～2倍程度厚いつくりである。外面は巴文状の線刻が刻まれており、内面は粗雑なナデが認められる。道具瓦の一種と思われる。197は肥前系陶器碗である。内外面とも刷毛目が見られ、施釉されている。198は土師器小皿である。199は弥生後期の製塩土器で、混入品である。200はキセルの雁首で、太く短いつくりである。



第79図 ＳＤ－305出土遺物実測図

第８節　第２遺構面

炭・焼土・瓦片を多く含む黒色粘土層（第４層）上面において検出した遺構面である。攪乱が著しかったが、機械掘削中に遺構を検出した。遺構はピットが数基見られたのみで、土坑および礎石などの主要遺構は見られなかった。ピットも散在しており、また攪乱も著しく建物には復元できない。明治初期の陶磁器を含む黒色粘土層の上面にあり、また、上層の遺構面の時期から明治前半の時期が考えられる。

調査段階では明治時代以降の遺構面と考えられたため、機械掘削を行いながら遺物の集に努め、

詳細な調査は行っていない。

第９節　第１遺構面

灰黄色シルト質極細砂層（第３層）上面において検出した遺構面である。攪乱が著しいが、１辺40㎝の正方形を呈する礎石を６個検出した。昭和60・61年に香川県教育委員会が行った東ノ丸部分でも同様の建物が検出されており、同時期の建物と思われる。明治23年以降の遺構面と考えられる。

第4章　ま　と　め

第1節　周辺調査地および絵図との対応

高松城の発掘調査は昭和31年にさかのぼることができ、これまでに17次にわたる調査が行われている。昭和31・46・49年の調査については、解体修理工事に伴うもので、本格的な調査は昭和60・61年に行った県民ホールの建設に伴う調査以降である。近年、高松港頭地区再開発事業に伴う事前調査が多いため、大規模な調査は城郭の西半にかたよる傾向にあるが、比較的早い時期の調査では東ノ丸に集中している。昭和60・61年の香川県教育委員会による県民ホール建設に伴う調査（以降Ｓ60県教委調査）では、護岸用石垣（下層石垣）、礎石建物や東門、溝状石組み等が検出されている。東ノ丸内の米蔵丸に比定できる。平成６・７・８年の（財）香川県埋蔵文化財調査センターによる県立歴史博物館建設に伴う調査（以降Ｈ７県埋文センター調査）では、礎石建物跡、石列状遺構、石組み溝、井戸、水溜状遺構等が検出されている。また中堀に面する石垣も検出されている。調査地は東ノ丸の米蔵丸南部および作事丸北部に比定できる。平成７年の香川県教育委員会による県民ホール小ホール建設に伴う調査（以降Ｈ７県教委調査）では、突堤および艮櫓台石垣根石等が検出されている。以上のように、城郭内でも東ノ丸は数次にわたる調査が行われ、遺構の変遷や各調査区間の遺構の関連性がうかがえる地区である。

一方、絵図からも遺構を推測することができる。東ノ丸築造（1671年）以後の絵図は多数存在するが、いずれの絵図も城下町の様子はよくわかるが、城の内部を詳細に描いたものはほとんどない。高松城内部が詳細にわかる資料としては、製作年代が不明な『高松城全図』だけである。『高松城全図』は原本の製作年代は不明であるが、昭和６年４月に神崎氏によって製作された写しである。絵図の大きさは129×234㎝で、鎌田共済会郷土博物館が所蔵している資料である。

『高松城全図』の東ノ丸部分を見ると、北半の米蔵丸には東西に細長い建物が５棟立ち並んでおり、「倉庫」の記載が見られる。これらの倉庫についてはＳ60県教委調査で確認されている。また、東ノ丸東隅には艮櫓およびそれより北東へ延びる突堤が描かれているが、これらについてもＨ７県教委調査で確認されていることから、絵図はある程度信用できる資料と考えられる。

さて、今回の調査地の作事丸であるが、東ノ丸の南半に位置し、米蔵丸と区画するように線が引かれている。また、作事丸の南東隅には巽櫓が描かれており、その櫓から北と西へ延びる線は築地塀と思われる。作事丸の西辺にはこのような直線状の描写は無く、やや内に入った部分において曲線状の線が描かれているが何を意味するかは不明である。以上から推測すると、作事丸は城郭内部にあたる西側のみ開けた状態で、残りの３方向については築地塀で囲われていたと考えられる。内部の建物の状況であるが、まず作事丸の北東端から南へ延び中央付近で西へ折れ曲がる建物（仮に建物１）、さらに建物１の西延長部分に存在する東西に細長い建物（仮に建物２）の２棟が見られる。この２棟については絵図に「作事舎」と記載されている。また、北部中央には凹凸の多い東西方向に細長い建物（仮に建物３）が見られ、その建物の西端部分に南北に細長い建物が北と南に１棟ずつ（仮に北側を建物４、南側を建物５）描かれている。さらに作事舎と記載された建物１、建

物２の南側にもＬ字状の建物（仮に大きいものを建物６、小さいものを建物７）が見られる。建物６・建物７については、南側に堀を渡る橋が描がかれており、門を伴う施設と考えられる。また、建物かどうかは不明であるが、建物３の周囲には小規模な構造物が描かれている。以上のような絵図の描写であるが、この絵図とＨ７県埋文センター調査および今回の調査で検出した各遺構を比較検討したい。

まず、作事丸の北辺であるが、Ｈ７県埋文センター調査では、調査区の中央で東西に細長い石列状遺構が検出されている。これは絵図の描写と一致している。築地塀等の施設の存在が考えられ、米蔵丸とは完全に区画されたことがうかがえる。同様の石列状遺構は米蔵丸の東辺にも見られ、これも絵図の描写と一致する。しかしながら、作事丸の東辺には絵図上では築地塀が描かれているものの、調査では確認されていない。また、今回の試掘調査で確認された作事丸東辺の石列状遺構については絵図に描かれていない。

次に建物の配置であるが、Ｈ７県埋文センター調査では数多くの礎石が検出されているが、現段階ではその復元作業まではなされていない。礎石は作事丸の北部と調査区の南端、つまり作事丸の中央部分の２箇所に密集しており、その間には全く認められず、空白となっている。また、今回の調査ではＳＢ－301、ＳＡ－301とした礎石建物および礎石列を検出した。 ＳＢ－301は南北方向に細長い建物で、その北側に接した状態でＳＡ－301が東西方向に存在している。 この状況を絵図と照合すると、まず建物１であるが、Ｌ字状に曲がった建物は存在しないが、その南半部分の東西に細長い建物は見られる。建物３が存在したと思われる場所については、調査で最も礎石が密集した部分であり、その規模等は絵図に近似する。 また、今回の調査で検出したＳＢ－301はその形状および検出場所から建５に近似する。そうすると、ＳＢ－301の北側で検出したＳＡ－301は建物３の南西端である可能性も考えられる。建物２・４・６・７については調査区外になると考えられる。

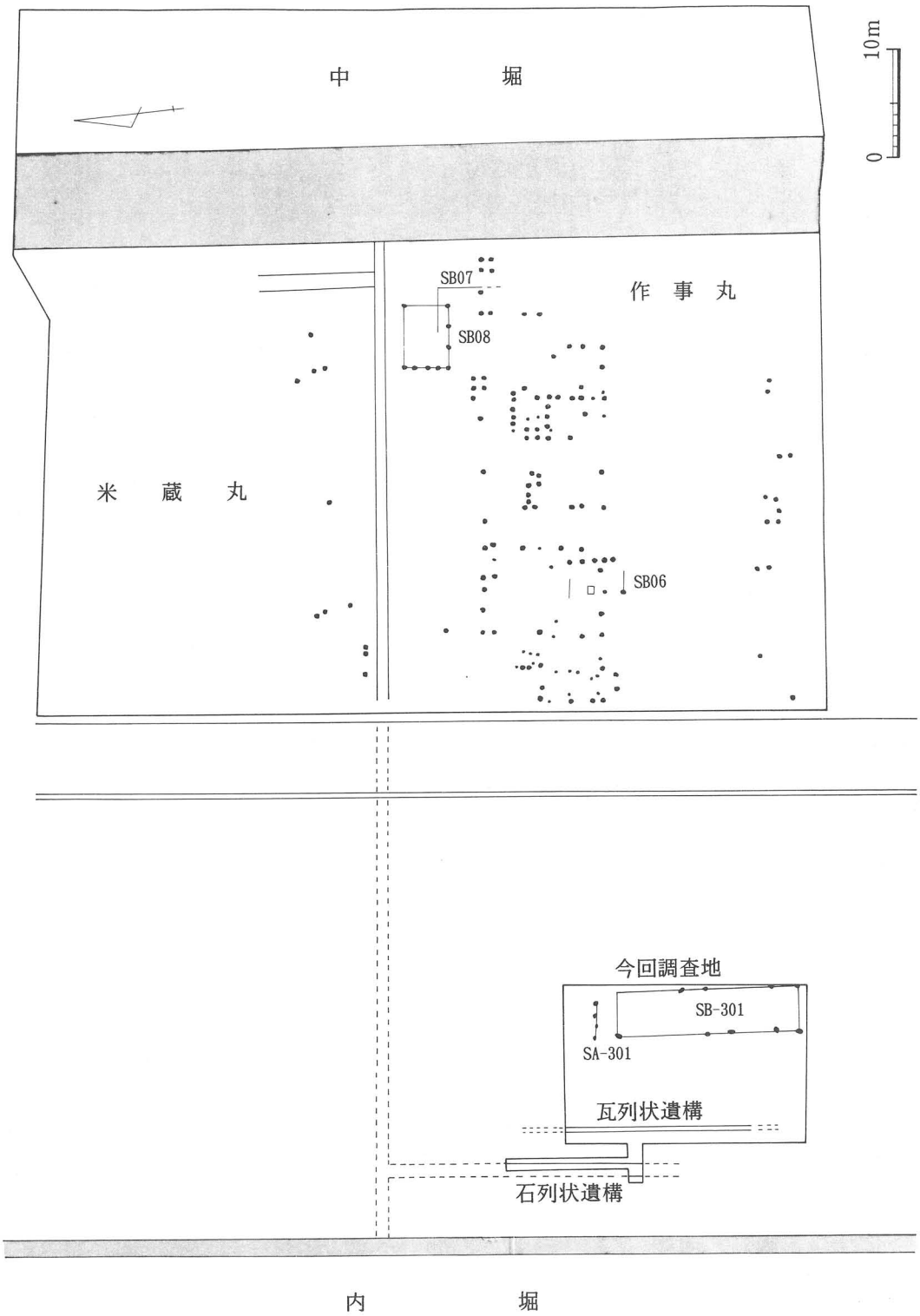
絵図については正確に測量を行って描かれたものかどうかは疑わしく、建物の規模および配置状況に若干の誤差があっても良いと考えられるが、形状についてはほぼ間違いなく描写されていると考えられる。調査地の平面図と絵図をほぼ同一の縮尺にしてみると、絵図に比べ調査で検出された建物群はやや東にかたよることがわかるが、建物１の北半部分が検出されない以外は近似した建物の形状および配列状況がうかがえる。現状では調査で確認された遺構と絵図は若干異なる点があるが、基本的な建物配列はそう変わりないことから次の２点の可能性が考えられる。まず第１の可能性としては、絵図と検出遺構が時期的にあまり隔たりがないことが考えられる。建物や諸施設の一部が改築されているだけで、ほぼ基本的な構造が変化していないと考えられる。もう１点の可能性としては、時期的には隔たりがあるが、数次にわたる改築がなされたであろうが建物配列については変化しないでいたことも考えられる。

いずれにせよ、今回の調査では詳細な時期がわかる遺物はほとんど出土しておらず、遺構の年代等に不明な点が多い。今後の周辺の調査およびＨ７県埋文センター調査の報告に期待したい。

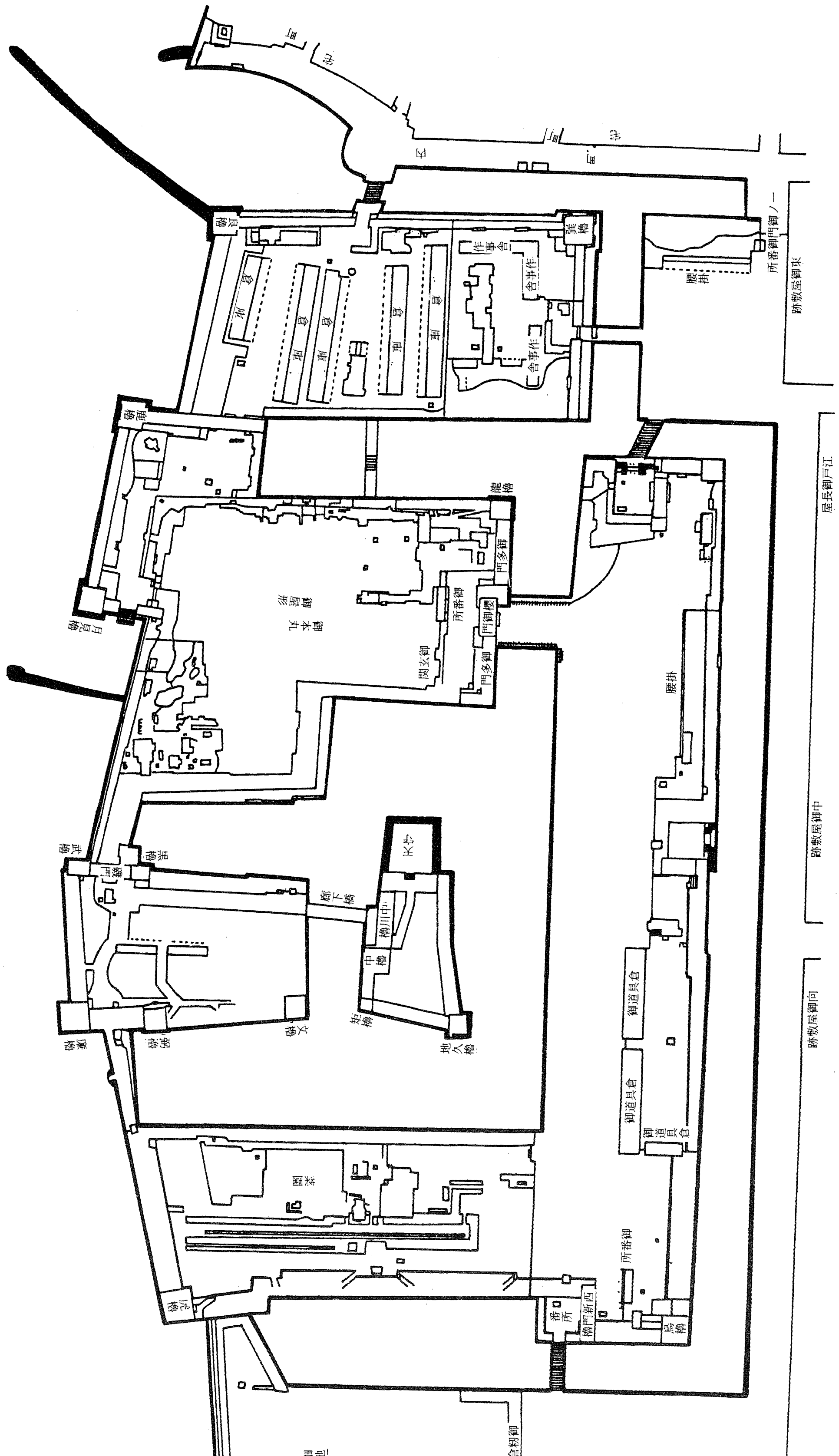
高松城跡調査歴一覧表

	調査期間	調査原因	調査面積	調査地	概　　要	調査機関	文献
1	1956. 3.31 ～ 1956.10. 8	重要文化財 高松城 修理工事	－	水手御門 海手御門	水手御門の礎石および海手御門の礎石・蹴放石・葛石・排水暗渠を検出。	高松市	1
2	1960. 2.16 ～ 1990. 3.31	史跡高松城 保存修理 工事	－	鞘橋	鞘橋南入口と石垣間に木柵を検出。	高松市	2
3	1964. 2. 9 ～ 1964. 3.31	史跡高松城 保存修理 工事	－	内堀石垣 中堀石垣	石垣裏込に墓石および鳥居を転用。	高松市	3
4	1985. 4.15 ～ 1986. 5.31	県民ホール	6,047	米蔵丸	護岸用石垣（下層石垣）、礎石建物跡や東門堀跡の先端部分および溝状石組などを検出。	香川県 教育委員会	4 5
5	1990. 5.14 ～ 1990. 6. 5	玉藻公園 整備事業	540	水手御門	遺構の範囲確認調査であり、水手御門から海に出る階段遺構を検出。	高松市 教育委員会	6 7
6	1994. 4.18 ～ 1994. 6.30	県立 歴史博物館	1,000	東ノ丸 中堀	江戸時代後期の石列状遺構・礎石群や石組み溝状遺構・石室状遺構および推定中堀に面する石垣などを検出。	㈶香川県埋蔵文化財調査センター	8 9
7	1995. 2. 7 ～ 1995. 3.31	県民ホール 小ホール	225	艮櫓台	突堤および艮櫓台石垣根石などを検出。	香川県 教育委員会	8
8	1995. 4. 1 ～ 1996. 3.31	県立 歴史博物館	5,000	東ノ丸	礎石建物跡・石列状遺構・石組み溝・井戸・水溜状遺構などを検出。	㈶香川県埋蔵文化財調査センター	10 11
9	1995. 12.1 ～ 1996. 3.31	高松港頭 土地区画 整理事業	900	大久保家	大久保家の礎石建物跡・石組み溝、生駒、松平初期にかけての礎石建物跡・柵列などを検出。	㈶香川県埋蔵文化財調査センター	10 11 12
10	1996. 4. 1 ～ 1997. 3.31	高松港頭 土地区画 整理事業	3,639	武家屋敷	屋敷地割の変遷と屋敷地内遺構の構造を、層位毎に明瞭なかたちで確認した。また検出遺構と絵図に一定の対応関係が指摘できる。	㈶香川県埋蔵文化財調査センター	13 14 15
11	1997. 6. 2 ～ 1997. 7.29	高松港頭 土地区画 整理事業	300	武家屋敷	石組み井戸・土坑・溝・住穴および中世前期の貼石を伴う落ち込みを検出。	㈶香川県埋蔵文化財調査センター	16 17
12	1997. 7.10	香川県 高等学校 ＰＴＡ会館	47	武家屋敷	幕末期の溝、土坑、住穴などを検出。土坑内には焼けた瓦が多量に廃棄されていた。	高松市 教育委員会	18
13	1997.11.17 ～ 1997.12.26	㈶松平 公益会 事務所改築	300	作事丸	築地堀基礎跡や礎石建物などを検出。	高松市 教育委員会	本書
14	1997.12. 3	玉藻公園 整備事業	4	地久櫓	地久櫓の石垣基底部の調査を行ったが、不明なまま調査を終了。幕末～明治の遺物しか出土していない。	高松市 教育委員会	18
15	1998. 3. ～ 1998. 6.	高松 北警察署	1,000	武家屋敷	詳細不明	㈶香川県埋蔵文化財調査センター	未報告
16	1998. 4.16	三越増床	65	武家屋敷	近現代の攪乱のため残存状況は悪く、遺構についても明治の物であったため保護措置の必要はないと判断した。	高松市 教育委員会	18
17	1998. 7. 8 ～ 1998. 8.11	玉藻公園 整備事業	14	三ノ丸	現状の石垣の内側80~90㎝において埋没石垣を検出。	高松市 教育委員会	18

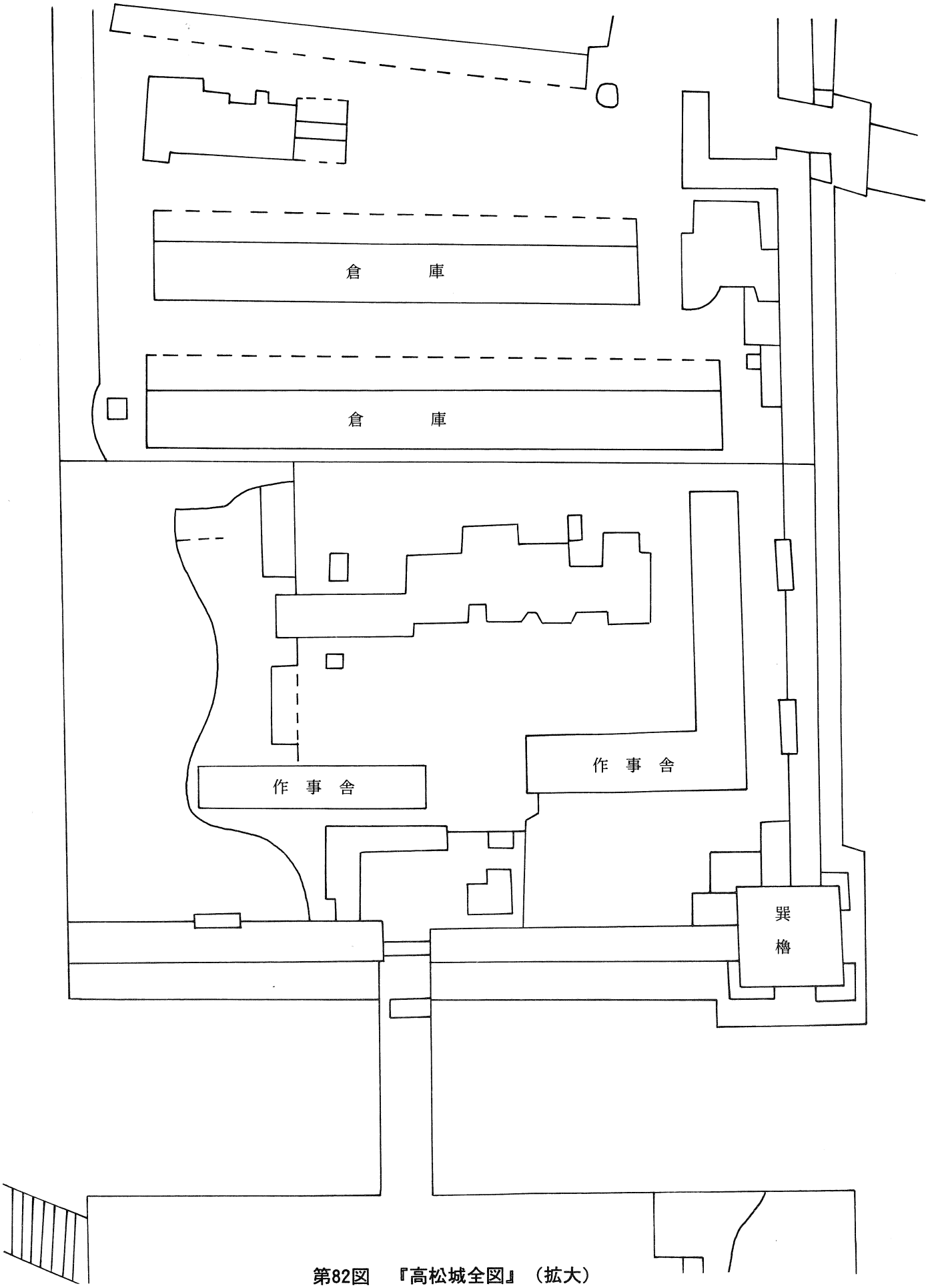
＜文献一覧＞
1. 高松市『重要文化財高松城二ノ丸月見櫓續櫓渡櫓水手門修理工事報告書』1957.3
2. 高松市『史跡高松城保存修理報告書』1960.3
3. 高松市『史跡高松城保存修理報告書　石垣修理工事報告』1964.3
4. 香川県教育委員会『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』1987.3
5. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　昭和59年度～昭和62年度』1988.3
6. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成２年度』1991.3
7. 高松市教育委員会『高松市文化財調査報告書』1991.3
8. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成６年度』1995.3
9. ㈶香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成６年度』1995.5
10. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成７年度』1996.3
11. ㈶香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成７年度』1996.5
12. 香川県教育委員会『高松港頭土地区画整備事業平成７年度埋蔵文化財発掘調査概報』1996.3
13. 香川県教育委員会『香川県埋蔵文化財調査年報　平成８年度』1997.3
14. 香川県教育委員会『高松港頭土地区画整備事業平成８年度埋蔵文化財発掘調査概報』1997.3
15. ㈶香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成８年度』1997.5
16. 香川県教育委員会『高松港頭土地区画整備事業平成９年度埋蔵文化財発掘調査概報』1998.3
17. ㈶香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報　平成９年度』1998.6
18. 高松市教育委員会『史跡高松城跡（地久櫓跡・三ノ丸跡）』1999.3



第80図　調査地周辺遺構配置図



第81図　『高松城全図』写図



第82図　『高松城全図』（拡大）

第２節　高松城東ノ丸出土丸瓦の変遷について

今回の調査で出土した遺物のほとんどが瓦であり、詳細な時期決定はできなかったが、逆に丸瓦等の変遷を見ることができたので、若干の検討を加えたい。

今回の調査では生駒期までさかのぼれる瓦は出土していないが、Ｓ60県教委調査の東ノ丸下層石垣資料があげられる。17世紀前半から東ノ丸築造（1671年）までの資料と考えられる。報告書には丸瓦が掲載されていないため、軒丸瓦をもって論じたい。石垣の裏込から出土した軒丸瓦は、内面コビキＡ・Ｂが混在し、布目が認められる。 長さ２６～34㎝とばらつきがあるが、大多数は29㎝である。幅は15～16㎝、高さ4.5～７㎝を測り、つくりは比較的分厚い。

続く資料として今回の調査地の瓦列状遺構があげられる。瓦列状遺構は東ノ丸築造後の資料と考えられる。丸瓦の内面はコビキＢに統一されるが、布目に加えゴザ目が登場する。布目だけのもの、布目＋ゴザ目、ゴザ目だけのものの３種類が混在する。長さは28㎝前後と均一化され、幅も12～14㎝、高さ６～6.5㎝である。

さらに同一遺構面であるが、やや後出すると思われるＳＫ－509資料がこれに続く。 丸瓦の内面はコビキＢとゴザ目に統一される。長さは完形の丸瓦が出土していないため不明であるが、平瓦の長さから推定すると24.5～28㎝、幅12～13㎝、高さ５～６㎝である。

遺構面が変わってＳＫ－403になると小型が一層進行する。 長さ21～22㎝と極端に短くなっている。幅は12～13㎝と変わらないが、高さは4.5～5.5㎝と低くなっており断面形状は扁平になっている。内面はＳＫ－509と変わりなく、コビキＢとゴザ目である。 供伴資料に桟瓦が見られ、この時期以降、高松城において桟瓦が使用されたと考えられる。

以上のように、丸瓦については、コビキＡからＢへの変化が生駒期におこり、布目からゴザ目への変化が東ノ丸築造後間もない時期におこったことがうかがえる。こういった製作技法の変化に加え、全期間を通じ、瓦の小型化がなされていることもわかる。特にＳＫ－509からＳＫ－403の間に急速な小型化がなされていたと考えられる。丸瓦について法量の変化が認められるということは、軒丸瓦、平瓦、軒平瓦についても同様の変化があったことがうかがえる。

以上のような変化が認められるが、今回の調査地は狭く、また供伴資料に乏しいため、今後の調査結果を待ってさらなる検討を加えたい。

〈参考・引用文献〉

東　信男　「高松城跡」『織豊期城郭の瓦』織豊期城郭研究会　1994

森下友子　「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター研究紀要Ⅳ』財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　1996

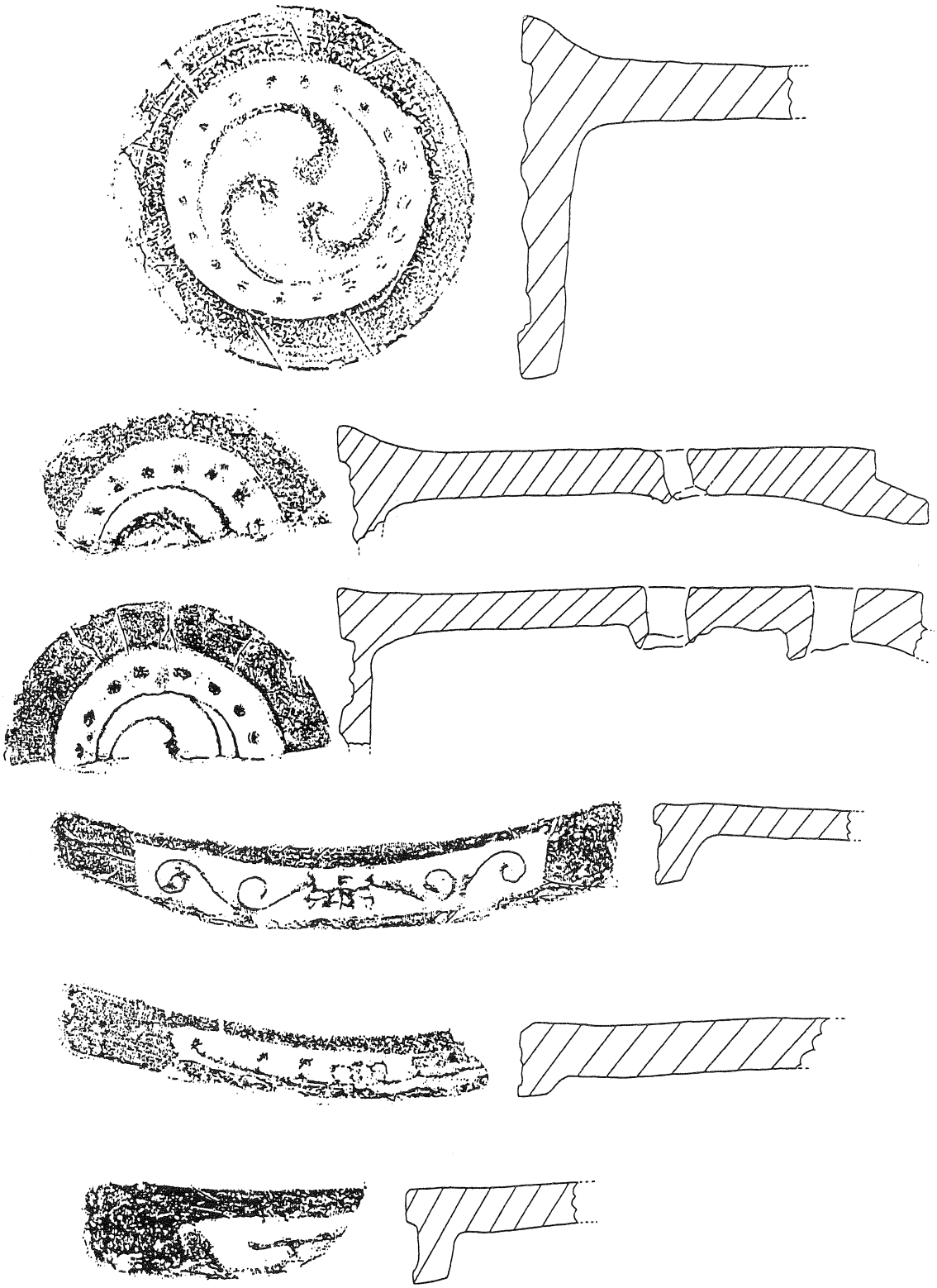
香川県教育委員会　『高松城東ノ丸跡発掘調査報告書』1987

香川県教育委員会　『香川県埋蔵文化財調査年報平成６年度』1995

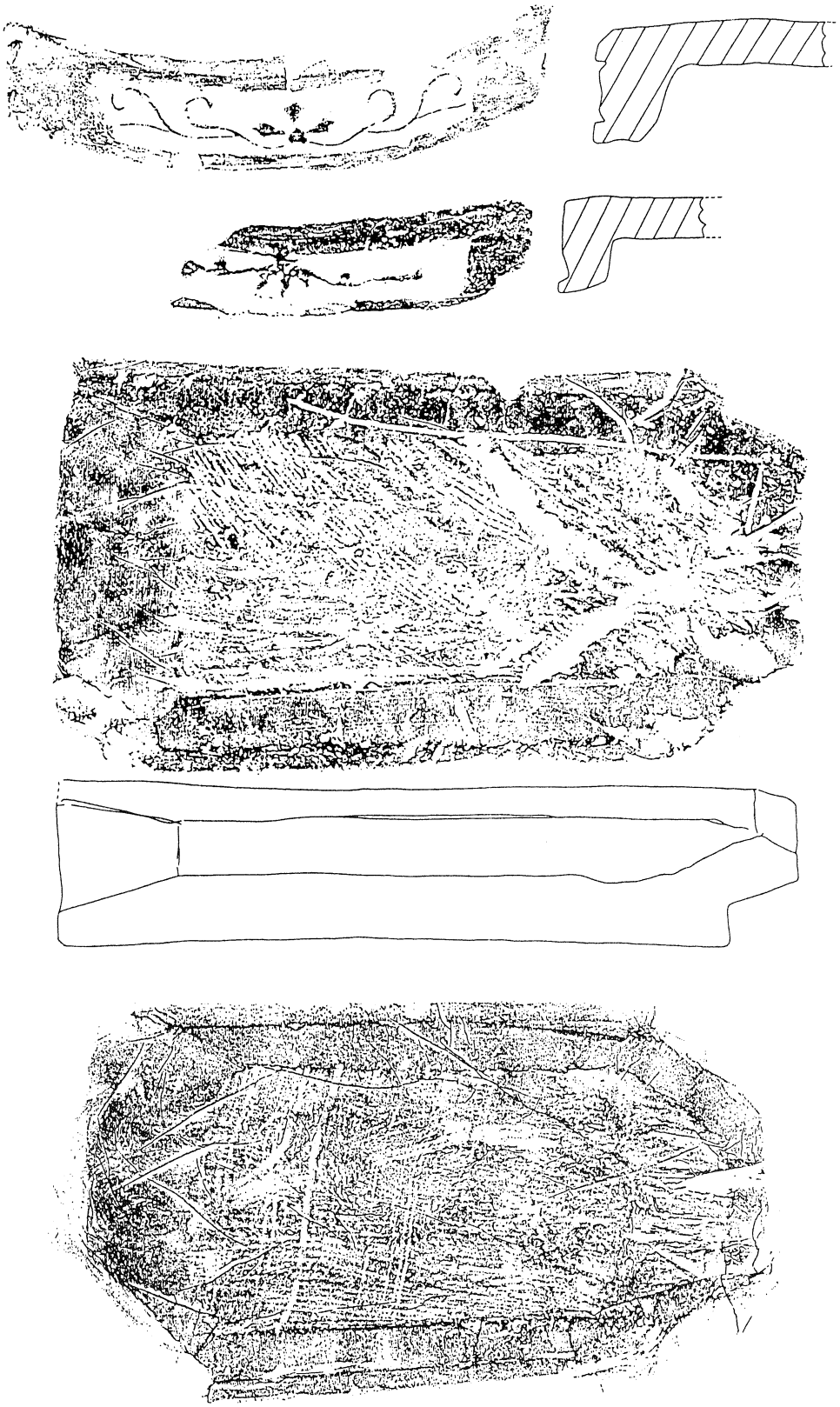
香川県教育委員会　『香川県埋蔵文化財調査年報平成７年度』1996

㈶香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報平成６年度』1995

㈶香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター年報平成７年度』1996

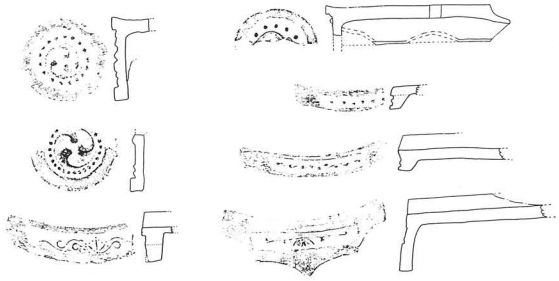
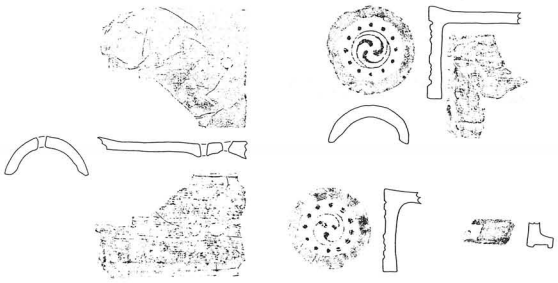
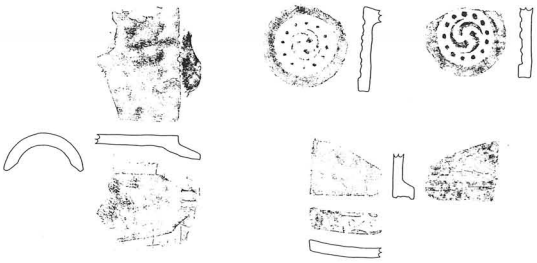
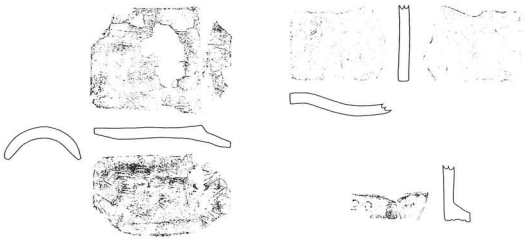


第83図　高松城東ノ丸下層石垣出土瓦①



第84図　高松城東ノ丸下層石垣出土瓦②

高松城東ノ丸出土丸瓦編年表

年代	遺構名	法量（cm）			内面	出土瓦
		長	幅	高		
1588 ～ 1671	S60県教委 下層石垣	26 ～ 34 (29)	15 ～ 16	4.5 ～ 7	コビキA コビキB 布目	
1671 ～ 18C 初頭	瓦列状遺構	28	12 ～ 14	6 ～ 6.5	コビキB 布目 布目＋コザ目 コザ目	
18C 前半	SK－509	24.5 ～ 28	12 ～ 13	5 ～ 6	コビキB コザ目	
18C 後半	SK－403	21 ～ 22	12 ～ 13	4.5 ～ 5.5	コビキB コザ目	
19C						良好な資料なし

遺物観察表No.1

番号	器　幅	法　量	内　面(凹面)	外　面(凹面)	色　調	胎　土	焼成
1	平　瓦		ナデ	板ナデ	N5/0灰		
2	平　瓦		ナデ	ナデ	N3/0暗灰		
3	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
4	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
5	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
6	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
7	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
8	平　瓦		ナデ	板ナデ	N3/0暗灰		
9	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
10	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
11	平　瓦		ナデ	ナデ	N6/0灰		
12	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
13	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
14	平　瓦		ナデ	ナデ	N6/0灰		
15	平　瓦		ナデ	ナデ	N3/0暗灰		
16	平　瓦		ナデ	ナデ	N3/0暗灰		
17	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
18	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
19	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
20	平　瓦		コビキB、ナデ	ナデ	N4/0灰		
21	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
22	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
23	平　瓦		ナデ	板ナデ	N4/0灰		
24	平　瓦		ナデ	板ナデ	N3/0暗灰		
25	平　瓦		ナデ	板ナデ	N4/0灰		
26	平　瓦		ナデ	ナデ	N6/0灰		
27	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
28	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
29	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
30	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
31	平　瓦		ナデ	ナデ	N3/0暗灰		
32	平　瓦		ナデ	ナデ	2.5Y6/2灰黄		
33	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
34	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
35	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
36	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
37	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
38	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
39	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
40	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		

遺物観察表No. 2

番号	器　幅	法　量	内　面(凹面)	外　面(凹面)	色　調	胎　土	焼成
41	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
42	平　瓦		ナデ	板ナデ	N4/0灰		
43	平　瓦		ナデ	板ナデ	N4/0灰		
44	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
45	平　瓦		板ナデ	板ナデ	N4/0灰		
46	平　瓦		ナデ	板ナデ	N4/0灰		
47	平　瓦		ナデ	ナデ	N3/0灰		
48	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
49	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
50	平　瓦		ナデ	ナデ	N3/0灰		
51	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
52	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
53	平　瓦		板ナデ	板ナデ	N4/0灰		
54	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
55	平　瓦		ナデ	ナデ	N3/0灰		
56	平　瓦		板ナデ	板ナデ	N6/0灰		
57	平　瓦		板ナデ	ナデ	N6/0灰		
58	平　瓦		コビキB、布目、ゴザ目	ナデ	N6/0灰		
59	丸　瓦		コビキB、布目	ナデ	N6/0灰		
60	丸　瓦		ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
61	丸　瓦		ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
62	丸　瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
63	丸　瓦		ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
64	丸　瓦		コビキB、ゴザ目、布目	ナデ	N4/0灰		
65	丸　瓦		ゴザ目、布目	ナデ	N4/0灰		
66	丸　瓦		ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
67	丸　瓦		ゴザ目	ナデ	N5/0灰		
68	軒丸瓦		コビキB、ゴザ目、布目	ナデ	N4/0灰		
69	軒丸瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
70	丸　瓦		コビキB、ゴザ目、布目	ナデ	N4/0灰		
71	丸　瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
72	丸　瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N5/0灰		
73	丸　瓦		コビキB、ゴザ目、布目	ナデ	N4/0灰		
74	丸　瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
75	丸　瓦		ゴザ目	ナデ	N3/0暗灰		
76	丸　瓦		ゴザ目、布目	ナデ	N4/0灰		
77	丸　瓦		ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
78	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
79	軒丸瓦		ナデ		N5/0灰		
80	軒丸瓦		コビキB	ゴザ目	N4/0灰		

遺物観察表No. 3

番号	器　幅	法　量	内　面(凹面)	外　面(凹面)	色　調	胎　土	焼成
81	軒　丸　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
82	軒　丸　瓦		ナデ	ナデ	2.5Y6/2灰黄		
83	軒　丸　瓦				N3/0灰		
84	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
85	平　瓦		ナデ	ナデ	7.5Y4/0灰		
86	平　瓦		ナデ	ナデ	N6/0灰		
87	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
88	軒　丸　瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
89	軒　丸　瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N5/0灰		
90	丸　瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
91	軒　丸　瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N6/0灰		
92	平　瓦		ナデ	板ナデ	N6/0灰		
93	平　瓦		ナデ	板ナデ	N4/0灰		
94	軒　丸　瓦				10YR6/2灰黄色褐		
95	軒　丸　瓦				10YR4/1褐灰		
96	軒　丸　瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
97	軒　丸　瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
98	軒　丸　瓦		コビキB、布目	ナデ	N4/0灰		
99	軒　丸　瓦		コビキB	ナデ	10YR4/1褐灰		
100	軒　丸　瓦		コビキB	ナデ	N5/0灰		
101	軒　丸　瓦		コビキB	ナデ	2.5Y7/2灰黄		
102	軒　丸　瓦		コビキB、ゴザ目、布目	ナデ	N4/0灰		
103	丸　瓦		ゴザ目、布目	ナデ	10YR4/1褐灰		
104	丸　瓦		コビキB、ゴザ目、布目	ナデ	7.5Y4/1灰		
105	軒　丸　瓦			ナデ	N4/0灰		
106	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
107	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
108	平　瓦		ゴザ目	ナデ	10YR4/1褐灰		
109	軒　丸　瓦				10Y7/1灰白		
110	軒　丸　瓦				2.5Y7/2灰黄		
111	軒　丸　瓦		コビキB、ゴザ目、布目	ナデ	N4/0灰		
112	軒　丸　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
113	丸　瓦		ゴザ目	ナデ	N5/0灰		
114	平　瓦		ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
115	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
116	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
117	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
118	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
119	軒　丸　瓦				N4/0灰		
120	軒　丸　瓦				N4/0灰		

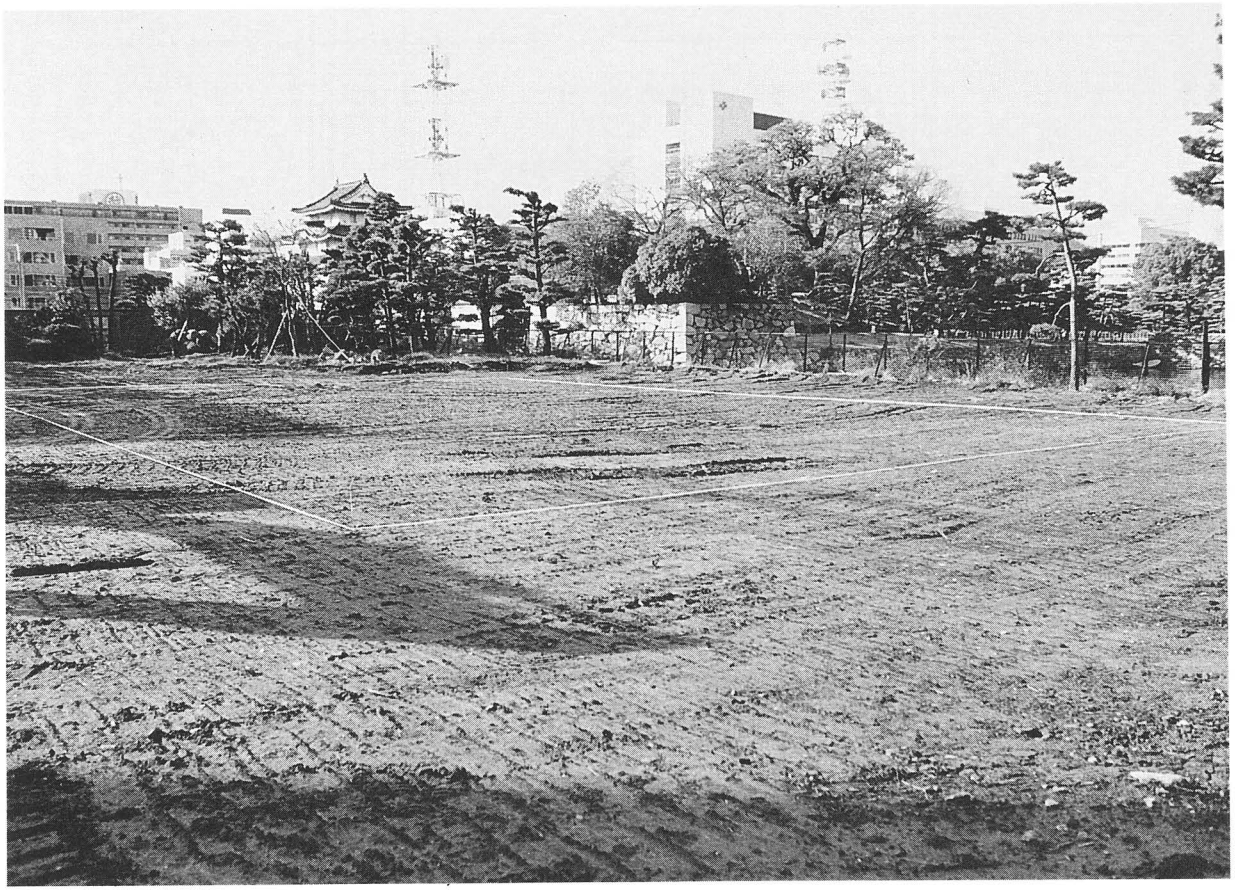
遺物観察表No. 4

番号	器　幅	法　量	内　面(凹面)	外　面(凹面)	色　調	胎　土	焼成
121	軒丸瓦				N4/0灰		
122	平瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
123	平瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
124	平瓦		ナデ	板ナデ	N5/0灰		
125	平瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
126	軒丸瓦		コビキB	ナデ	N4/0灰		
127	丸瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
128	丸瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
129	平瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
130	平瓦		ナデ	ナデ	N3/0暗灰		
131	軒丸瓦				10YR7/3にぶい黄橙		
132	軒丸瓦				10YR7/2にぶい黄橙		
133	平瓦		ナデ	ナデ	N3/0暗灰		
134	平瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
135	平瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
136	軒丸瓦		コビキB	ナデ	7.5Y5/1灰		
137	軒丸瓦		コビキB	ナデ	N5/0灰		
138	軒丸瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
139	軒丸瓦		コビキB、ナデ	ナデ	N4/0灰		
140	軒丸瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
141	肥前系皿	復元底径4.5m 現存高1.3cm	施釉、胎土目	無釉	2.5Y7/1灰白		
142	平瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
143	平瓦		ナデ	ナデ	10Y4/1灰		
144	軒丸瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N3/0暗灰		
145	軒丸瓦		コビキB、布目	ナデ	N3/0暗灰		
146	軒丸瓦		コビキB	ナデ	N4/0灰		
147	軒丸瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
148	軒丸瓦		コビキB、布目	ナデ	N3/0暗灰		
149	軒丸瓦				N3/0暗灰		
150	軒丸瓦				N4/0灰		
151	軒丸瓦				N4/0灰		
152	軒丸瓦		コビキB	ナデ	N4/0灰		
153	軒丸瓦		ナデ	ナデ	N6/0灰		
154	軒丸瓦		布目、ナデ		N4/0灰		
155	軒丸瓦				2.5Y3/2灰黄		
156	軒丸瓦			ナデ	N4/0灰		
157	丸瓦		コビキB、ゴザ目、布目	ナデ	N4/0灰		
158	丸瓦		コビキB	ナデ	N4/0灰		
159	平瓦		ナデ	板ナデ	N4/0灰		
160	平瓦		ナデ	板ナデ	N4/0灰		

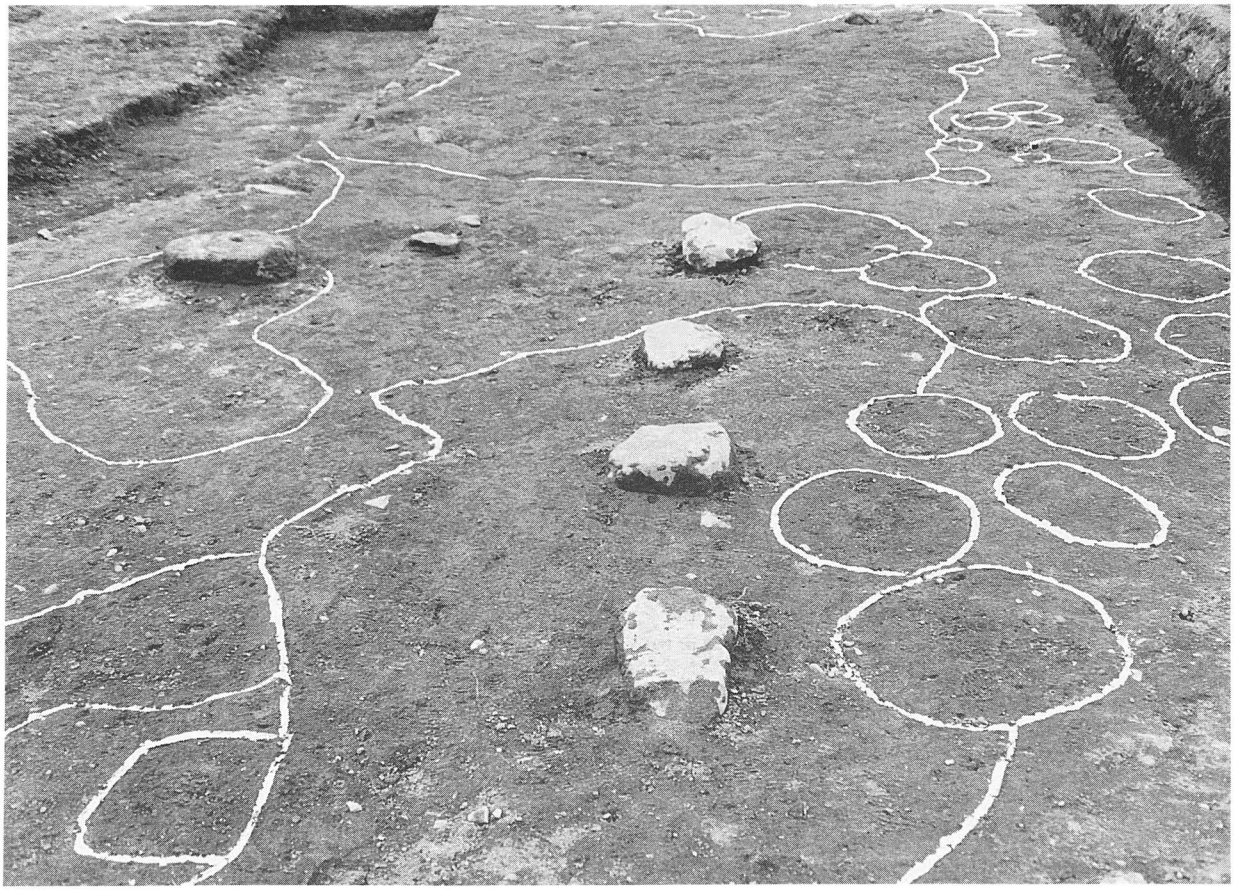
遺物観察表No. 5

番号	器　幅	法　量	内　面(凹面)	外　面(凹面)	色　調	胎　土	焼成
161	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
162	平　瓦		ナデ		N4/0灰		
163	軒平瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
164	軒丸瓦				N4/0灰		
165	軒丸瓦				N4/0灰		
166	軒丸瓦		ナデ	ナデ	5Y4/1灰		
167	軒丸瓦				N4/0灰		
168	軒丸瓦		ゴザ目、ナデ	ナデ	2.5Y6/1黄灰		
169	軒丸瓦		コビキB、ゴザ目、ナデ	ナデ	10YR6/2灰黄褐		
170	丸　瓦		ゴザ目	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙		
171	丸　瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
172	丸　瓦		コビキB、ゴザ目、ナデ	ナデ	N4/0暗灰		
173	丸　瓦		ゴザ目	ナデ	N4/0灰		
174	備前焼擂鉢	復元底径8.6m 現存高3.9cm	擂目	横ナデ	2.5YR4/2灰赤	やや粗	良
175	平　瓦		ナデ	ナデ	N4/0灰		
176	軒平瓦		ナデ	ナデ	N3/0灰		
177	丸　瓦		ゴザ目、ナデ	ナデ	N4/0灰		
178	丸　瓦		ゴザ目、ナデ	ナデ	N3/0灰		
179	丸　瓦		ゴザ目、ナデ	ナデ、漆喰付着	N3/0灰		
180	丸　瓦		コビキB、ゴザ目	ナデ	N3/0灰		
181	丸　瓦		コビキB、ゴザ目、ナデ	ナデ	2.5Y6/2黄灰		
182	桟　瓦		ナデ	ナデ	N3/0灰		
183	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
184	平　瓦		ナデ	ナデ	N5/0灰		
185	備前焼鉢		ロクロナデ	ロクロナデ	5YR5/3にぶい赤褐	やや密	良好
186	肥前系碗		施釉	高台無釉	10YR3/3暗褐	密	良好
187	肥前系碗		施釉、胎土目	高台無釉	2.5Y5/2暗灰黄	密	良
188	備前焼擂鉢		擂目	横ナデ	5YR6/1褐灰		良好
189	肥前系碗		圏線1条	圏線2条、草花文	灰白	密	良好
190	土師器皿		ナデ	ナデ	5YR7/4にぶい橙	やや密	良
191	瀬戸美濃系皿		施釉	施釉、トチン痕	5Y7/3浅黄	密	良好
192	肥前系皿		施釉	施釉	透明	やや密	良好
193	弥生土器壺			タテハケ	10YR7/2にぶい黄橙	密	良好
194	サザエ						
195	平瓦(磚)		ナデ	ナデ	N4/0灰		
196	道具瓦		ナデ	線刻(巴文?)	N4/0灰		
197	肥前系碗		刷毛目	刷毛目	褐灰	密	良好
198	肥前系皿		ナデ	ナデ	10Y8/3浅黄橙	やや粗	良
199	製塩土器			タテヘラケズリ	5YR5/3にぶい赤褐	やや粗	良
200	キセル						

写 真 図 版



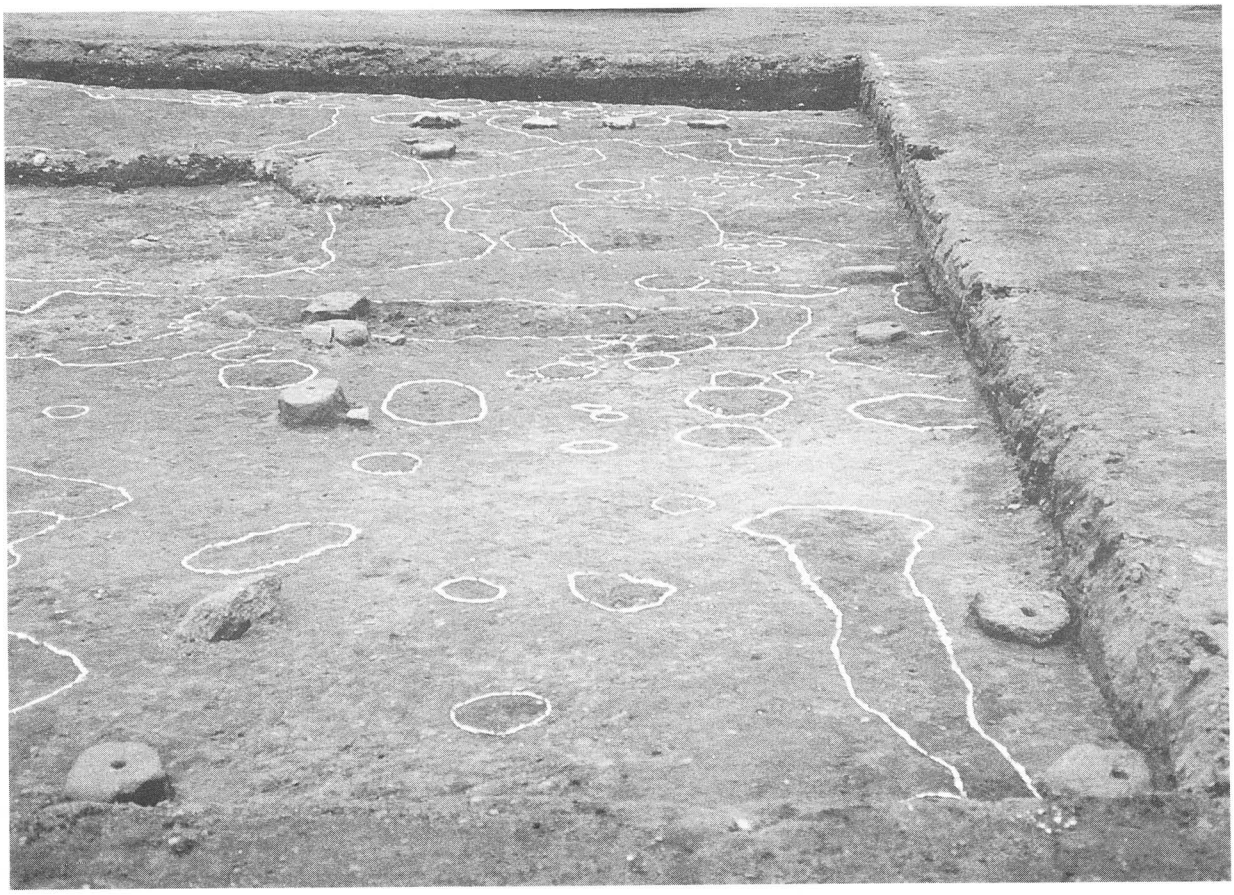
1　調査前全景（北東から）



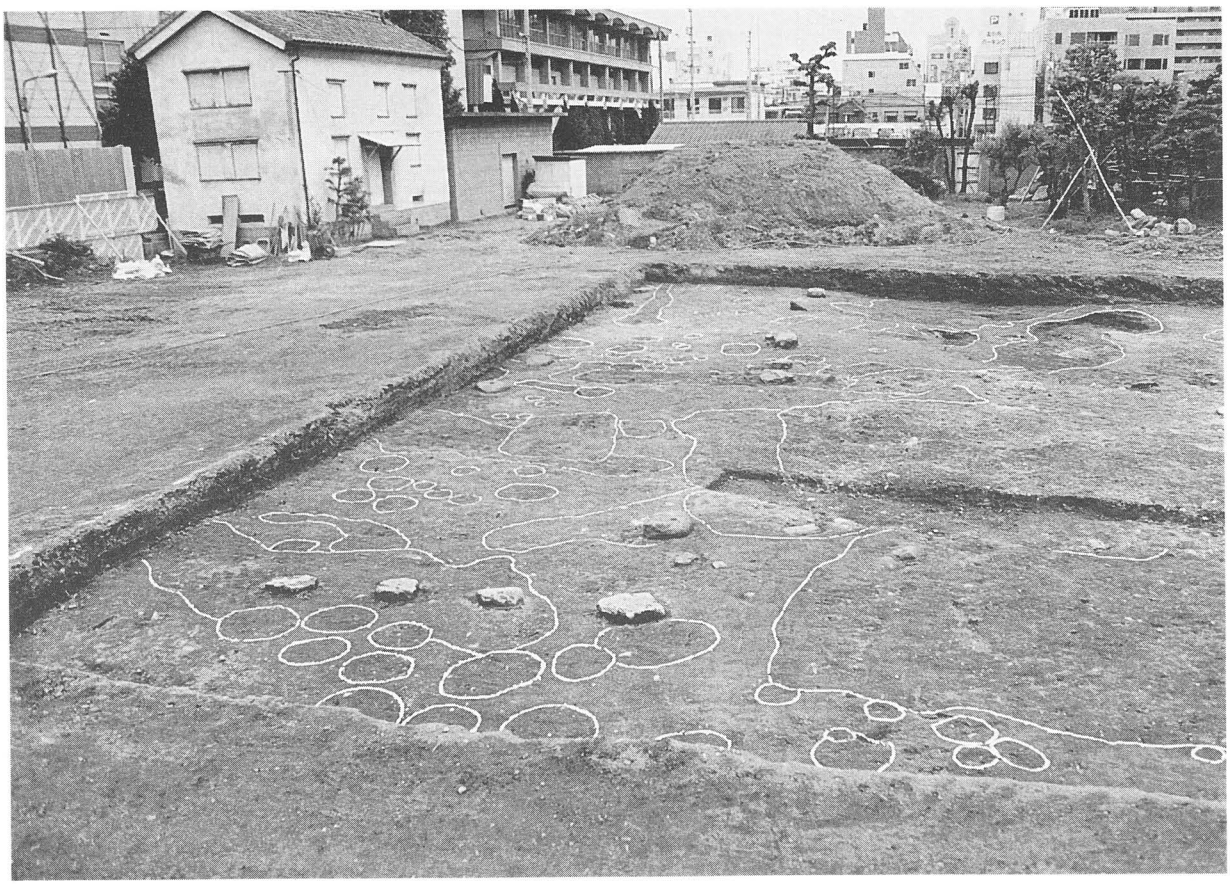
2　ＳＡ－301検出状況（東から）

3　第３遺構面完掘状況（北から）

4　第６遺構面完掘状況（南から）



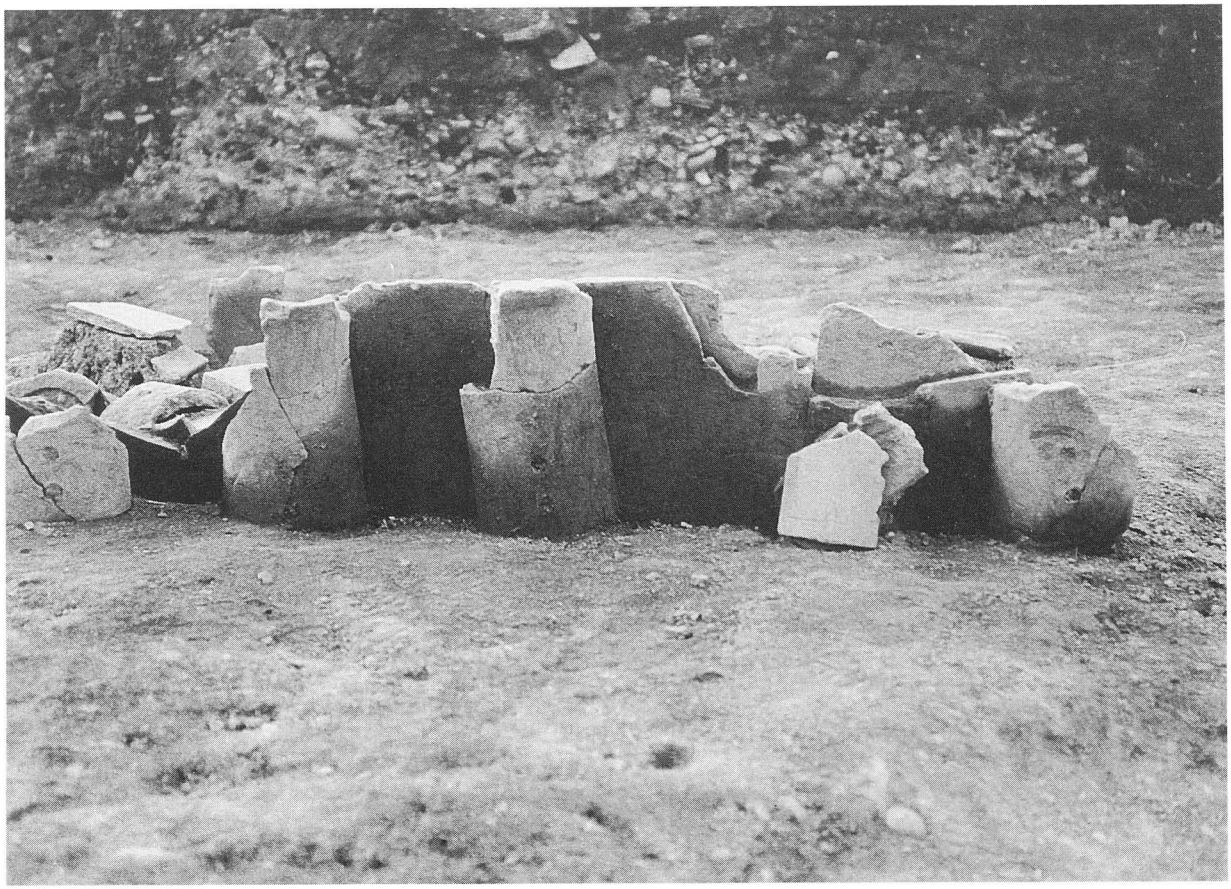
5　ＳＢ－301(南から)



6　ＳＡ－301 ＳＢ－301（北から）

7　瓦出土状況

8　ＳＫ－509(南から)



9　瓦列検出状況（東から）

10　瓦列実測風景

報告書抄録

ふりがな	たかまつじょうあと（さくじまる）
書名	高松城跡（作事丸）
副書名	(財)松平公益会事務所改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	高松市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第41集
編集者名	大嶋　和則
編集機関	高松市教育委員会
所在地	〒760-8571　高松市番町一丁目8番15号
発行年月日	1999年3月31日

ふりがな 所蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
たかまつじょうあと 高松城跡 （さくじまる） （作事丸）	たかまつしたまもちょう 高松市玉藻町	37201		34° 20′ 45″	134° 3′ 20″	97.11.20 ～ 97.12.25	300㎡	(財)松平公益会事務所改築

所蔵遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高松城跡 （作事丸）	城郭	江戸時代	礎石建物 瓦列状遺構 土坑 溝 柱穴	瓦 陶磁器 キセル 弥生土器	

（財）松平公益会事務所改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

高松城跡（作事丸）

平成11年3月31日

編　集　高松市教育委員会
　　高松市番町1丁目8番15号
発　行　高松市教育委員会
印　刷　サンプリント㈱

高松城跡（作
3120001195